

第2回

朝鮮人・中国人 強制連行・強制労働を考える 全国交流集会《報告集》

1991. 7. 27~28 兵庫県・西宮市



第2回 朝鮮人・中国人 強制連行・強制労働を考える
全国交流集会実行委員会

〈 プ ロ グ ラ ム 〉

第1日<7月27日(土)>

全体集会 (13:00~16:00)

(於/西宮勤労会館 TEL0798-34-1662)

- ① あいさつ 実行委員会
- ② 3分間スピーチ I
- ③ 記念講演 歴史家 朴 慶 植氏
- ④ 3分間スピーチ II

分科会 I (16:00~17:30) (於/西宮勤労会館)

食事 (弁当) (17:30~18:00)

分科会 II (18:00~20:00) (於/西宮勤労会館)

※ 神戸学生青年センターへ移動
(JR西宮駅から六甲道駅下車 北東へ徒歩10分)

交流会 (21:00~)

(於/神戸学生青年センター TEL 078-851-2760)

第2日<7月28日(日)>

フィールドワーク (西宮市甲陽園の地下工場跡)

① 9:00 ②10:30 集合は、——

甲陽園小学校 (阪急電車甲陽園駅南東徒歩3分)

(①は神戸学生青年センターの宿泊者のみ)

「アリランのうた (朴壽南製作)」特別上映会
(10:00~11:50 一回のみ) (於/甲陽園小学校)

全体集会 (12:00~13:00) (於/甲陽園小学校)

日本の近代史は、アジア諸国への侵略の歴史でした。日中戦争時より始まった朝鮮人・中国人「強制連行」は、その侵略史の一断面です。

昨年5月の韓国ノ・テウ大統領の来日をひとつの契機として、朝鮮人強制連行問題がクローズアップされ、日本政府も被連行者の名簿調査を約束し、8月にその調査結果を発表しました。しかし、その調査がいかにずさんで不十分なものであったかは、発表名簿の人数があまりにも少なかったことや、政府発表後も民間研究グループが次々と新しい発見をしていることなどからも明らかです。

そのようななかで昨年8月、私たちは、名古屋において初めて「朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える全国交流集会」を開きました。全国各地で調査活動を行っている個人・グループが、経験を交流し、知識を提供しあうために集まったのです。多くの仲間と出会うなかで、情報を蓄積し、さまざまな活動の手法を学ぶことができました。また、政府・自治体・企業に対して、資料を公開させるための運動力量を結集させることができたと考えています。

集会後は、岐阜県久々利、瑞浪の地下工場跡を共同で調査し、その規模の大きさを知るとともに、地元の研究グループのこれまでの働きに感銘を受けました。

こうした最初の全国交流集会の成果を引き継ぎ、さらに発展させるために、今年7月、私たちは西宮市（兵庫県）で第2回交流集会を開きます。全国の新しい仲間が日ごろの活動を報告し、昨年参加したグループはこの1年間の成果を持ち寄って、ともに学び合う場としたいと思います。さらに、フィールド・ワークとして、西宮市甲陽園にある「朝鮮國獨立」の文字が残されている地下工場跡を訪ねます。

調査と研究の領域で、強制連行・強制労働の真実を掘り起こし、日本のアジア侵略の歴史の一面を究明していくため、第2回交流集会に全国の仲間の参加を呼びかけます。

（第2回交流集会「呼びかけ文」より）

目 次

＜第1日＞7月27日（土）

全体集会あいさつ

西宮市収入役	元田 五郎	5
戦争の記録を残す西宮市民の会	大月 良子	6

3分間スピーチ 全国各地のとりくみから

1 ピットムの会	本橋 正男	8
2 岡山玉野光南高校	青木 康嘉	9
3 大阪府朝鮮人強制連行真相調査団	園部 俊治	10
4 地上げ反対！ウトロを守る会	竹原 八郎	10
5 日吉台地下豪保存の会	小園 優子	11
6 佐賀大学留学生	金 旻 榮	12
7 三重県木本で虐殺された朝鮮人労働者 （李基允・裴相度）の追悼碑を建立する会	嶋田 実	13
8 香川県	浄土 卓也	14
9 強制連行の足跡を若者とたどる旅	加藤 慶二	14
10 韓国・朝鮮人BC級戦犯を支える会	田口 裕史	15
11 マンガン鉱山史を記録する会	李 貞 鎬	16
12 山形県	佐久間 昇	17
13 八王子の地下豪問題を考える会	斉藤 勉	17
14 花岡”蜂起”問題にこだわる会	石田 元博	18
15 高槻「タチソ」戦跡保存の会	太田 修	19
16 松代大本営を考える会	黒崎 裕子	20
17 三重県熊野市	中山 正人	21
18 朝鮮人従軍慰安婦問題を考える会	皇甫 康子	22
19 長生炭鉱の”水非常”を歴史に刻む会	澄田亀三郎	23
20 福岡県	金 光 烈	24
21 元軍属	鄭 商 根	24
22 在日韓国青年連合	宋 悟	25

23 奈良県	池田 正枝 26
24 立教大学	山田 昭次 27
25 朝鮮人強制連行真相調査団	洪 祥 進 28
26 日本の戦争責任をハッキリさせる会	臼杵 敬子 29
27 石川県	川上 力男 30
28 亀島山地下工場を語り継ぐ会	花房 英利 30
29 指紋押捺制度を考える熊本の会	脇元 公明 31
30 中国人強制連行を考える会	田中 宏 32

記念講演「強制連行」調査の課題と展望

朴 慶 植 34

植民地支配、侵略戦争の問題／歴史認識の改革／市民運動の広がり／
／闘いとしての調査／緊急の課題／在日の問題提起／調査の課題／
強制連行政策／多種多様な連行政策／朝鮮人慰安婦／戦時動員の人数／
戦争末期の動員／朝鮮人軍人・軍属／戦時動員の方法／文献資料／
聞き取り／現地調査／日本人と朝鮮人の共同で／軍需工場の調査／
保存問題／戦後補償／再び、植民地支配、侵略戦争の問題へ

分科会

第1分科会 入門講座	44
講演① 朝鮮人強制連行と中国人強制連行	田中 宏 46
講演② 地域での調査の進め方	金 蓬 洙 52
第2分科会 「花岡蜂起事件」にアジア民衆との連帯をたぐる	56
第3分科会 土木建設工事と朝鮮人・中国人労働者	60
第4分科会 炭鉱・鉱山・軍需工場と強制連行	64
第5分科会 地下軍事施設建設工事と強制連行	68
第6分科会 軍人・軍属・慰安婦	71
第7分科会 教育実践—地域の在日の歴史と学校・社会教育	73
第8分科会 ビデオ（映像記録）	81
第9分科会 地域史のみなおし	83
第10分科会 戦争動員・強制連行・強制労働と戦後補償	89
交流会（於／神戸学生青年センター）	92

<第2日> 7月28日 (日)

フィールドワーク	94
セレモニー&ミニコンサート	96
映画『アリランのうた』上映会と全体集会	98
<資料>	
新聞報道	101
第2回交流集会賛同団体リスト	116
都道府県別参加者数	120
編集後記	120



全 体 集 会



友松信也 最初に、司会の3名が自己紹介をさせていただき、その後、プログラムのとおり進めていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

私は「戦争の記録を残す西宮市民の会」の事務局をしております友松と申します。

金静美 「三重県木本で虐殺された朝鮮人労働者（李基允・裴相度）の追悼碑を建立する会」の金です。

飛田雄一 神戸学生青年センターで働いております飛田と申します。よろしくお願いします。

（拍 手）

友松 それでは、皆様のお手元のプログラム、要綱に沿いまして、全体集会を4時まで行います。4時からは10の分科会に分かれ、

食事をはさみ午後8時まで、昨年の名古屋の集会以後、全国で活動されている報告を行いますので、よろしくお願いします。

今日、皆様のお手元にお配りしておりますが、この集会には85団体の参同を得ておりますので、あわせてご報告しておきたいと思います。

それでは最初に、西宮市を代表し、八木米次市長に替わり、元田五郎収入役からご挨拶をいただきます。

集会あいさつ

西宮市収入役 元田五郎



非常にお暑い中、今日と明日の2日間、しかも今日は夜遅くまで、明日は早朝から、第2回の朝鮮人・中国人強制連行強制労働を考える全国交流集会が、このように多数のご参加を得て西宮で開催されるにあたりまして、一言、ご挨拶を申し上げたいと存じます。

本日の交流集会には、西宮市長の八木米次がご招待をいただいたわけですが、他の公務の都合でどうしても出席できませんので、私が代わりましてご挨拶を申し上げることをご了承いただきたいと存じます。

第二次世界大戦の末期に、軍部によりまして全国各地で建設されました地下壕、地下トンネルと、その建設に従事いたしました労働者の実態につき、長年にわたりまして地道な調査活動を続けて来られました皆様方のご努力と、昨年に引き続き、このような全国交流集会をもって1年間の成果の交換を行い、戦争の歴史の一面を究明する学習の場とされますことは、平和・非核宣言をしております本市にとりましても、まことに有意義であり、深く敬意を表する次第でございます。

当西宮市におきましては、皆様方ご存じと思いますけれども、海軍の戦闘機で「紫電改」

をつくっておりました川西航空機株式会社の大規模な地下工場が、この会場の北側にあたる苦楽園と甲陽園という地域の、山麓一帯に建設されたという記録がございます。しかしながら、苦楽園のほうはもうすでに住宅地になっており、その位置を確認することができない状態になっております。甲陽園の地下壕につきましても、開発、あるいは陥没により、すでに失われたり、入り口が閉鎖されているものもありますが、7ヵ所で地下トンネルが確認され、現在調査が可能である2ヵ所について、ただいま司会をされた友松市議員等のお力添えもあり、議会で予算をとっていただき、測量や地質調査をしたわけでございます。

あわせて、現状を長く保管するために、16ミリのフィルムに記録し、トンネル内の壁面に書かれておりました「朝鮮國獨立」、他の文字もごございますけれども、それらの文字をパネル写真として残すことにしたわけでございます。今後、戦争の傷跡をいまに伝えるものとして、現状のまま保存しながら、安全性の監視を今後続けていきたいと考えておる次第でございます。あわせて地質調査も3年ぐらいに1回はやりたいと考えております。

本市における地下壕の状態はそういったものでございます。

皆さん方は全国からお集まりいただいて、熱心にご研究、討議をされるわけですが、何ぶん日本の7月から8月は炎暑、酷暑の頃でございます。十分に健康には注意をされまして、このたびの交流集会が実り多い集会になりますことをひたすら祈念いたしまして、地元の八木市長に代わりましてのご挨拶に替えさせていただきます。どうもありがとうございました。

友松 ありがとうございます。

続きまして、「戦争の記録を残す西宮市民の会」の代表をしております小田実氏が急用のため東京に今朝参りましたので、代わりま

して、同会のメンバーであります西宮市会議員の大槻良子さんから、地元の市民団体を代表してご挨拶をさせていただきます。

戦争の記録を残す西宮市民の会 大槻良子



こんにちわ。本日はほんとうにお暑中、よくお越し下さいました。

昨年、第1回の全国交流会が名古屋で開かれ、その後、各地でいろんな運動が展開されてきて、新しい事実が次々と明らかにされてきたという成果を生んでおります。今日、明日と2日間にわたって第2回の全国交流会が開かれます西宮市には、先ほどお話がありましたように強制労働の証としてのトンネルがございます。これは1945年8月まで掘られていたもので、トンネル 5,000㎡と半地下の5,600㎡からなり、川西航空機地下工場などになるものであったということです。

私たちは市の援助も受けながら、このトンネルの保存調査、記録を残す運動をしてまいりました。聞き取り調査によりますと、この工事に従事したのは、日本人も少しはおりましたが、ほとんどが朝鮮人の方で、その数は2千人から5千人ぐらいだったこと、朝鮮で畑仕事をしているときに無理矢理トラックで連行されてきたことなどが明らかにされております。また、現場調査では「朝鮮國獨立」の文字がはっきりと残っております。判読が

しにくい文字もありますが、その他の文字も残っていることも確認されております。

私たちは、この「朝鮮國獨立」の文字の中にこめられました、ここで働かされていた人たちの思いをしっかりと受けとめ、朝鮮人・中国人の強制連行、強制労働の実態を明らかにしていかなければならないと考えております。戦争の隠された部分を明らかにすることは、戦争の実態そのものが明らかになることだと考えております。

西宮のことにもう少し触れさせていただきますと、西宮市は人口43万人で、大阪と神戸を結ぶ住宅地として、近年、人口が非常に増加しております。特に、トンネルがある甲陽園一带は西宮の中でも高級住宅地として開発ラッシュにみまわれているところです。この会の代表者であります小田実さんは、トンネルのことを紹介するにあたり、「現在の日本の中流の暮らしの足元に、戦争の最も醜い部分が眠っている」といわれております。このことを明らかにすることが、私たちの任務であると訴えております。

この午後、続いて開かれます分科会は10に分かれております。皆様方は、この1年間の研究など、十分にそれぞれの分科会で話し合わせ、運動を広げていく力を得て、次の1年に向けて各地で活動をさらに深めていかれるに違いないと私は確信しております。本日の集会を、「中流の暮らし」の集まる西宮で、この課題を解決する第一歩にぜひともしていきたい、お互いにこの場で皆様とともに確認したいと思います。どうぞ、しっかりと、ともにがんばっていきましょう。(拍手)

友松 ありがとうございました。

それでは次に3分間スピーチのプログラムに移ります。ここで司会を飛田さんに替わります。

全国各地のとりくみから

飛田 それでは、『資料集』10ページにあるプログラムを開けて下さるようお願いいたします。

金静美さんがタイムキーパーで、2分半ほどになると合図をしますので、必ず3分以内で終わっていただくようお願いします。

19名の方が3分間スピーチということで書いておりますが、朴慶植先生の記念講演の前にすべてできればと考えています。後半の3分間スピーチは事務局で検討し、優先順位として、できるだけ遠隔地から初めて登場された方を中心に、10数名選びました方をお願いしたいと思います。

それでは、この順序に従って行いますので、それぞれの方、準備をお願いします。

昨年、初めて行いました名古屋の交流集会をおもに準備していただきました「ピットムの会」の本橋さんからお願いします。



への関心の高まりをうかがい知ることができます。

今回は、その後のピットムの会の活動を簡単に報告させていただきます。

私たちは、この1年間の活動報告とでもいうべきものを〈ノーモア南京〉名古屋の会、日朝協会愛知県連合会と共同で、『証言する風景』という本を風媒社から出版しました。名古屋はかつて、いまもそうですけれども、軍需都市ということもあって、周辺には地下壕跡、慰霊碑、ダム、発電所等、様々な形で侵略の爪跡が残っています。そのうちの主要なものをピックアップし、写真に解説をつけ、まとめたものです。中でも三ヶ根（さんがね）山にある殉国七士の廟が異彩を放っていますけれども、侵略者の側の視点をも含めて記録することによって、逆に日本人と朝鮮人との間に横たわっている溝を照らし出すことができるのではないかと思います。詳しくは、この会場に持ってきていますので、見ていただきたいと思います。よろしくお願いします。

3 分間スピーチ 1

ピットムの会

本橋正男

私たち「ピットムの会」は、昨年名古屋集会において、第1回全国交流集会を開催しました。昨年の集会は、被強制連行者の名簿探しのブームに乗って、様々な話題を振りまいたという側面があったかと思いますが、今回はもう昨年とは違います。呼びかけ団体だけを見ても31から85へと飛躍的にふえており、運動の輪がさらに広がっています。私たちの会も、様々な団体から久々利（くくり）地下壕を案内してほしいという依頼を受け、ここにもはっきりと強制連行、強制労働問題

また、写真集を作成する過程で、可児（かに）市の久々利地下工場跡の近くに、高射砲基地跡や地下壕跡を新たに発見しており、可児市一帯で巨大なプロジェクトが進行していたと推測でき、全容の解明が課題として残されました。それからもう1点、昨年10月、韓国の「太平洋戦争犠牲者遺族会」「1・20同志会」が、日本国を被告として公式謝罪と賠償を求めて提訴しました。そのとき来日した人々は軍人、軍属として徴用され、負傷した方、戦死して二度と会うことができなくなってしまった家族の方々でした。そのうちの14名が名古屋を訪れ、私たちは支援集会を開きました。

盧泰愚大統領が来日し、謝罪のセレモニーが行われたのは、5ヵ月前のことでした。太平洋戦争犠牲者遺族会の訴えは、あらためて日本人と朝鮮人、韓国人の歴史意識のギャップを浮き彫りにし、政治的結着で解決できる問題ではないことを物語っています。それだけではなく侵略の歴史の清算を求める様々の動きが表面化してきており、強制連行、強制労働の問題も新たな局面を迎えていると思います。

現在、ピットムの会ではそういった動きに対応すべく、新たに編集部をつくって、情報交換の場としてネットワーク通信『ぼんそんふぁ』を隔月に発行し、3号に至っています。

今後とも皆様とともに運動を進めていきたいと思っています。よろしくお願いします。（拍手）

3分間スピーチ 2

岡山県立玉野光南高校

青木康嘉

玉野という町は三井造船の城下町のようなところでありまして、そこで1944年から45年にかけて朝鮮、韓国からやってきた3,500名のことを調べました。それを昨年、『「史



実」になれなかった「真実」として、出版いたしました。私たちの研究の特色は、調査したことを韓国の東亜日報に出してもらったことにより、韓国で証言者が出てきたということです。本の中に写真がありますが、その頃の大変貴重な写真もあわせて11枚残っており、強制労働の実態が非常に生々しく出てきました。しかし、韓国での証言者が最初からしゃべってくれたかという、そうではなく、しゃべりたくない、話したくない、というような状況でした。その中でも私たちは粘り強く、真実を明らかにすることによって日本と韓国との関係が近くて近いものになりますと訴えることで、初めてしゃべってもらったわけであります。

もう一つの特徴は、私たちが探した3,500人の協和隊の約8割が、朝鮮民主主義人民共和国に属する人なんです。咸鏡南道、咸鏡北道、江原道の人たちからなっています。私たちは韓国のほうで人を呼んで、昨年、シンポジウムを開きました。今年、その3,500名の中で16名が死亡されたんですが、そのうち韓国の遺族の方のところへ、この夏に訪ねていきます。私たちは、こうした活動を通じて、韓国と日本の関係をより深くしていこうかなと思っています。

第7分科会におりますから、この冊子や写真を見たい人は、どうぞ、そちらのほうへ来

て下さい。

以上です。(拍手)

3分間スピーチ 3

大阪府朝鮮人強制連行真相調査団

園部俊治



大阪府の真相調査団では、現在、生玉（いくたま）公園とかの地下壕、大阪造兵廠、大阪城の隣にあります、それから京都、三田など、大阪を離れたところにある軍需工場の疎開施設など、いろんな強制連行についての調査をしています。私は、そのうちの、大阪府の一番南のほうにある多奈川（たながわ）のことについて、少し報告してみたいと思います。

大阪府と和歌山の県境に、多奈川という非常に小さな町があります。現在、そこは関西電力の発電所がありますが、実はそこに太平洋戦争中、海軍のドック、川崎重工の潜水艦の工場が秘密裏に、大急ぎでつくられたということがあったのです。急ごしらえの工事ですから、そこにドックを掘る、あるいは元からあった屋根瓦の工場を追い出して潜水艦の工場をつくる、南海電鉄多奈川線の支線をつくるという工事を含まして、強制連行、それから徴用という強制労働、徴用逃がれ、アンコというんですか、そういう形でミックス

して、大体4～5千人ぐらいの朝鮮人が働かされていたということが、わかってきたんです。アメリカ軍の捕虜、刑務所の囚人、そのような人も動員された大変な工場があり、その建設工事がされたということです。

このような調査は地元の小中高校に務める、私を含めて6人が中心になってやっていたんですが、私たちは長年、大阪府の泉南の地で学校の仕事をして生徒に教えながら、こういうことを全然知らなかった。それが真相調査団の仕事に入れていただき、いろいろ事実がわかっていく中で、これは大変なことだ、いままでこういうことを調べなかったことに、ずいぶん恥ずかしい思いをしました。

地元の小中学校の配付する目的で、こういう本（『泉南における朝鮮人強制連行と強制労働』大阪府朝鮮人強制連行真相調査団岬町地元まとめの会）をつくりました。ここにも持ってきておりますので、興味があれば、よろしく願います。

以上です。(拍手)

3分間スピーチ 4

地上げ反対！ウトロを守る会

竹原八郎



京都府宇治市伊勢田町ウトロ、そういう地名のところがります。そこには在日韓国朝

鮮人の皆さん、およそ80世帯、380人の方々が住んでおられます。ところが、この土地の所有名義人であった日産車体が、住民の方にほとんど知らせることもなく、6,400坪の土地を不動産業者に売却をしてしまいました。そのため、いまウトロの住民は土地明け渡し、建物収去という裁判の被告という形にされてしまっております。

ウトロというところは、いまから50年ほど前、1940年に軍用飛行機の製造工場と航空機乗員養成所、これをあわせ持つ軍事的な色彩の濃い、京都飛行場建設に働かされた朝鮮人労働者の飯場だったところです。戦争が終わって、働かされていた企業も、国の人も誰もいなくなる。そういう中で、朝鮮人はこの地に何の保障もなく放置をされてしまったわけです。国にも帰れないし、行くあてもなかった人たちは、戦後の苦しい生活をこの地でしのいできたわけです。そして、ようやく最近になってそれなりに落ちついた生活をなんとか取り戻せるという状況になってきたんですけれども、先ほど申しましたように、世界的に言えば戦後補償といった動きが各地に起こるという状況の中で、ウトロの住民は補償どころか、土地明け渡しを迫られるという事態になりました。

私たちは日産車体が土地を売却した以上、もはや関わりのないという態度を許すことはできませんし、戦前の侵略、戦後の補償の放棄、それに続くこのたびの事態を見過ごすことは、三度誤ちを繰り返すことになるというふうに考えます。いま、全国で戦争の責任、強制連行、戦後の補償を考える多くの皆さんと手を携えながら、ウトロを守る輪を大きなものにしていきたいと願って活動しています。どうぞ、よろしくお願いします。(拍手)

3分間スピーチ 5

日吉台地下壕保存の会

小園優子



日吉といいますのは、神奈川県横浜にある慶応大学の敷地の下に、連合艦隊の司令部が戦争中に移ってきた地下壕です。これは44年の9月、連合艦隊の司令部は軍艦の上に伝統的に設置されてきたものなんですけれども、もはや戦域が拡大してしまって、軍艦の上からだけでは司令が届かないとか、いろいろな事情があって、初めて陸上にあがってまいりました。

最初は司令部が入ったんですけれども、その後、引き続き海軍の人事局、経理局、航空本部、軍令部の一部、最後には艦成本部まで入るということで、地下壕が次々に掘られ、総計にして、慶応大学をはじめとして周辺地域を含めて2.6キロぐらいの地下壕があらこちらにできております。

その建設につきましては、44年の7月頃から軍の設営隊が入ったのが最初なんですけれども、やがては鉄道工業といまして、菅原通豪が民間の労働者を連れてきました。2千人ばかり連れてきたのですけれども、その中に、いまのところわかっているだけで700人ぐらいの強制連行の朝鮮人がいたのではないかなというふうなことが調べられています。よ

うやく保存会が2年ほど前に発足いたしました。これは何としてでも保存して、戦争と平和を考える何かのよすがにすべきだと思います。ただいま会員が400人ぐらいにやっとなったところです。

やはり日吉台地下壕をなんとか保存するための運動をやらなくちゃいけないんじゃないかということで、区役所は一応策定書というのをつくって、市のほうに去年の秋に提出したんですけども、いまのところ何の反応もないというふうな状況です。とにかく、全国には3,400ヵ所の地下トンネルがある中で、神奈川県には1,300ヵ所あるといわれてるんです。そのうちで、手をつけているのは、ようやく日吉台地下壕ぐらいではなかろうかと思うので、これからたくさんやらなければならないことを抱えております。

時間がないので、たくさんしゃべりたいことはあるんですけども、また機会があったら……。ありがとうございました。(拍手)

3分間スピーチ 6

佐賀大学留学生

金旻榮



皆さん、こんにちわ。

私は韓国全羅南道光州からの金と申します。いま、佐賀大に研究留学中ですが、私は

専門は韓国近代現代経済史で、その流れで朝鮮人強制連行問題を研究したいと思って、5年前から研究しております。

日本においては、強制連行問題についての研究史、そして研究者との交流、そして資料を集めることでしたが、いま、佐賀では明治鉱業の西杵炭鉱の資料が残っていて、大体5千点ぐらいですが、その中で25点ぐらいが戦前の資料で、経営資料として非常に価値があると思います。私、その中で区分だけ分析しておりますが、またそれではなくて、佐賀県内でお寺の住職さんを中心にして、いわば強制連行関係者の犠牲者の名簿を過去帳から探す作業が行われております。それは去年8月から始まって、これまで1年ぐらいかかりましたが、その結果が、今度、9月7日の日に慰霊祭のような形式で行われると思いますが、その中で257人の韓国の名前が出てきて、またその中で24体ぐらいの遺骨が発見されたそうです。

次に、これからの課題だと思いますことを話したいと思います。

まず、強制連行問題を見るとき、私なりに考えるのは、最初に強制連行の背景の問題です。もちろん実態とか、その発掘作業もいいと思いますが、どうしてその時代、強制連行問題があったかについてを、これから少し考えるのがいいんじゃないかと思っております。その実態もそのまま、事実羅列だけでなく、それをもっと科学的に分析するのが、これからの課題じゃないかと思っております。

それから、強制連行の影響です。それはもう韓国経済、朝鮮経済への影響だけでなく、日本の経済発展の中でどのような影響があったかということです。たとえば、イギリス産業革命の裏にはアイルランド移民問題があったと思います。それにつながって、これからの研究があったらいいと思います。

次の問題として、1939年から強制連行になっていった、その前の在日朝鮮人、いわば既住朝鮮人とどういようにつながるかの問題です。また植民地下、朝鮮人労働力移動の問題の解明のための前提作業として、いわば国際労働力移動、そして最近の日本において外国人労働者の問題、もっと研究するのがいいんじゃないかと思っております。

最後として、今日、こっちに来てほんとうにすばらしい集会だと思いました。その意味で、このような発言の機会をいただきまして、まことにありがたいと思いますが、これからは韓国内でこのような集会があって、また交流したいと思います。よろしくお願いいたします。(拍手)

3分間スピーチ 7

三重県木本で虐殺された朝鮮人労働者(李基允・裴相度)の追悼碑を建立する会

嶋田実



3分間という短い時間ですので、会のあらましとか、その間の活動報告、それからパンフにあるような追悼碑を建立する意義について全部を報告するのはまず不可能ですので、この場では、去年から1年間の活動と、意義について簡単に報告したいと思います。詳し

い内容については、この後予定されている第9分科会でやりますので、そちらのほうに参加されるか、もしくは資料コーナーのほうで『六十三年後からの出発』という青い本がありますので、そちらのほうをぜひ購読して下さい。

私たちの会は、一九八八年からこの活動を始めたわけですが、その間、大阪を中心に三重、名古屋のメンバーで活動が続けてきました。月に1回、例会を持ったり、2ヵ月か3ヵ月に1回のペースで会報を発行してきました。それと同時に、実際の事件の現場であるいまの熊野市、昔の熊野町に足を運んで、現地調査や地元の人たちとの意見交流会を何度か行ってきました。僕らの運動というのは、地元の熊野市役所と市民、それから私たちが協力して、地元で2人の追悼碑を建立しようということで活動してきました。計6回、市役所交渉を持ってきました。それで6回目、4月の市役所交渉で、ようやく市役所が碑の建立に対して前向きの姿勢を見せてくれました。いままでは宗教上の理由とか、全然話にならなかったんですけども、ついに前回の交渉で、前向きな姿勢を見せてくれました。

ただ、この間の熊野市の変化において若干後退しているような感じがありますけども、いったんはそういう姿勢を見せてくれたこと自体は、大きな進歩だと思っています。

意義ですけども、追悼碑を建てるのが僕らの目的じゃないんですね。地域史の見直しとか、そういったことを碑の建立を行うことによってできたらいいなというふうに思ってます。まして、実際に建てるまでには、まだまだクリアしなきゃいけない問題が多々あると思いますけども、ぜひ、よい知恵とかがあったら、分科会等で教えてくれたらうれしいと思います。

これで簡単ですが、終わります。(拍手)

香川県

3分間スピーチ 8

浄土卓也



「昨年もこの会に参加させていただいたんですけど、昨年からの際立った香川県での動きということをおもに紹介したいと思います。

まず一つは、これは全国的にそういう動きがあるんじゃないかと思いますが、在日本朝鮮人総連合会、通常「総連」と呼んでおりますが、そこが中心になって、いま全国的に強制連行の真相を究明する調査団がつくられているんじゃないかと思うんですけど、香川県でも昨年の11月にそれができて、以後、四国各県、四国には香川県を入れて四つ県がありますけど、全部に調査団ができました。

ついこの間、その調査団の四国の協議会といったものが開かれまして、そこで四国を統一的に強制連行を明らかにする取り組みをいま始めているわけです。私自身は、約20年前から個人でずっと探り続けてきて、今日も個人で参加した者なんですけど、調査団といったものができてから、一層具体的な究明が進みまして、来年になるんじゃないかと思うんですけど、四国の強制連行というような形

で本にもまとめる取り組みをしています。

その中で、20年近く私が個人的に探っていて、全く知らなかったことがつい最近明らかになってきました。香川県は軍需工場もそんなにはありませんでしたし、軍事の施設もそんなにたくさんないところなんです。これは飛行場なんですけど、実は朝鮮から慰安婦が連れて来られていた。まだはっきりしたことは明らかになっていないんですけど、私にとっては全く衝撃的なことが、つい最近、そのことを知っている方に会いました。まだ、具体的な聞き取りはできていないわけですけど、そういうような全く新しいことなんかも出てきつつあるわけです。

私一人の取組みであったものも、いま香川県では組織的に取り組まれる中で、たくさんのがいま明らかになってきつつあります。こういうことの一端を来年には本にして出せるんじゃないかと思っていますので、また機会がありましたら、読んでいただけたらと思います。(拍手)

3分間スピーチ 9

強制連行の足跡を若者とたどる旅
加藤慶二



「強制連行の足跡を若者とたどる旅」というのを主宰しております。

市民運動としてやっておりますけれども、九州もご多聞に漏れず、数多くの強制連行が圧倒的に、また多数行われた場所です。もちろん、九州が一番朝鮮半島に近いということもありますし、下関に関釜連絡船で連れて来られた人たちが九州の各地に送り込まれたという事柄があるわけです。

そういう九州の中で、私たちのところも在日の一世が1割をきりました。そして、強制連行の跡地はどんどんと取り壊されております。そういうところを、私たちは若い人たちの目で実際に見ていただき、肌で触れていただき、耳で聞いていただくことによって、学校の先生もたくさんみえておりますけれども、もはや公教育で期待できない実地の教育を私たちは若い人たちと一緒にやっていきたいと思っております。

もう一つの目的は、私自身も指紋押捺問題をずっとやっておりますけれども、強制連行が観念であったわけです。具体的にその陰でたくさんの命が、名前がある人たちが殺されていった事実があるわけですが、「強制連行」という四文字に、それが概念として固まっている事柄について、実際にどういう事柄であったのかということを自分たちで勉強していこうという市民運動の人たちが集まって、3年前から始めました。

今年も行きますけれども、約60人以上の方々、その半分以上が中学生、高校生、それから20代の若者です。ほんとに手づくりで行ってますし、9日間、8月の15日に韓国に着き、それから下関から釜山、慶州、大邱、水原、天安、ソウル、それから釜山に帰りまして、また関釜連絡船に乗りまして下関、北九州、筑豊、大牟田、阿蘇、熊本、大村収容所、長崎、高島、これを9日間で行きます。若い人たちに費用は5万5千円で行かせます。そのために、一人について3万5千円ずつの補助を出しながらやっています。

詳しい事柄は、資料集の46ページ、47

ページにありますから、どうぞご覧下さい。私たちがどんなに感動的な旅をしてきたかということを『強制連行の足跡を若者とたどる旅 90年版』にまとめておりますので、ぜひお買い求めいただきたいと思います。200冊売れますと、一人の若い人が、中学生が旅に参加できます。どうぞ、お買い求め下さい。それから中学生、高校生は全国的に集まってまいります。ぜひ、皆さん方の近くの中学生、高校生、来年も8月15日に出発して8月22日—皆さん、ご存じでしょうか。1910年8月22日、韓国併合を強行調印させた日です。私たちは歴史を逆にさかのぼっていくことによって、8月15日に朝戦半島に着く、その歴史の逆戻りの中で、若い人たちの感性に私たちが行ってきた事柄、祖父が行ってきた事柄と一緒に体験していこうということを試みております。よろしくお願いいたします。(拍手)

3分間スピーチ 10

韓国・朝鮮人BC級戦犯を支える会
田口裕史



グループ紹介の欄にも書いておいたんですが、私たちの会はまだできて数ヶ月の非常に若いグループです。会を構成しているのも、若い日本人と朝鮮人です。私たちは、

朝鮮人BC級戦犯の問題に関して、次の二つの点を問題にしています。

まず第1点として、朝鮮人が日本の戦争に日本人として動員され、しかも、その責任まで負わされて戦犯となったということ。戦後の戦犯裁判では148名の朝鮮人が有罪判決を受けて、うち23名が死刑になっています。それから2点目として、彼ら朝鮮人元BC級戦犯が戦後日本政府に30年間以上にわたって、補償要求をしているんですけども、それに対して日本政府が一貫して無視し続けているということ。この2点を問題にしています。

そこで、私たち支える会は次のような活動を行っています。一つは、聞き取り調査を行って、朝鮮人が日本の戦争責任を負わされていった歴史を、個々のケースに即して詳しく調べあげていくということです。それから2番目として、日本政府に対して、彼らへの謝罪と補償を行うことを要求していくことです。非常に悲しいことなんですけれども、当事者の方たちは非常に高齢で、次々と亡くなっています。実は先日も1人の方が亡くなりました。補償が行われないうちに当事者が亡くなるということに対して、私たちは非常に強い悲しみと悔しさと怒りを感じています。日本政府による補償は、何としても実現させたいというふうに考えています。

それから、私たちがこの会の活動を通じて彼らとつきあっていく中で、自分たちが生きてきた時代は辛く苦しかったけれども、私たち若い日本人と朝鮮人に未来への希望を託してくれるかどうかということを、僕は大切に考えています。当事者の死に接して、私はその重い責任を、いま自分自身に厳しく問うています。

それから最後に、实际的に呼びかけをします。お金がないのでカンパを下さい。どうもありがとうございました。(拍手)

3分間スピーチ 11
マンガン鉱山史を記録する会
李貞鎬



(非常にゆっくりと階段を上がって)

この資料の丹波マンガン記念館の館長の李貞鎬です。この階段上がっただけで、もうお話するどころやない。あと、第9分科会でいろいろ自分のつくったことをお話しますので、そのときに、そこへ来て下さいませ。3分では、何をしゃべることもできません。

それと、一つ自慢話を言えば、トンネルの中というか、鉱内、穴の中というか、そのところを何ぼ歩いておっても、上向いたら、この岩石は落ちるか落ちんか、ということがわかるほど長いこと、トンネルの中の仕事をしたということです。赤ん坊も3年たちゃ三つになるというたが、40年もやったら、それぐらいのことはできますので、皆さん、保存する会というのが、この記録によるとずいぶん勇ましくやられるようなことになってますが、ぜひ、ご相談下さい。設計も、施工もいたします。

私は1932年生まれで、マンガンの選鉱場とか、そういうところで育ち、小学校卒業してからすぐマンガン鉱山に仕事して、それで日本全国で一番最後のマンガン業者となった。あんまり自慢にならんけども、一番最後

までマンガン鉱山やったから、マンガンの歴史を残すという使命を負わされたような格好になりました。その現物をつくっておけば、保育園の子どもでも、なるほど、朝鮮人が狭いところで仕事したな、過酷やなということはわかるようになってますので、皆さんはせいぜい、松代もいいけど、私のとこの記念館も見に来て下さい。つくられるお方は、絶対に参考になります。

以上です。どうぞ、よろしく。(拍手)

3分間スピーチ 12

山形県

佐久間昇



大変、感激的な話の後に大変申しわけないんですけど、私は山形県の鶴岡からやってまいりました佐久間昇です。

山形県は、あまり朝鮮人の強制連行については、そういういろいろ知られてないんですけど、いまからもう16年も前になりますか、この会場にいらっしゃる立教大学の山田先生を団長とする調査団が山形県内に入っている調査して下さい。そのとき、私は単なる、俗にいう郷土史というような立場で、たまたま自分が編集にかかわっていた大蔵村の永松鉱山について水先案内するということから同行させていただいた。それがき

かけで、いろいろと、なおさらに自分なりにも調べてきた。

いまから8年前になりますか、『山形近代史研究』の第5号に、「太平洋戦争下山形県における朝鮮人労働者の強制連行をめぐって」なんていう、あえて意図的に中途半端な表題のもとに、山田先生からいただいた資料などをもとにして書かせていただいたんですけども、ほんとの私の意図するところは、私もまだ、こんな白髪頭ですけども、中学校の現職教員ですので、定年退職でもしたら、それまで調べて、もう少しきちっとした報告をしたい、そういうつもりで「めぐって」というような中途半端な表題にしたわけですけども。先ほどのどなた様かの話にもありましたように、もっと強制連行そのものを、単なる事実経過を明らかにするだけでなく、その背景にあるものは何であったとか、その前史について、あるいは地域史等の関係について、もっと明らかにされるべきであると思っています。

私、そういうことで、それなりに今日は勉強できるんじゃないかと思って、勉強させてもらいたいという一念で初めて参加させていただきました。よろしく願いしたい。先ほど園部先生ですか、私と同じような教師であるようですが、自分たちが無知であったことについて、知る権利、事実を知る権利があるし、同時に我々教師としてはそれを知らせる義務もあるんじゃないかと、そんなことを感じております。そういう意味でも、一つよろしく勉強させていただきたい。さらに、何らかの情報をお持ちの方、ご協力願いたいと思います。(拍手)

3分間スピーチ 13

八王子の地下壕問題を考える会

斉藤勉

3分間スピーチの目次のほうには、「浅川地



下壕と朝鮮人労働について」と書いてあるんですが、これについてはまた第5分科会のほうでお話をしますので、ちょっと保存のことについて一つだけお話をしておきたいと思います。

浅川は、いまは浅川と呼ばれてませんが、高尾といいます。東京の西のはずれ、高尾山という山がありますけども、その一帯が高尾と呼ばれているんですね。そのところに戦争末、1944年に軍が大きな地下壕を3ヵ所掘ったんです。掘ったのは、もちろんほとんどが朝鮮の方々です。いままでは黙って眠ってたんですけども、最近になって、その1ヵ所の山をトンネルなどを崩して私立高校をつくろうといった話が持ち上がりました。私立高校は八王寺実践高校といいまして、女子バレーボールで非常に有名だと思んですけども、その学校なんですね。

そして、地元のほうには反対があるんですけども、一応、都の審議会のほうでもOKが出たところから、地元との合意事項もあるんですけども、それを無視して、山を崩してトンネルを埋めて高校をつくろうとしているわけです。

我々としても、これはほっとけないということから、「八王寺の地下壕問題を考える会」として去年、地下壕保存と博物館の建設を求める請願を市議会のほうに出しましたとこ

ろ、今年の3月に採択になりまして、現在、採択された後、市のほうでどのようにして保存をするのか、どのようにして博物館をつくっていくのか、どの部署が担当してどんなことをやるのかということを見守っている状況なんです。

高尾山の周辺は、いわゆる住宅地としてだいぶ注目されています。それから首都圏中央連絡道路、いわゆる圏央道というのが建設されていまして、それに伴う大規模自然破壊も起こりつつあるわけですね。そういったことと並んで、この地下壕の保存がされるのかどうか、非常に我々は危惧しているわけです。それで、こういう請願を出したわけです。

今後、請願が採択されたことによって市が動き出すと思うんですけども、そういったものを我々は監視していくとともに、地下壕をめぐる様々の問題、たとえば所有権の問題、たまたま地下壕の上に住宅がありまして、どうも土かぶりか2mから3mぐらいしかないところがあるんですね。そういったところは、やはり埋め戻さなければいけないので、そういった場合、どうしたらいいのか、そういったところに責任があるのか、そういったことをいろいろと考えていきたいなと思っています。

地下壕全体のことについては第5分科会のほう、あるいはちょっとした本にまとめましたので、そちらでご覧になっていただければいいと思います。どうも、失礼しました。(拍手)

3分間スピーチ 14

花岡“蜂起”問題にこだわる会
石田元博

3分間ではあまり話もできませんので、第2分科会のほうで事件の経過とか意味性も含めてやりますので、ぜひ、そちらに参加してもらいたいというふうに思います。



私たち、1989年に北京で花岡事件受難者
 聯誼会が鹿島建設に対して、公開書簡という
 形で3項目の要求を出していったわけです。
 それはまず強制連行、強制労働の謝罪をせよ
 というのと、事件そのものを後世の学習の
 ための会館をつくれ、それと受難者一人あた
 りに対する賠償金を支払えという要求を出し
 たわけです。これに対して、鹿島建設は昨年
 6月、多くの新聞報道でもありましたけども、
 企業として初めて、生存者を前にして、企業
 にも強制連行、強制労働等の責任がある、と
 いうふうに認めていたわけです。その後、鹿
 島建設は強制連行は一企業の問題ではない、
 国策の問題であって、国の問題やというよう
 な態度で、その後の交渉等は全然進展しなか
 ったわけです。

はたして、強制連行は国がかってにやった
 のか。そうじゃないわけですね。これは、つ
 い最近明らかになったんですけども、北海道
 の地崎組という土建会社があるわけですが
 も、その強制連行関係の資料をアメリカの
 GHQが押収して、アメリカ公文書館にあっ
 たものを、日本の国会図書館が写真撮影して
 マイクロフィッシュで公開している。その資
 料の中にあったんですけども、そもその始
 まりは、1939年に土建業界も含めて、強制連
 行せえ、人間を確保するにはそれしかないん
 やということで、企業から政府に訴えて、強

制連行が企てられてきたわけです。こういっ
 たことが初めてわかったんですけども、私た
 ちはそういったことを含めて、花岡事件受難
 者聯誼会が出した要求を自らの、私たちの責
 任として、今後も日本の政府なり企業に対し
 て責任追求していきたいというふうに思っ
 ています。

以上です。(拍手)

3分間スピーチ 15

高槻「タチソ」戦跡保存の会

大田修



本来ですと、代表をします宇津木さんが
 来られる予定でしたけども、どうしても今日
 は病院に行かなあかんということです、
 ピンチヒッターでやらさせていただきます。6
 時からの分科会には参加できるやろというお
 話でしたので、詳しいことは、また分科会
 でお話をさせていただけるものと思ってお
 ります。

高槻は、ご存じのように戦国末期の豊臣秀
 吉と明智光秀ですかね、天王山の戦いがあ
 った、すぐ南のところ。そこに成合（なり
 あい）という谷がありまして、そこにトンネ
 ルが掘られたということです。

米軍の調査では 3,500 人ぐらいというふ
 うな記録が残っておりますけれども、聞き取

り調査では、とてもそういう数字ではない、家族等含めれば2万ないし3万が来てたように思うというふうな証言はありますけれども、具体的な文書なりとしては、現在確認をされておりません。ただ、トンネルの数については30に近いトンネルの確認をしておりますし、10年ぐらい前から、宇津木さんなどが中心になって映画をつくるとか、聞き込み調査等をしておられまして、トンネル問題についての取組みはかなり前からやられておるわけです。保存についても、崩落が激しいので早急になんとかせねばならんのですけれども、先ほど挨拶されましたマンガン鉾の李さんにも来ていただいて、市なり府なりに7回ぐらいの交渉を1年間でもちましたけれども、なかなかちががきません。そこで、自分らで動くという段階にきているんじゃないかというふうに思っております。ただ、住宅開発が進んでおりまして、山の中でも坪30万というふうな金額の場所ですので、かなりむずかしい。

それと、私たちのところで当面問題なのは、埋火葬許可書というのがありまして、工事期間、44年の11月から45年の8月まで、その間に50人の朝鮮人が亡くなっておるということがわかっております。また、その中の10名については、頭蓋骨骨折とか墜落死とか、轢死、工事関係で死なれたということが半明しております。ただ、プライバシーの関係で市のほうは個人名まで明らかにしないという問題があるんですけれども、情報公開請求も含めて明らかにして、私たちはその人らの故郷に調査に行くなりということで、問題を深めていきたいと思っております。(拍手)

3分間スピーチ 16

松代大本営を考える会

黒崎裕子



私たち、「松代大本営を考える会」は、この1年、ことにこの半年の間、松代大本営工事に付随して置かれた朝鮮人慰安婦の家の移築保存に奔走しています。7年後の長野で行われる冬季オリンピックに関する環境整備とかで、この夏には家を取り壊すといわれたのが、今年の2月のことでした。3月には、韓国の「女子挺身隊問題対策協議会」代表で、元梨花女子大の尹貞玉（ユンジュンオク）さんも松代に來られて、この家を見て下さいました。慰安所の建物が当時のままで残っているのは大変めずらしい、ぜひ保存してほしいということでした。

私たちは、家の所有者へ譲り受けたいと再度申し入れまして、幸いなことに善意によって譲っていただくことになりました。6月8日、東京で「松代朝鮮人慰安婦の家を残そう実行委員会」というものを発足させました。現在、メンバー全員が夜も昼も、休日も、さけるだけの時間をあてて移築保存のためにがんばっています。昨年来、従軍慰安婦問題がクローズアップされてきたことと相まって、私たちの活動も重要なものとなり、本州にたぶん唯一と思われる、現存する慰安所の解体

移築の作業にてんてこ舞いをしているところです。

解体移築、保存には、資料館を最終的に建たいというふうに考えているんですが、4千万円の費用を必要とするという見積りがあります。なんとか実現したいと考えています。この会場にも呼びかけのチラシ、私たちの活動のニュース、募金のお願いなどを持ってきましたので、ぜひ、ご協力をお願いします。また、オレンジ色の『松代大本営跡を考える』という資料集をつくりまして販売しております。松代大本営の入門書にもなっていますので、ぜひ、こちらも読んで下さい。

松代大本営の地下壕が私たちに問いかけてくるのは、日本の加害の事実とその責任のことです。私たちは、この壕の闇が問いかける無言の言葉を受けとめ、日本の責任のことを追求していきたいと思っています。松代大本営の本格的解明は、まさにこれからで、日本のへそともいえる松代大本営は、強制連行、慰安婦の問題、植民地支配のシンボルとして、過去の責任を告発するモニュメントとして、ぜひ残していきたいと考えています。

地元の長野の移築業者の協力で、7月24日から解体を開始しました。8月10日までに解体作業を終えなければならないという日程です。ぜひ、作業のほうも、軽作業の手伝いをして下さる人、1日でも2日でもかまいませんので、実行委員会のほうに連絡して下さい。幸いです。

これからも松代大本営、慰安婦問題、強制連行の実態解明、遺骨、名簿を含めて、全容解明に関してやっていきたいと考えています。どうぞ、よろしくお願いします。

3分間スピーチ 17
三重県熊野市

中山正人

失礼します。先ほど「追悼碑を建立する



会」の報告で三重県の熊野市というのが出てまいりましたが、私、熊野市に在住しております高校の教員です。熊野市というところは三重県の一番南の端にございまして、非常に歴史の古い、小さな地方都市です。第二次大戦、太平洋戦争のときに、B29が本州を爆撃するのに紀伊半島から入った。紀伊半島が目印になって、熊野であるとか、尾鷲というような非常に小さな町の上をどんどん飛んで北上して、津、四日市、名古屋のほうの空襲をしたという目印になったところで、一切、そこには爆弾は落ちなかった。非常に静かな町なわけです。

静かな町で、落ちついた、しっとりとした歴史の古い町なんですが、私のいま住んでおる感じとしましては、戦争の傷跡が目に見えるものがございません。そして、過去にどういうことがあったのか。あるいは人権というようなことに対して非常に排他的なといえますか、いまのままでいいじゃないか、そういうふうな保守的な意識の強い町です。

そこで教員をしておりまして、子どもたちにどんなことを伝えていかなければならないのか、何を大切にしていかなければならないのか、そういうことをやはり考えていきたいということで、手探りで活動を始めております。何か大きな、具体的な問題に取り組んでおるわけではございませんので、他の会の皆

さんの報告と比べますと、非常に一般的なことで申しわけないんですけども、その地域の中で非常に大きな問題が、実はあるんだということがわかってまいりました。

先ほどの報告にありました、木本の町で強制連行された朝鮮人の人たちが、トンネル工事の中で地元の市民との間で騒動が起りまして、2名の労働者が殺されました。そのことを県外のたくさんの方々の動きで、熊野市に対して追悼碑を建立するという運動が外から始まりまして、それがもう3年になってきました。市がやっと、何らかのことはするというようなことを、初めて今年になって口に出しました。

ところが、その条件としまして、市民が動かないことにはできない、市民が何かそういう動きが出たら援助する、そういう条件を出しました。いよいよ、熊野の市民がそれをどうするかという段階にきております。私の「教育と命を考える」という一般的な問題というか、広く生活とか文化を考えていこうというふうな形で始めておりますが、当面する課題としては、追悼碑、慰霊碑をどういうふうにしていくか、市民がこれから平和とか反戦、人権、日本と朝鮮というような言葉に慣れていく、そういう言葉を大きな声で言うていく、それを聞いても何も不自然でないという空気をつくっていく、そういう土壌づくり、意識の土壌づくりをちょっとでもしていきたい。少しずつ、そういう町に変えていきたいというふうに思っております。勉強させていただきますので、よろしくお願いいたします。ありがとうございます。(拍手)

3分間スピーチ 18

朝鮮人従軍慰安婦問題を考える会

ふるんぽかんじょ
皇甫康子

お手元の資料集の中に、黄色のチラシが入っていると思うんですが、これをご覧になっ



て話を聞いていただけたらと思います。3分間ですので、文章にまとめてきました。よろしくお願いします。

私たちは「朝鮮人従軍慰安婦問題を考える会」として、今年の春から、ほんとうにまだ未熟なんですけれども、活動を開始しました。構成メンバーは在日朝鮮人・韓国人の2世、3世、30代を主とした女性が集まり、月1回、学習会などを重ねながら、この問題をなんとか私らの問題として考えたいというふうに発足しました。

従軍慰安婦問題というのは、戦後補償の中でも、ほんとうに問題化されにくい問題でした。戦後45年たっても、慰安婦として連れて来られた人達が名乗ってこれない、根強い差別が支配する社会構造、そして意識構造、何よりも20万人以上、うち8万人は従軍慰安婦といわれていますが、一の朝鮮人女性を、女子挺身隊として強制連行しておきながら、民間業者がやったこととして事実さえ認めようとしない日本政府の厚顔無恥で、無責任な姿勢が、真相究明をほんとうに困難にしています。

日本軍は15年戦争推進のために軍の志気を高めるため、欲望のはけ口として、性病の予防として、また朝鮮民族抹殺、撲滅の手段として、貞節を重んじる健康な14歳から40歳までの未婚の朝鮮人女性を、人間としてで

はなく、軍事物資として戦場を連れ歩きました。国策として、他民族を集団強姦するという、世界に類を見ない異常な行動を支えた、この差別的な意識が、現在の日本社会にも形を変えて存在すると、私は強く考えます。

敗戦間近に、証拠隠滅のために虐殺された多くの従軍慰安婦の人たち、そして解放後も祖国に帰る望みをたって、無権利状態のまま、またもや身をひさいで生きることを強要された女性たちの声なき叫びを、私たちがどれだけ自分のこととして感じることができるのか。私たち、在日同胞社会においても、変革していかなければならない問題がたくさんあると考えます。

従軍慰安婦問題を通して見える問題、そして私たちを取り巻くあらゆる事柄を一つずつ丁寧に問い直し、女性や子ども、すべての人々が生きやすい社会を求めたいと願うと同時に、この問題を知り直す機会として、このチラシにあるように、先ほどの紹介もありましたけども、韓国挺身隊問題をずっと戦後長きわたってやっていらっしゃる尹貞玉先生をお招きして講演会を初めて大阪で持ちたいと思います。パンフも春に発刊したんですけれども、これをもとに活動を進めています。今日、若干ですけれども、前売券を持っていますので、もし、よろしければ声をかけて下さい。よろしくお願いします。

3分間スピーチ 19
長生炭鉱の“水非常”を歴史に刻む会
澄田亀三郎

山口県の宇部から参りました澄田と申します。

宇部市というのは、下関から1時間ぐらいのところにある炭鉱で栄えた町ですが、そこで1942年2月3日に水没事故がありまして、183名の人がなくなりました。いまだに遺体はあがっておりません。そのうち、朝鮮人



が133名、実はこの数字も、現在私たちが調べたところではこうじゃないかということで、数字自体も正確にはまだわかっておりませんが、70%以上の人が朝鮮人であるということが、わからないまま事故が継承されようとしておりますので、私たちは「長生炭鉱の“水非常”を歴史に刻む会」というのをつくりました。

事故発生後、40年しまして、地元有力者と長生炭鉱の関係者の手で、長生炭鉱跡地に殉難者の碑というのが建立されました。その碑には「永遠に眠れ 安らかに眠れ 炭鉱（やま）の男たちよ」という文章が刻まれております。これでは、いまなお海底に眠っている人々の70%強が朝鮮人であるということがわからない。しかも、死者の名前が刻まれていない。このままにしておいてはいけないということで、私たちの会が始まったわけです。

実は、1985年に指紋押捺拒否者が大量に出てまいりました中で、宇部市でも3人の青年が指紋押捺を拒否いたしまして、それがきっかけで、支援する会ができました。その会が運動をしております中で、宇部の炭鉱跡を訪ねる集いというのをいたしまして、そのことで私なども、この長生炭鉱のことを実は知ったわけです。そういう中で、今年の2月3日、その事故のあった日に、現在あります殉

難者の碑を建てた人たちが50回忌をされましたが、それとは別に私たちだけで「長生炭鉱“水非常”を思い起こす集い」というのを開催いたしました。

そして、その会ができて、現在ピーヤの保存、それから証言集を含む資料の収集、日本人としての謝罪を含めた文言と、犠牲者全員の氏名を刻んだ碑の建立、こういう運動に取り組んでおります。詳しくは第4分科会で、私たちの会の代表の山口武信さんが発表して下さいます。どうぞ、よろしくお願い致します。(拍手)

〈ここで朴慶植氏の記念講演(後掲)〉

福岡県

3分間スピーチ 20

きむぐわんよる
金光烈



去年参加しまして、それ以後、あんまり芳しくなかった、そういうふうに思っております。ただ、去年1年間、非常に感じましたことは、私、先ほど朴先生がおっしゃっていったように、私がこの運動を1人でやってる当時は、あまり関心を持ってる人が多くありませんでした。それで、私はおもに、どういうふうにしてこれを調べあげるか、まず、その事実をきっちと調べなければならない、そし

て歴史というものは、まず、その事実をはっきり調べるのが非常に大事だ、そういうふうにして22年間やってきましたけども、最近になって、これは少し考えを新たにしなければならぬ、というふうなことを非常に強く感じました。

というのは、地方にもたくさんの人たちが、最近はこの問題に対して関心を持っております。これは大変いい傾向だと思いますが、その22年間の間に、私があちこちに案内をしたとかいうことが非常に多ございますが、案内をした、案内を聞いた、その人がまた他の人にお話をする、案内をするという中で、尾ひれがついたり背ひれがついて、おしまいにはとんでもない話になってしまった、そういうことがたくさんあります。

私は、この問題は単に私たち朝鮮人の問題じゃなくて、日本の歴史の問題であると考えております。そういう意味で、もしも、尾ひれをつけたり背ひれをつけて、そういうふうにして解釈してきますと、日本の政治がひんまがっていくのではないか、そういうふうに思います。

あくまでも正しい研究が必要である。まずはそのために、事実を事実として、かりに自分に不利であろうが不利でなかろうが、また研究者がそれに興味を持とうが持つまいが、それを正しく記録する必要がある、そして正しく評価する必要がある、そういうふうに思っております。

私は、この他にも幾つか問題を提起したいと思ってきましたけれども、時間がないので、これで終わります。(拍手)

元軍属

3分間スピーチ 21

ちよんさんぐん
鄭商根

私が鄭商根です。新聞とかテレビにたくさん出てますから、私のことを皆さんはわかっ

在日韓国青年連合

そん お
宋 悟

てると思いますけれども、私はここ（後の横断幕を示して）に書いているとおりに強制連行・強制労働、そして南洋のマーシャル諸島で、こんなに（義手を示して）けがして、病院船で日本に帰ってきて、現在、健康な姿で皆さんと会うことができましたことは、ほんとうにうれしいです。

この演壇に立ったというわけは、私が第1号、韓国人として大阪地方裁判所に裁判問題を、今年1月31日に裁判を起こした、私でございます。これが日本に住んでいる人では、私が第1号です。この裁判は、私個人のためと思って裁判をいまやっているわけではありません。全韓国人、全朝鮮人、日本に約500名以上、1,000名の方が私と同じ立場にある人が住んでいるらしいですけれども、住んでる場所がわかりませんので、私、確かに困ります。仲間をつくりたいです。この裁判を何かなんでもぜひとも勝って、皆さんにうれしい報告をしたいのが、私、胸がいっぱいです。

それは、私個人の問題ではありませんので、はっきりいえば、私と同じ立場の人の全部の問題でありますので、皆さん、協力を、支援をお願いしながら、挨拶終わります。（拍手）



在日韓国青年連合、韓青連を代表しまして、一言だけ、アピールを述べさせていただきます。

私たちが在日韓国青年連合、韓青連は、今年2月に既存の青年団体から分離し、一つには韓国の民主的な発展と祖国の自主的平和統一、第2番目には在日同胞の民族的權益の擁護、第3番目には世界の平和と進歩に貢献し得る、生き活きとした在日同胞2世、3世の青年大衆組織として結成、出発しました。

現在、大阪、京都、兵庫で9地域、支部において人間性の回復をめざすために韓国語を勉強し、そして祖国の歴史、民族文化を地域の同胞青年たちとともに学んでいます。今回初めて、この全国交流集会に参加させていただきました。この交流集会に参加し、そして今日の大きなテーマになっている強制労働・強制連行の問題を、再び、真相を明らかにし、取りかえす問題というのは、いまの大きく変化する、まさに歴史的な激動期である今であるからこそ、大きな意味を持っている側面もあるのではないかなというふうに思います。

私たちは、強制連行・強制労働の真相を明らかにし、それを再度とらえ返すというこの

運動が、まさに日韓の民衆、そしてアジアと日本の民衆の真の友好と連帯をつくり上げていく前提としての、健全な歴史認識をかちとっていく、そのような一つの闘いであるというふうに考えています。大きな国や小さな国があったとしても、強い者が弱い者をしいるという、そういう従属関係はあってはならないというふうに思います。主体的な人と、別な主体的な人が取り結ぶ、その主体的な関係こそが、人や、あるいは異なる民族同士が発展的な関係を取り結ぶ前提になるのではないかなというふうに思います。

今年の1月、海部首相が訪韓し、いわゆる91年問題に対する政治的な決着が形としてはつけられてきました。しかし、そこで取り結ばれた覚書の中には、日本帝国主義による朝鮮植民地支配に対する謝罪や、歴史的責任については一言も触れていません。こういう状況の中で民衆が指導し、強制労働・強制連行の真相を明らかにし、再びその意味を問いつ返すという闘いは、まさに日韓の民衆とアジアの民衆が、ほんとうの友好と連帯を取り結んでいくための健康な歴史認識を獲得していく、そのような闘いの一環であるというふうに私たちは考えています。

私たち韓青連も今年2月に結成され、試行錯誤しながら、多くの在日同胞青年とともに活動をしています。今日の全国交流集会に参加された全国各地の団体や人々の発言や交流の中から深く学びながら、私たちもこの運動の一画でがんばっていきたいと思います。よろしくお願いします。(拍手)

3分間スピーチ 23

奈良県

池田正枝

敗戦の色が濃くなった1944年、私はソウルの朝鮮の子どもたちが通っている国民学校の7年女子組を担当しておりました。もう、



ほんとに敗戦の色濃いとき、富山の軍需工場に児童を送れという命令が参りました。命令なんです。まだ、11歳の少女です。でも、これは命令なんです。私は毎晩、家庭訪問しました。

どの家庭も親子喧嘩でした。子どもたちはお国のためにということで、すぐ応じてくれましたけれども、かわいい11歳の子どもを、そんな海を越えた遠くへ、親は出たくありません。でも、5名の子どもが、そして後に1名の子どもが海を越えて渡ってくれました。

敗戦後、5人は帰ってきましたけれど、1人はどうしても生死がわかりませんでした。あの不二越のある富山のほうで、富山テレビさんが中心になって、たくさんの方のご好意で、今度ソウルへ行ってまいりました。そして、6人とも帰っては来たものの、あの動乱で3人は行方不明になっておりました。私が驚いたことは、私が書きました46年前の学籍簿、大切に保管して下さっている学校があったことです。そして、その学校は、日本人の学校の子どもの学籍簿も預って下さってました。

なんという、やさしい心でしょう。あの動乱のときは、その学籍簿をみんな土の中に埋めて、釜山に逃げられたということです。帰ってらしてから、それを掘り出して、きれいに、ちゃんと綴じ直してありました。

そしてもっと驚いたことには、私は母や、伯父や伯母、祖母父、たくさんの従兄弟たちをソウルで失っておりますが、敗戦の後、日本のお坊さんたちが土の中にその遺骨をみんな埋めてしまっていたのを全部掘り出して、朝鮮のお寺のほうで、きちんとお祭りしてありました。前までは反日感情が強くて、こういうことはおおぴらにできなかったけれど、5年前から慰霊祭ができるんです。初めは日本人も来たけれど、この頃さっぱり来ないので、帰ったら、こういう会をつくって、きちんと慰霊碑もつくってあるから来るように、ということをお聞きしました。

私はしかし、大変な間違いをしました。挺身隊即従軍慰安隊となっているソウルの地で、子どもたちは、もう家の中が滅茶苦茶になるほど大変なことになったんです。その教え子たちの子どもたちは、お母さんたちが挺身隊に行っていたことがわかったら離婚、そして職場で、居住地区で村八分になるんです。私は、やっと子どもたちと電話で話すことができました。日本語を忘れたという子どもたちが、「ありがとうございました、すみません」というのを繰り返します。それは私が言うべき言葉でした。

来年、子どもたちを奈良に呼びたいと思います。これから従軍慰安婦のこともしていきたいと思います。よろしく願いいたします。(拍手)

3分間スピーチ 24
立教大学

山田昭次

私は、ほんというとしゃべりたくはなかったんです。と申しますのは、私は70年代に集団で、ないしは個人で調査し、今日もお話になった山形の佐久間先生とか、福岡の金光烈さんとか、お知りあいになった次第です。ただし、80年代の初め以降、ちょっと強制連



行の調査から遠のいておりましたので、あまり話したくはなかったんです。

なにやってのかと言いますと、いろんなことを僕はやってる人間なんですけれども、一つの仕事としては、ちょうど82年頃、荒川で関東大震災のときに虐殺された朝鮮人の遺体発掘作業をやっているところへ、ハンセン病の療養所の全生園に暮らしておられる朝鮮人の方々が見えられて、そのときに私どものところにも、強制連行されてハンセン病になった人がいますよ、というお話があった。それがきっかけで、全生園へまいりましたわけでございます。

ところで、私がいまハンセンと申しましたが、はたして、ハンセンと言っておわかりになるか、ちょっと不安なんです。患者の方々は言いたがらない言葉ですが、あえてわかりやすくするために申しますと、ライ病です。この人たちはです。そこへ行っているうちに、僕は最初は強制連行された方々だけから話を聞いてたんですが、そのうち、これじゃ、とても済まないという気持ちに追いこめられたわけでありました。というのは、ハンセン病については非常に偏見が強いわけですね。その実態についてはもちろん、たいがいの方が、この病気になると肉親との関係を断ってしまうわけです。つまり、自分の親子、兄弟がこの病気になったとなると、就職も結婚も

できなくなるのが大部分であります。従って、朝鮮人・韓国人の皆さんは、故郷との関係を断つわけです。昨年の夏も、全く故郷と縁を切ったまま、亡くなられた方がありました。私は昨年の夏、故郷の縁を断って亡くなった、ある朝鮮人の肉親を探して韓国まで参りました。そして、その方のお兄さんはすでに亡くなり、お兄さんの子どもも亡くなっている。結局、探しあてたのはお兄さんのお孫さんしかいなかったんです。

この病気はそんなおそろしい病気じゃないんだ、ということを説得して骨を引き取ってもらいましたが、そういった方にぶつかったときに、どうしても強制連行された方だけ話を伺うという気持ちになれなくなって、そこで7～8年、その調査に時間を使い、89年に『生きぬいた証に』という本を、緑蔭書房から出しました。

そこからまた強制連行の問題に投げかえして何が言えるかという、いろんな脈絡の中で我々は考えていかなきゃいけないんじゃないかというふうに思いました。この病気は、伝染したからといって発病するとは限らないんです。ちょうどそのときに栄養失調、過労であると発病するわけです。ですから、在日朝鮮人の発病率は日本人の10倍であります。強制連行された果てに、この病気になった方がおります。はなはだしい場合には、夕張に強制連行されて逃亡する。逃亡した先が悪かったんです、長崎です。おわかりでしょうか、原爆でやられるわけです。それから数年して発病して、草津の療養所に入った方がいます。そして、そのお子さんもハンセン病になります。お子さんのうちのもう一人の方は、いま、あるところでタクシーの運転手をやっていらっしゃいますが、私の知り合い(の患者さん)は、息子が結婚をして子どもを持つことを楽しみにしてましたが、結局、息子さんは結婚はなさいませんでした。

なぜですか、おわかりでしょう。朝鮮人で

あって、かつハンセン病という二重の差別偏見のもとで結婚が可能であるかどうか、ということですね。

そういう意味で、いろんな目配りをしながら、我々は強制連行をはじめ在日朝鮮人問題を考えていく必要があるのではないかというのが、私の感想です。時間がありません。以上でとどめます。ありがとうございました。(拍手)

3分間スピーチ 25

朝鮮人強制連行真相調査団

洪祥進



昨年、愛知で報告しましたので、そのパートⅡということで、簡単に申し上げます。

まず、知事引継書の件ですけれども、昨年以降、香川県、そして高知、その他四つの都道府県で出てきました。ポイントとしては、すべて持っていたにもかかわらず、空襲でなくなった、それを2回、3回繰り返して要望する。そうすれば、必ず出てくる可能性があると思います。

次に寄留簿、この件ですけれども、これは昨年、伊丹で出てきました。それ以降、7月には兵庫県、そして大分県、こういった地域で出てきました。このポイントは、寄留簿自体が強制連行者の名簿ではないんですけれど

も、強制連行に関するかなりの記述が残っているということです。調査の方法は、役所の方と同席で書庫に入る。書庫に入って、懐中電灯で照らしながら戸籍のところ、1939年から1940年代の項目を見たら、すぐ、これは探せます。

次に学籍簿の件ですけれども、これは昨年、岐阜で500名ほどの学籍簿が出てきました。それ以降ですけれども、高知、そして7月には兵庫県の加西で出てきました。それが一番簡単な調査方法です。もちろん、教育委員会に要望といった、こういった形式でもいいんですけれども、直接学校を訪ね、校長先生にお願いすると、ほとんど協力していただけます。学籍簿、除籍簿。特に除籍簿というのは、他の地域に移った、こういった方はほとんど強制連行の可能性がございます。高知の場合は集団土工収容所、こういった記述まで出てきました。ですから、こういったことから、まず始めるべきではないかなと思います。1943年現在で、全国の強制連行をされた作業所が約520あったと記録に載っております。ですから、それ以降はかなりの数字、1,000前後にはなるのではないかなと思いますけれども、実際、そのうち現在調査されているのは50ヵ所前後なんですよ。実地的に調査されているのは。ですから、先ほどのような話がありましたように、いま、第1ページをめくろうとしている、そういった状態ではないかなと思います。これからもうこういった調査をますます進めていこうと思いますので、皆さん方、よろしくお願いします。どうも。(拍手)

3分間スピーチ 26

日本の戦後責任をハッキリさせる会
臼杵敬子

こういう機関紙(機関紙を見せて)、まだ会自体はできて半年ちょっとなんで、これがや



っと創刊されたんですが、会の趣旨としては、韓国の太平洋戦争犠牲者遺族会がありますが、その人たちは軍人軍属、徴用、あらゆる人たちを含めて、日本の戦後責任を追及、それから戦争責任以上に、ほんとに驚くのは、日本は結局、戦後も日本人、朝鮮人、また台湾人、中国人もそうなんですけども、人間として差別をしてる。それは何かといたら、基本的な遺骨返還、生死確認、それから犠牲者に対する謝罪、そういうことを一切何もやってないという事実が、かなりはっきりしてきたという。それで、日本政府に対して要求してるんですけども、その犠牲者遺族会を支援していこうということで、ハッキリさせる会というのをつくりました。

それで、時間がないので緊急にお願いなんですけど、8月2日に韓国から約70名の遺族の人たちが東京に来日します。それで、3日、4日とアジア太平洋地域の戦後補償国際フォーラムというところに参加して、5日、6日、7日と厚生省、法務省、それから労働省に対して、いろいろ抗議をするんですが、時間のある方はぜひ支援をして下さい。それについてはビラを用意しておりますので、各分科会の前の方に置いておきますので、必要な方はぜひとって、暑い中ですが、支援していただければありがたいと思います。

とにかく、私自身はやはり戦前、戦中の責

任もさることながら、戦後45年たったいまでも（日本は）名簿一つきちんと出さない。名簿に関してはソヴィエトも出したわけですね。ところが、日本の厚生省は、そういった遺族に対して、死亡者の名簿すら出さない。それで何といってるかといえば、プライバシーがある。そういうことに転嫁して使ってるわけですね。これは非常に恥ずかしい話だし、なんとかしなきゃいけないと思いますので、8月、暑いんですが、お時間のある方は、一緒に運動していただければと思います。よろしくをお願いします。（拍手）

3分間スピーチ 27

石川県

川上力男



私自身が、戦争中軍事工場で朝鮮の人たちが働いておった、海軍の人とやったということ。郵便局における時分に、一緒に働いて郵便物を持っていったという経験をしてるわけです。

一昨年、宝塚の鄭鴻永さんが、こんなものがあるということで調査に来られまして、あそこあれか、ということになりました。私は10年ほど前に、まだ戦後処理がなされておらないという形で、こういうような新聞で全国版で出していただきました。そして、空

気抜きにしている、危険であるから穴を埋めなさいというふうな運動をして、穴を10だったのを（運動）して一つだけ残っているわけであります。そんな感じで、体験は全部知っております。もう少し、先ほどの話にありましたが、10年ほど早目にこの話ができて、この当時、朝鮮人問題その他があれば、まだまだ生きておった証拠も十分出たと思いますが、ほんとうに私は嘆かわしいと思います。

しかし、私自身がこの工場の中へも入った憶えもあるし、朝鮮の人たちがバラックの中に生活しておったこともあるし。戦後、飲みなさいといってもらったら、ドブ桶であって、郵便局へまっ赤な顔して戻ってきた。朝鮮の仲間の人たちと生活をした者でありますので、今後、今日、皆さんの報告を聞きながら、ほんとに人権としての取り扱い方、歴史としての取り扱い方をぜひともやりたいと思いますので、皆さん方のあたたかいご協力を心からお願いして、ご挨拶に替えたいと思います。どうぞ、よろしく。（拍手）

3分間スピーチ 28

亀島山地下工場を語り継ぐ会

花房英利



「亀島山地下工場を語り継ぐ会」の代表世話人をしておりますとともに、倉敷中央高校社

会問題研究部、通称社研部とっておりますが、そこで生徒の自主活動の指導をしております。

パートⅠの部のスピーチのほうで、どなたでしたか、公教育のこの分野の活動が期待できないので、というお話がありましたけども、公教育の分野で高校生とともにがんばっております。岡山県における亀島山地下工場の取り組み自体もそうだったんですけども、高校生の活動がまずスタート、前面に出ている。その後を市民としての活動がついていているというのが、岡山県が一番大きな特徴だろうと思います。

岡山県では、社会問題研究部、他県では部落研といったりしているような県もずいぶんたくさんあると思いますが、そういう活動の歴史が、もう四半世紀を超える歴史がありまして、そうした中で高校生たちが取り組んでいる。特に倉敷中央高校の場合、亀島山地下工場の強制労働の問題の聞き取り調査、それから岡山県内で犠牲になったまま無縁仏となっている朝鮮人殉難者遺骨の故国への送還の運動などを、これまで1986年に始めて、もう今年で6年目になります。そうした中で、高校生たちが何を考え、どのように活動してきたのか、公教育の中で活動してきたのかということを、今日の第7分科会のほうで発表させていただきます。

ちなみに、今年の夏、8月、もうすぐなんですけども、夏休みには水島、臨海工業地帯で有名な水島ですが、そこで朝鮮初中級学校のお世話になりまして、在日朝鮮人小学生、中学生、高校生との交流、在日韓国人高校生との交流などを中心にして、2泊3日の交流学习を、地域の高校生全体で取り組むとい計画にしております。

「亀島山地下工場を語り継ぐ会」という市民運動のほうですけども、昨年、市議会に保存の請願を出しました。これはいろいろ経緯があるんですけども、つい最近引っこめまし

て、あらためて9月の市議会に向けて調査、保存ではなくて、行政の手で調査をしてほしいという請願を提出する予定にしております。以上です。よろしくお願いします。(拍手)

3分間スピーチ 29

指紋押捺制度を考える熊本会

協元公明



熊本からは初めての参加だと思いたので、私たちの会のことをちょっと紹介したいと思います。

私たちの会は「指紋押捺制度を考える熊本会」という名前で、1984年から活動しております。名前の示すとおり、当初といひますか、いまもそうですが、指紋押捺を強要される側の人たちと一緒に県交渉、市交渉、その他もろもろの活動をやってきたんです。その他の活動としては、熊本をご存じの方もあられるかもしれませんが、藤崎宮という非常に大きな、古い八幡宮があるんですけども、通称、「ぼした祭り」というふうな名前で呼ばれているわけです。語源がいろいろありまして、一番熊本県民に浸透しているのは、「朝鮮を滅ぼした」の「ぼした」。馬追いをやるんですけども、「ぼした、ぼした」とやるわけです。熊本県民は、一番それが深く浸透しておると

いうことで、問題があるんじゃないかということ、県同協、解放同盟その他諸々の問題と、交渉を八幡宮といろいろやったわけです。

昨年、熊本では相当新聞紙上、投書等を含めてにぎわしたわけですが、名称は使わないというふうにはなったわけです。ただ、名前を使わなければいいのかということも残るわけで、私たちの運動はまだ、そのことについても続いていくと思われまます。また、この問題に対しては朝鮮総連と民団が統一行動を取りまして、そのこともずいぶん力になったというふうに書いている新聞もありました。それから、熊本には三菱の、戦時中といえますか、飛行機製作所があったわけで、当然、空襲を受け始めると、熊本市周辺への疎開が始まったわけです。それで、熊本市周辺に、ずいぶん地下工場があります。私たちも、まだ全部は調査をしておりませんが、幾つかは調査を進めております。その中で、先ほどの講演の話にもありましたけども、去年なら、うちのお袋が生きとったから、という話をよくされるんで、もう時間がない、確かに時間がない。急がねばいかんということですね。それと埋立てが、意識的か無意識か知りませんが、ずいぶん進んできてるということもあって、急いでやろうと思っております。

その他、まだいろいろあるんですけども、時間がないので、いろいろ教えていただきたいと思ひます。(拍手)

3分間スピーチ 30
中国人強制連行を考える会
田中宏

去年、名古屋にお越しいただいたときもちょっとご報告しましたけれども、去年から今年にかけてのことを、ちょっと簡単にご報告をさせていただきたいと思ひます。

今年もつい先日、中国から生存者と遺族3



人の方をお招きして、現地の大館で慰霊祭に参加してもらうとともに、実は今年初めて東京の築地の本願寺で全国の追悼式という形で、従来は花岡だけだったんですけれども、東京で初めて全国を前提にしたものをやったということです。それで、そこには北海道の野村鉷業所で実際に働かされた方で、日本に残っていらっしゃる趙さんという方も来て下さって、当時の労働の実態を話して下さいました。

それから、これはちょっと私事になりますが、去年、例の鹿島建設との交渉が行われたことが中国で報道されたときに、たまたま私の名前が向こうの新聞に載ったらしくて、私のところに全然みず知らずの人から一通の手紙が舞い込んできたんですね。それは、実は自分の父親も日本に連れて行かれたきり戻ってこなかった一人で、ぜひ遺骨のありかだとか、あるいは関係企業に対する謝罪とかの諸要求に力になってほしい、という手紙でした。

その方は三井三池で働かされて、結局、そこで亡くなられた人のご遺族でした。実は、この前の花岡の延長線上ですけれども、来週日本に来ていただいて、戦後補償の国際フォーラムに参加していただくとともに、私が手紙をいただいた責任もありますので、三井三池と一緒にいきたいと思ひています。

その後に鹿島との交渉をやっているんですけども、なかなかちががあかないので、ポイントは何だろうかということですけど、基本的にはやはり戦争と国家と企業との関係というところが争点に結局はなる。鹿島は戦争のことは基本的には国家の問題で、それは日中共同声明で片づいているという考え方を基本的には持っている。従って、言葉としては深甚な謝罪の意を表するというのを副社長言いましたけれども、ちががあかないということで、本格的に戦争の本質的な問題を含めていかない限り、事態は打開できないだろう。ただ、中国のほうでも日中共同声明で放棄したのは民間レベルのものは含まれてない、民間レベルのものについては別途要求すべきであるという意見書で全国人民代表大会に出されたという報道もあるので、本格的に戦争の

問題を考えていかなきゃいけないというところに来たような気がします。

以上。(拍手)

飛田 どうもありがとうございました。これで全体会のスケジュールは終了いたします。

一部の新聞には報道されましたが、広島で被爆をした三菱徴用者同志会の代表がこの会に参加される予定だったんですけども、韓国からの飛行機の便が2時間遅れたために参加できなくなりました。

では、分科会に移っていききたいと思います。分科会、そして夜の神戸学生青年センターでの交流会、明日のフィールドワーク、全体集会まで、共に学び交流を深めていきたいと思います。



「強制連行」調査の課題と展望

朴 慶 植（在日朝鮮人運動史研究家）



アンニョンハシムニカ、皆さん、こんにちは。

私は強制連行の問題、また強制労働の問題について、あまり勉強してないんです。今日ここへ出て話をしろというふうにいわれたのは、おそらく、だいぶん年齢をとってきたから、思いやりの気持ちで引っ張り出されたんじゃないかというふうに、私自身は考えておるんです。ですから、非常にむずかしいタイトルをつけられて、私は何を話していいか、とまどっているところです。

植民地支配、侵略戦争の問題

朝鮮人・中国人強制連行、強制労働のことを、なぜ、いまになって我々がこのように調査をしたり、研究をしなければならないのか。これは言うまでもなく、侵略戦争の問題、植民地支配の問題が、日本の社会ではあまりにも無視され、欠けてるんですね。教科書を見ても、あまりまともに書いてない。一般のいろいろ出ている本などにも、これに言及したものがあまりない。歴史は、日本の近

代史、現代史が正しく把握されていない、認識されていないわけです。

その欠けてる穴を埋めようということに関心を集めているわけで、ほんとうだったら、この問題は1990年代になってまでもやらなければならないというのではなくて、もうこれは終わっていなければならない、日本の戦後、40数年たっているわけですから。ところが、その40数年間の間、侵略戦争の問題なり、植民地支配の問題なり、強制連行・強制労働の問題などがほとんど無視されてきた。そういうことで、やっといまになって関心を高めてきているということだと思います。

歴史認識の改革

ですから、この植民地支配、また侵略戦争、強制連行・強制労働のことを明らかにすることは、日本の近代史、現代史、さらに朝鮮・韓国の近代史、現代史を訂正する、改める、いままで書かれたもの、また歴史的認識を改めていく。そういう非常に大きな意味があるんだと思います。そして、これはどこからか日本政府のほうだとか、官庁だとか、そういうところから呼びかけてやるのではなくて、日本に住んでいる、また朝鮮・韓国に住んでいる、一人ひとりが、この問題についてまともにぶつけて明らかにすべき課題なわけですね。そして、これは、ただ歴史的認識を改めるというだけにとどまらず、我々人間一人ひとりが、日本人も、朝鮮人も、韓国人も、この問題を明らかにすることによって自分自身を変えていく。さらに、自分だけでなく多勢の人たちが変わるように、この運動が続けられなければならないわけです。そういう意

義を持っているんだと思います。

市民的運動の広がり

今日は、こうしていろんな方々がお集まりになって、真剣に取り組んでいらっしゃるわけですが、80年代になってから、やっとういうふうな方向が見え出してきたんだと思います。それまでは、先ほども言いましたように、あまり関心を持たなかったというふうな状況だったんですね。この強制連行・強制労働の問題が少し日本の市民的な広場に広がっていくようになったのが、80年代に入ってからで、10年たっているわけですね。この10年間の間に、相当の調査や研究が積み重ねられてきているわけです。その成果として、今日の、この第2回目の全国集会が持たれているんだと思います。

闘いとしての調査

今日、あとで10の分科会に分かれて、皆さ

んが調べてこられた問題の議論がなされるとと思いますが、まだまだわからないことばかりなんです。いま、やっと入り口にちょっと入ったぐらい。まだ、たくさんことを調べなければ全貌がわからない。それは、強制連行・強制労働、その他虐殺事件、そういうものに対して、当局者がそれを隠しているからです。明らかにしたら、自分たちが不利になるから、明らかにしない。それを我々は明らかにしようとしているわけです。ですから、これは運動であり、闘いでなきゃならない。簡単にいかないんですね。これは私がいうまでもなく、皆さんが直接お調べになっている中で、ぶつかっていると思います。

緊急の課題

ですけれども、これを少しでも早くやらないと、証拠物件、また証人がだんだん亡くなっている。体験者が齢をとって、だんだんいなくなってしまいます。物的な施設も、だんだ



ん、これもなくなっていくことになるんですね。ですから、長く調べる、そう悠長なことではないんですね。少しでも早く、この問題について調べていかないと、非常に困難な状況の中に追い込まれていく。

私が強制連行の問題、強制労働の問題について関心を持って、少しずつ調べ出したのは60年頃です。その頃はどこかの地域、たとえば常盤や北海道や九州に行き、体験者を探せば幾らでもいたんです。しかも、年齢が40代、九州や北海道に行かなくても、東京の中でも九州で働いた人、北海道で働いた人はあちこちいたんです。だから、いまから30年前に調べれば、皆さんがそんなに苦労しなくても相当調べられた。もちろん、全貌がすぐにわかるわけではないと思いますけども。

在日の問題提起

ところが、その頃はあまり関心がなかったんですね。でも、関心を持つ契機はあったんです。決して、関心を高める条件がなかったわけじゃない。たとえば、在日朝鮮人、在日韓国人の立場からすれば、どう日本で生きていくかということが50年代後半になって切実に問われてきたんです。それで、北の朝鮮民主主義人民共和国に帰って働きたいということで、帰国の問題が起きる。南に帰る人は南に帰っていく。日本に残る人は残る。そういうふうに幾つも分かれていたんですけども、しかし、在日にいる人間にとっては、どう生きるべきかと自分が問われる、そういう問題提起がありました。

それから中国人の強制連行の問題は、すでに53～54年あたりからだいぶ調査が進められて、1954年には中国から李徳全女史が日本に來られて、遺骨返還の問題が続けられていくわけです。

ですから、決して、その時期に強制連行の問題、強制労働の問題が提起されていなかったわけじゃない、あったんです。ただ、それ

に目が向けられたかどうか、目を向けるか向けないか。それは今日でも、このように問題が提起されていて、新聞やマスコミにいろいろ登場するけれども、それに目を向けなければ同じことなんですね。しかし、いまは、先ほども言いましたように、相当この問題に関する関心が広がっている、それは事実なんですね。ですから、一人でも多勢の人間が、日本人であろうと、朝鮮人、韓国人であろうと、もっともっと、歴史の1ページから欠けているこの問題、侵略戦争、植民地支配がその中に含まれるこの強制連行・強制労働の問題に目を向けなければならない。

これはただ知識を得る、歴史の知識を改める、それだけじゃないわけですね。先ほども言いましたように、これはまさに我々の生き方、日本の中でどう新しい社会をつくっていくか、民主化をどう進めるかというようなことと関連があるわけですね、直接的に。この問題にそっぽを向けるという人は、その人の考え方があるわけです。この問題に目を向ける人は、物事をどう見て、新しい歴史をどう創造していくかというふうに考える人だと思うんです。

いままでのことは、この強制連行・強制労働を考える意味、これを取り組む姿勢とすれば、それはどういうものかということについて、私の考えていることの一端です。

調査の課題

次に、「強制連行」調査の課題と展望、そのタイトルにあうようなお話ができるかどうか、これはなかなかむずかしい問題ですが、強制連行・強制労働でどういうことを調べていかなきゃならんか。これはすでに今日の集会の10の分科会で報告内容が決まっていますから、これだといえ、それまでなんですね。しかし、ここで私が若干課題に対して、どういうことを我々が調べて明らかにすることなのかについて、若干の意見をつけ加

えるとすれば、まず強制連行の政策は一体どういうものなのか。この問題を明確にしなきゃいけないわけですね。

もちろん、強制連行をやった当事者は「強制連行」なんて言葉を使いません。いろんな表現を使っていますが、1960年の5月号の『世界』という雑誌があります。その雑誌に「中国人強制連行の記録」というタイトルだと思いますが、中国人の犠牲者慰霊実行委員会が発表したんですね。私も、やっぱり朝鮮人も同じく強制的に戦時中労働力として、あるいは兵力として、いろんな形で強制的に、本人の意思を無視して連行されたんだ、数は、中国人よりもはるかに膨大な数だ、そういうことで62年に、先ほど紹介されましたパンフレット（『太平洋戦争中における朝鮮人労働者の強制連行について』朝鮮大学校）を出したわけです。それで、「強制連行」という言葉が朝鮮人に対しても、ずっといわれてくるようになったと思います。

強制連行政策

日本政府側では、強制連行政策について明らかにしないだけでなく、非常に欺瞞をしているわけです。朝鮮人に国民徴用令を適用したのは1944年の9月からで、戦争が終わる10ヵ月くらい前、だから、わずかしか国民徴用令を適用して連れてきてない、そういうふうに弁明をし、今日でもそれに対して、あまり変わらない態度をとっているんですね。

ですから、強制連行とは一体何かということが、明確になっていない。そして具体的な政策、一般にいわれているというより、正式な文書にある1939年の4月に国民徴用令が出て、日本人も朝鮮人も労働動員計画が出されて、割り当てたわけです。朝鮮人に対しては、内務次官、厚生次官の通達形式だった。42年の2月には閣議決定され、さらに44年にも閣議決定で、朝鮮人をなんとか動員しなければ戦争が遂行できないというふうになっ

ているんですが、初めから、39年の4月の国民徴用令が出た時点から、朝鮮人にも国民徴用令を適用したわけです。ところが、これを否定する人が日本の中には多勢いるんです。政府は先ほど言いましたようなことをいうものですから、それに惑わされるというか、朝鮮人は自由に、働きたくて日本に渡ってきたんだ、そういうんですね。

ところが、39年以前の問題も、これも非常に間違った考えがあるんです。それ以前は全く自由だった、日本に移民してきたんだ、移住してきたんだ、だから勝手じゃないか、好き好んで日本に来て働いたんだから、自分の責任においてであって、日本政府には何ら責任ないと。ところが、39年以前でも、決して朝鮮人は自由ではなかったわけです。植民地の人間、日本に自由に来られたわけじゃない。日本で働くために来る証明がなければ来なかった。この話はまた長くなりますので、とにかく強制連行政策、これ自体がまだ明らかになってない。ですから、何人ぐらい連行したか、これも発表してないからわからない、正確なのはわからない。

多種多様な連行政策

そしてまた、強制連行は日本への連行だけでなく、中国の東北地方、そこにも動員されています。その他に昔、南洋といった、いま南方、サイパンやボルネオ、南のほうの島、インドネシアだとかになっている、そういう島々にもだいたい動員されたし、サハリン、千島、アリューシャン列島、そういうところまで動員されています。それはもちろん労働者、飛行場や軍事施設をつくる労働者として。ですから、日本の中だけではないんですね。日本の中だけでも、軍需工場や炭鉱、鉱山、港湾労働者だけでなく、それからまた、普通の人間、労働者だけでなく、軍人軍属、従軍慰安婦がいる。

朝鮮人慰安婦

慰安婦のことをちょっと言いますとね、慰安婦はただ従軍慰安婦だけじゃないんです。もちろん、従軍慰安婦は戦場に引っぱられていて大変な犠牲をこうむっているわけですが。これは日本の炭鉱や鉱山、軍事施設のあるところには、慰安所という名前のもとに朝鮮人女性をたくさん連れてきたんです。それは資料にちゃんと出ています。慰安所をつくることと厚生省の指示で、どうやって戦時の軍事生産をやるか、そのためには朝鮮人の働いているところには、朝鮮の女性を連れてきて慰安所をつくらなければ働かない、怠けるということで、慰安所設備をつくること、というふうに指示があるんです。ですから北海道にも、これは新聞記事にもなっています、マル秘の資料にちゃんと出ています。常盤にも、九州のほうにも。ですから、それまで加えて、もっと追求していかなきゃならないかと思ひます。

戦時動員の人数

何せ、数が大変な数なんですけども、まちまちです。政府が発表した66万。これはご承知のように米国戦略爆撃調査団の報告からとった。こうなってます、66万というわけです。ところが、なぜ、日本政府がアメリカの爆撃団の報告書によって発表しなきゃならないのか、馬鹿げた話です。日本政府の持っている資料で発表すればいいんですよ。でも、そうはしたくないから、「ない」というかのように欺瞞をしているわけです。

朝鮮総督府から、当時の帝国議会にその報告をしているわけです。朝鮮の労務事情、または軍需物資の生産はどのように進行しているか、それを細かく活字にして、さらに帝国議会に参加した朝鮮総督府の官僚が報告をしているんですよ。その資料が議会ごとにあるわけですから、やっとそれを我々は部分的に

見てるんですが、45年のがないんです。44年のまではあるんですが。45年度、それはもう44年度につくられるわけですね、その計画は。44年につくって、45年に入ってから文書にして出すわけですが、それがみつからないんです、いまのところ。これからどこから出るかも知れませんが。日本政府側には、それは当然あるはずなんです。

戦時末期の動員

45年は、あまり動員されてないんじゃないか、空襲があり、非常に厳しい状況の中で。ところが最近わかったこと、これは松代大本営のことについてよく調べておられる山根さん、新聞記事なんかに出ましたからご存じだと思うんですが、東京の品川駅の貨車の出発するところ、1945年の3月末から4月にかけて1千名、1千名、合計2千名の、1貨車1千名、2貨車、2千名を夜、厳重な警戒のもと、そして貨車ですから全く窓がない、そこに詰めて、しかも鎖でしばってた、それをやった人が証言をしているわけです。

長野県で徴集やって、2千人を連れて行ってるわけです、現実には。京都でも1945年6月現在、4千人ばかりの朝鮮人が働いてた。先ほど報告ありましたマンガン鉱、その他舞鶴海軍工廠。ところが、さらに1,100名以上、これから移入する計画だった。そういう45年の非常に厳しい戦争中でも、まだまだ朝鮮人を動員してるんですね、現実的に。45年は動員計画では5万人計画となっています。毎四分の二半期、3ヵ月です、また3ヵ月たつと5万人。44年の場合は40万でした。45年はどれぐらいか、数字はわかりません。そういう強制連行の人数を、まず強制連行政策の一環として調べなきゃいけない。

朝鮮人軍人・軍属

いろいろ話をすると長くなるので、はしょっていかなくちゃならないんですけども、軍人

軍属、これもまだ正式に日本政府は発表してないんですが、公安調査庁で出した資料では、一応、それは正確だと思います、軍人が約21万、それから軍属が15万5千、そういう発表があります。ところが、あとがわからない。何人死んで何人帰ったのか、負傷は何人なのか、これはあいまいにされています。先ほどの強制連行された朝鮮人、労働者も何人死んで、何人傷を受けて、どうしたのか、それも明らかにされてない。だから、それは我々がやらなきゃなんないのです。

戦時動員の方法

それから強制連行の方法、どうやって連れて来たのか。先ほど言いました品川の駅で貨車で鎖でしばって連れてきた、これは全くひどい話ですけども、どこから連れて来たのかという推測するんですが、なかなかわからない。船で遠くから移住させて連れて来たのか、別なルートがあったのか。いろいろ考えるんですが、松代なんかは、わりに北朝鮮のほうからだいたい来ているんです。それは、元山だとか清津の港から船でもって富山湾の伏木港に上陸させて、そこから汽車に乗せる。その汽車も外を見せないように覆いをして連れてきた、それはある程度わかっているんです。とにかく、いろいろ連れてきた方法はあるでしょう。

また、朝鮮でどのような方法で集めたか。それもいろいろあるでしょう。そういうことも、まだまだわからない点があるんですね。募集日誌だとか、吉田清治さんの『朝鮮人慰安婦と日本人』、また『私の戦争犯罪 朝鮮人強制連行』、そういう本によれば、全く暴力で集めてきているわけです。特に吉田さんの本で見てびっくりするのは、軍隊で動員してくる。吉田さんは労務報国会の動員ですけども、軍隊と一緒にやっている。これはすべてではないと思います。だから、いろんな方法があったというふうに考えられるんです。

ね。これも、もっともっと調べる。それは体験者がいるんですから、やった人が吉田さんみたいに告白をすればわかることです。それを我々がどうしてほんとうのことを聞き出せるか、これは我々の仕事なんですね。本人がなんとか、やったことを反省して言ってくればありがたい。一番適確なんですけど、なかなかそれは言わず、黙って死んでいってしまう。

文献資料

それから資料ですけど、書かれた資料、政府側の、また企業者、会社の、これは去年の8月6日に政府の発表として、労働省の地下倉庫に眠ってた、16府県の朝鮮人の名簿が出た。だが、それは強制連行した全部の名簿じゃないにしても、一応帰国する時期の名簿を各府県で集めた。それも16県ですから、後の30何県はどこかにあるわけです。みな、報告させているようですから。それも当然あるはずだけでも、政府側は調べて出してくれない。だから、我々はそれを何とかみつけないかならない。

企業者のほうも、大企業は資料は非常に貴重視しているんです。決して、資料を焼いて捨てません。自分の会社の歴史ですから、そんなことはしてません、ちゃんと持っているんです。それは、去年出ました『間組百年史』を見れば、十分わかることです。そこには、朝鮮人をどここのダム工事、土木工事に何人使った、何百何十何人まで、きちっと出ています。もちろん、それがすべて正確かどうかわかりませんが、とにかく、百年史には朝鮮人の人数がずっと出ていますね。そういう資料があるから、細かい数字まで書けるわけです。名前は出してませんが、おそらく名前も、名簿もあるんだと思うんです。間組だけじゃなくて、鹿島組にしろ、熊谷組にしろ、大企業は当然そういう資料は保存してあるには間違いありません。だから、

会社の中で百年史なりの編さんをしている人が、ある程度は見てるんですね。だけど、外部の人間にはなかなか見せてくれませんので、なんとか公開をするようにさせる、これをやらなきゃならない。

聞き取り

それから次には体験者、軍人軍属、強制的に工場に、炭鉱に、その他軍事施設に連行された人の体験の話です。ところが、これだけでは、朝鮮人側のほうの体験の話だけでは、やはり非常に不足しています。日本人側の労務係だとか、監督だとか、とにかく日本人側の朝鮮人との接触というか、炭鉱でも会社でも関係のあった人の証言を得ることが非常に大切です。

もちろんそれ以上の協和会、在日朝鮮人を取り締まり、また同化させようとした協和会というのがありました。その協和会の関係で日本に来ている人に関しても、警察は全部握ってたわけです。ですから、昔、警官をしてた人で、朝鮮人を知らない人はないはずです。その人の話をなんとか聞き出す。

それをよくやったのは、九州におられる林えいだいさんの『消された朝鮮人強制連行の記録』でしたか、その本に60数名の聞き書きというのがあるんですが、その中に、だいたいたくさんの方の日本人から聞いた聞き書きがあるわけです。非常にこれは大事です。なかなか言わないんです、日本人は。朝鮮人の場合は、それは自分が痛めつけられ、苦しめられてきたんですから、言います。強制連行真相調査団の調査で新聞などに発表されているのは、言ってくれる人は大体、遠くで見ていたといいます。自分は近くに住んでいたとか、飯場があったのは知ってるとか、そういうのが多いですね。自分が直接どうしたという人は、なかなか出て来ない。その心情はわかるけども、それをなんとか言ってもらう。そうして初めて、そのことがその人間を変えるこ

となんです。黙っていれば、いつまでも日本人が変わったことにならないんです。

ですから、日本人からの聞き書きを我々がやることができれば、それだけ、その人がほんとの日本人としてこれからどう生きていくべきかということが、その中から出てくるんですね。が、あんまり、これを言うと、生意気だといわれるかもしれないけど、実際、そうだと思うんです。

ですから、聞き書きというのも、先ほど言いましたようにもう齢をとって、だんだん数が少なくなりましたので、探し出すのもなかなか大変だと思うんです。だから、朝鮮人だけじゃなくて日本人も含めて、なんとか聞き出すことが大事だ。これは、ここ何年かの間に相当の成果はあがっていると思います。

現地調査

それから実地調査です。これは最近、だいぶ調査が進められて、特に地下工場、地下壕、報告書まで出ております。特に兵庫県では兵庫朝鮮関係研究会で相当精力的に進められて、さらに他の地域まで調べております。ところが、まだまだ調べられてない箇所がたくさんあるわけですね。先ほど言いました朝鮮人強制連行真相調査団、これは日本人、朝鮮人共同の調査として非常に大きな意義を持っているわけですが、これは72、73、74年ぐらいにやって、その後が続けられなかったのですが、この何年か前からまた調査団が活動し出したと思うんです。

日本人と朝鮮人の共同で

日本人、朝鮮人の共同の仕事、これはほんとに大きな意義があると思うんですね。そういう調査団でなくても、地方のグループ、サークル、研究会、これは一緒にやっているところが多いと思うんです。私も東京で「在日朝鮮人運動史研究会」というのを、日本人、朝鮮人一緒にやっているわけです。

軍需工場の調査

そこで、先ほど言いました地下工場です。地下工場は戦争が激しくなって地下壕をつくって地下工場にする、こうなったんですが、それ以前は東京でも、名古屋でも、大阪でも、町の中に軍需工場がたくさんあったわけです。その軍需工場自体の研究をしなきゃならない。何をつくって、何人ぐらいいた、朝鮮人はどうやって動員したか、どういう対応をしたか、そういう問題をもっと明らかにしなきゃならない。ところが、資料が少ないということで、なかなか手をつけるのがむずかしい。一番、手っ取り早いのが会社史なんですね。会社の資料をみつけ出すこと。朝鮮人のことはたくさん書いてないんですが、間組は人数ぐらいは書いてあった。だけど、大体の会社史は書いてない。何人ぐらい働いていたというぐらいは書いてある会社史もありますけどね。とにかく会社の歴史を調べて、そこから戦時中、どのように朝鮮人を連行し、どのように働かしたかということを、もっと調べなきゃならん問題だと思います。

保存問題

それから資料ないしは施設の保存問題。特に軍事施設、松代大本営やその他の地下壕などの施設をなんとか保存できるようにする。戦争の一つの実物として、我々はこれを伝えてやらなきゃならない。そういう意味で、資料や軍需施設をなんとか保存できるようにする運動もしなきゃならん。いま、そういう運動が展開してるわけですが、まだまだこれからだと思います。

戦後補償

そして戦後補償の問題。これは日本人の場合だと、空襲で被害を受けた人たちには補償はないと思いますけども、直接戦争にかかわっているような犠牲を受けた人は、大体補償の

制度が設けられて、それを受けていると思うんですが、朝鮮人は一切、それが無いわけですね。これは日韓条約がまともにやられなかったからです。あそこで植民地支配の問題に対する謝罪の文句もなければ、一切補償がない。もう、いわゆる請求権及び経済協力協定で、朝鮮人の請求権を両方相殺して帳消しにするということで、けりがついたということになっている。ところが、そうではないんだということで、いま韓国でも、北朝鮮のほうでも、当然、日本に対する請求権は持っているわけです。

在日朝鮮人・韓国人も、当然持ってるんです。請求権及び経済協力協定の第2条第2項には、日本に住んでる人たちには、この協定の第2条1項にある、もう完全に請求権の問題が解消したということは該当しない、あてはめないとなっていますから、当然在日韓国人、朝鮮人も、まだ補償を受ける権利があるというふうに考えていい。この運動も最近低下しておりますから、戦後補償の問題についても、我々は積極的にかかわらなきゃならん、こう思っています。

再び、植民地支配、侵略戦争の問題へ

話がなかなか順調にいきませんが、最後に一言だけ言いますと、強制連行・強制労働の調査研究、これは日本人、朝鮮人の、しかも、これは市民的な立場から、我々が侵略戦争、植民地支配の問題を正しく解明する大きな運動だと思うんですね。ですから、これを通して、我々は各個人はもちろん、日本に住んでいる、または日本以外に住んでいる人たちにまで影響を及ぼして、再びこういう侵略戦争や植民地支配が起きないように、起こさせないように、我々の運動体、運動として展開していくことが、我々の本当の目標になるかと思っています。非常に話がまずいことになりましたが、これで終わります。(拍手)



第1分科会 入門講座

講演① 朝鮮人強制連行と中国人強制連行 田中 宏

講演② 地域での調査の進め方 金 蓬 洙

第2分科会 「花岡蜂起事件」にアジア民衆との連帯をたぐる

第3分科会 土木建設工事と朝鮮人・中国人労働者

第4分科会 炭鉱・鉱山・軍需工場と強制連行

第5分科会 地下軍事施設建設工事と強制連行

第6分科会 軍人・軍属・慰安婦

第7分科会 教育実践—地域の在日の歴史と学校・社会教育

第8分科会 ビデオ（映像記録）

第9分科会 地域史のみなおし

第10分科会 戦争動員・強制連行・強制労働と戦後補償

入門講座

(司会 堀内 稔・足立龍枝)



前半と後半で若干の出入りはあったが50数名が参加した。

まず、富山テレビ制作のテレビドキュメントのビデオ『闇のなかの歴史』を見た。ビデオの内容は、富山県庄川町にある地下トンネルの映像をダブらせながら、いろいろな証言を通して、名古屋から富山へ疎開してきた三菱の工場で働いていた朝鮮人女子挺身隊の実態に迫ったもの。

約40分間のビデオ鑑賞の後、このビデオの「主役」でもある澤田純三氏から補足として、このテレビ番組がつくられるに至った経過や録画中におけるエピソード、あるいは地元での朝鮮人の歴史調査などについて話して

いただいた。

休息の後、愛知県立大学教授の田中宏氏に「朝鮮人強制連行と中国人強制連行」というテーマで、続いて先にビデオにも登場したピットムの会の金蓬洙氏には、これまでの強制連行調査の経験を踏まえて「地域での調査の進め方」について、それぞれ話していただいた（講演の内容については別項参照）。

質疑応答では、まず「加古川の源流の河川工事に朝鮮人の労働者がきて、地元部落があったという話を聞いているが、町史、村史などを調べたが載っていない。これ以上調べていくにはどういう方法があるのか」という質問が出た。またそれに関連して、強制連行の

労働者を使用していた企業名を調べたり、強制連行者の名簿をどのようにして調べたらいのかとの質問も出された。

これに対し金蓮洙氏はこれまでの体験から、文献資料で行き詰まったら現地へ行って地元の老人の話を聞くことを強調した。「企業の名前も地元であれば工事を請け負った何々組の名前が出てくるし、そこからさかのぼって社史などを調べることもできる。また、土地の古老の中には、記録好きの人がいて日記などに記録している人がけっこういる。刑事じゃないですが、やはり現場100回ですよ」。また田中宏氏も、調査が比較的行き届いている中国人強制連行の調査を参考にして調べることもできると、アドバイスした。

続いて田中宏氏の講演にからんで、同じような大きな過ちを犯したドイツと日本との対応の仕方の違いについて、自分が敗戦後かなり長い間、そうした過ちについて知らされてこなかった現実を踏まえての質問が出された。

これに対し田中氏は、「戦後ドイツ、日本とも経済的に発展しよく比較されるが、歴史に対する認識、歴史をどう清算するのかについてはまったく違う状態になっている」ことを、ドイツでよく読まれたという『第二の罪』をひきあいに出して強調した。第一の罪とは



戦争中に犯した罪、第二の罪は戦争中に犯した罪に対するつぐないを戦後きちんとやっていない罪で、これを自覚しなければならないと説く本がドイツですごく読まれたこと自体、日本とはまったく異なる状況で、そうした意識が、「過去に目をとざす者は現在をも見ることができない」というワイツゼッカー演説を支えているし、戦後補償の政策を次々に打ち出す背景になっているという。

その他、強制連行のルートに関して、北朝鮮から日本海側の港へ来たことに対する調査の問題提起がなされ、澤田氏から「南朝鮮からは釜山ルートで日本に渡ったが、北朝鮮からは直接日本海を越えて伏木などの港から日本に入った。強制連行に関して韓国で戸籍や学籍簿を調べることにによりかなり具体的なことが分かるようになったが、北朝鮮にも行き来ができてこうしたことが調べられるようになると、もっと調査は進むのではないか」との意見が出された。

入門講座ということで、とくに議題を絞っての議論ということにはならなかったが、いろいろな角度からバラエティにとんだ質疑があってももしろかった。ただ、全体集会が長引き30分ほど分科会の時間にズレ込んだため、質疑応答の時間を充分にとれなかったのが残念である。



入門講座講演 (1)

朝鮮人強制連行と中国人 強制連行

田 中 宏



強制連行政策の始まり

朝鮮人や中国人に対する強制連行政策が、いつ頃からどういう風な形で始まったのかというのは、大ざっぱに言えば1937年、日中が全面戦争に突入するあたりからではないでしょうか。つづいて1938年には国家総動員法が制定され、1939年には国民徴用令が発令されます。国家総動員体制といっても、今の時代もうひとつイメージが湧かないと思いますが、これは文字通り国を挙げて戦争に突入するため、物も人も精神までも総動員して、天皇の下に糸乱れず、目的達成のために頑張るというものです。わたしは1937年生まれで戦争末期の雰囲気は少しは知っている世代ですが、社会が国家総動員体制に入っていた雰囲気というのは記憶がなく、後日活字などで知ったわけですが、とりあえずは1937年の日中全面戦争、1938年の総動員法、1939年の徴用令と続いたあたりから強

制連行政策が始まったと考えることができると思います。

在朝日本人数と在日朝鮮人数の逆転

在日朝鮮人の数と、在朝鮮の日本人の数とを5年毎に抜きだして対照してみますと、これは以外と気づかれていないのですが、日本にいる朝鮮人の数よりもはるかに多数の日本人が朝鮮にいたことがわかります。「韓国併合」の1910年だけはなぜか帝国統計年鑑のその欄が欠落していてわからないのですが、1909年、伊藤博文がハルビンで刺された年ですが、この年日本にいた朝鮮人の数は790人で、1911年は2500人くらいですが、その当時、朝鮮にいた日本人の数は総督府の統計によると17万人なんです。

在日朝鮮人の数の方が多くなるのは1935年です。この年に逆転します。この年は「満州事変」は始まっているけれど日中全面戦争にはまだはいっていない、言わば日中戦争前夜といえる年です。それまでは圧倒的に朝鮮にいる日本人の方が多かったんですが、日中全面戦争に突入したところで急激に在日朝鮮人が増え数が逆転しているのです。ここで強制連行政策とつながってくるわけです。15年戦争という言い方をすれば1931年からはなりますが、いずれにしてもあの戦争が出発点だったということが出来ます。

企業側からの要請

では、なぜ突然朝鮮人を強制連行するということを日本政府が言い出したか。また連行された朝鮮人が何をさせられたか。仕事は生産活動や、土木工事などの肉体的な作業です。具体的には三菱航空機など企業の仕事であったり、花岡事件で言えば、ちょうど河の下にあった鉱脈で銅を乱獲し、落盤を起こした鹿島組が河川の改修工事を請け負った際の仕事であったり、ダム工事であったりと肉体労働をやらせています。当時、日本人はみな

戦争にいったわけで、足りなくなった労働力を補うためということで強制連行には企業が大いに関係しているのです。そんなわけで政府が突然強制連行政策をとったと考えるのはちょっと問題があると思います。

私たちが最近まとめた中に、北海道の地崎組という、北海道で最大の土建業者ですが、そこが強制連行者にだした身分証明書とか、その人たちに関する役所や警察署からの報告書、死亡診断書に確認のサインをさせたものなど当時の資料を載せています。これらはGHQが持って帰った資料の中にたくさん見つかっているのですが、それによるとかなり早い時期に、人手が足りないので人間が欲しいとさかんに政府に要請しているんです。地崎組が厚生大臣と内務大臣に向けて願い書というものをを出しているのですが、それによると「現在北海道の産業は生産拡充の国策に基づいて日に日に拡充しているが労働力が底をつき、国運の進展に重大な影響を及ぼしている」ので早急に支那本土より労働者を輸入し、この問題を根本的に解決するより外なし、と具体的な提案をしています。結局、中国人の強制連行は1942年11月の閣議決定により始まりますが、朝鮮人の連行の方が少し早いんですね。まず朝鮮人を連行し、まだ足りないというので中国人を連行したわけで、時間的には2、3年のずれがありますが、現場ではどんどんいっしょになっています。

「満州」での外国人労働力の活用

企業が外国から労働者を連れてくるということは、これらのもう少し前から行われています。日本は1931年に「満州事変」を起こし、「満州国」という国を中国に作りあげました。形式は外国ですが実質的には日本の植民地として日本の自由にするわけです。「満州」は人口の非常に少ないところだったのですが、日本は重化学工業の拠点を「満州」につくり、戦争の為に重要な基幹産業にしようと

したのです。しかし労働力が足りない。3年前につくった撫順炭坑は南北が4キロ、東西10キロの露天掘りですが、山東省辺りから労働力を引っ張ってきたり、向こうから出稼ぎに來たりしています。そこで大量の輸入労働力を使って重化学工業政策を推し進めるのに「満州鹿島」という会社をつくったわけです。当時、軍隊とくっついていったような会社はみなこのような形で外地に会社をつくっていきます。その時にすでに、外国人労働者を活用して生産を上げるという経験をもっているわけです。天皇を中心にドイツやイタリアと組んでもうひと回り大きく世界を制覇するためには、本土の生産力を充実させなければならぬ。しかし労働力が足りない。となった時に満州の経験がものをいったわけです。ですから朝鮮人や中国人の強制連行は政府より先に企業の方が進めていたわけです。

指紋登録による管理

外国人から指紋をとるということは戦後は法律的、制度的につくられましたけれども、これの源は、「満州」で輸入した労働者を管理するために1924年につくられたものと思えます。日本は日露戦争の後、「関東州」に満鉄という国策会社をつくり、満鉄警護隊を導入しました。満鉄というのは鉄道会社だけではなく、植民地経営をするための政治力でもあったのです。日露戦争の後、大陸の真ん中にはいっていくための動脈である鉄道を手に入れ、広大な「満州」を全部わが物にしようというものだったのです。そこで輸入労働力の管理のために1924年に指紋をとり始めたのです。そうすれば労働争議が起って首を切った場合でも、たとえ名前を替えてこようとしても不可能です。そうやって徹底的に労働者を管理するために指紋が必要だったわけです。

「満州」では指紋管理局という役所があって、そこには指紋の管理をする専門家がいた

のですが、最後には「満州」では国民手帳というものを出しました。延辺の歴史博物館には実物が置いてありましたが、上に本人の写真が貼ってあり下に指紋がのっていました。そういう物を最後の段階では全国民にもたせようとしたのです。はじめのうちは基幹産業の労働者に指紋を捺した身分証明書をもたせ、会社の方もそれを持っていて、たとえば脱走して外の場所に行ったときでもすぐにわかるようになっていたわけです。こうして外国人労働者を管理し、非常の時にはすぐにしゅっ引いてくるということを、日本の企業は歴史的にやってきたのです。ちなみに当時の資料には、「今年1年間の採用で、指紋によって前科がわかるなどして不採用になったのが25 くらいある」というようなことを書いています。この制度が結局は、政府をして国家総動員体制のなかで植民地や外国から労働者を輸入せしめたのです。

企業のイニシアチブ

強制連行といっても植民地からと外国からとでは形式的には違うところがあるんですが、背に腹は代えられないということで 企業が非常に重要なイニシアチブをとったということが言えます。強制連行は突然政府がやって企業が巻き込まれたということではないんです。

朝鮮人と中国人の形式上の差異

朝鮮人の強制連行はふるいのですが、中国人の強制連行は1942年の11月から始まります。中国と朝鮮の違いというのは、日本の植民地であるか外国であるかという形式的なものです。国民徴用令では外国である中国から連行してくるというのは理論的にはできません。当時日本と中国とは戦争状態にありました。強制連行は朝鮮と同じように農民を連れてくるのもありましたが、中国からの場合、軍人を捕虜として連れてくるが多かった

のです。花岡鉦山の場合、全体を指揮した耿諄（クエン・ツェン）さんは当時の国民党の大尉なんです。戦闘で捕まって日本に連行され、花岡の河川改修工事で約1000人のまとめ役をしたわけです。花岡では小隊、中隊というように労働者をまとめていましたがその大隊長で責任者でした。その人が秘かに計画し全員武装して、1945年 6月30日の夜中に一斉ほう起したわけです。当時は国民党も八路軍も協力して日本に抵抗していた時代ですから当然八路軍の兵士もいました。彼らはかつて武器をもって日本軍と戦った兵士だったわけで、今は捕虜となって日本人の指揮下で限度を越す労働を強いられている。むちゃくちゃな虐待を受けて仲間はずれに死んでいく。そこで人間の尊厳を守り、中国民族の名誉を守るために一か八かの行為にでたわけです。花岡事件は、かつて武器をもって戦った人達が連行されてきたということと大に関係あると思います。

戦後の法的地位の差異

やがて戦争が終わりますが、そこで中国と朝鮮との違いは、朝鮮は連合国を構成する国ではありませんが、中国は今もそうですが、安保理事会常任理事国であり連合国を構成する国であるということです。したがって中国人に対してはいい加減な扱いはできません。日本の占領は実質はアメリカですが、形式は連合軍の最高司令官であって、中華民国も連合軍の重要な一角を築いているのです。従って戦後、中国人の扱いについては日本政府もかなり神経を使わざるをえなかったのです。花岡の場合、結局全員捕まってすさまじい拷問を受け、耿諄さんをはじめ12人の中国人は戦時中の法律によって裁かれ、耿諄さんは無期懲役になります。判決の降りたのは 9月11日ですが、敗戦で立場が逆転していますから裁判官はかなり困っただろうと思います。しかしたくさん日本人が殺された戦争中の

事件を戦争中の法律に基づいて裁いたわけで、無期懲役になり秋田の刑務所に入ったのです。そこに進駐軍が入ってきますが、連合国の一員である中国人が日本の官憲によって刑務所に入れられているということで当然重大な関心をよせます。そこで秋田の現場に行ってみるとたくさんの中国人が殺されている。山の中腹では雨が降ると土が流れて骨がのぞいているということで、とんでもないことが起ったらしいということがGHQの調べでわかります。そのうえ秋田の刑務所には中国人が12人もつながれている。GHQはすぐに刑の執行を差し止め12人を釈放し、中野の刑務所に身柄を確保したのです。

花岡事件の横浜法廷

日本国内で行われた戦争犯罪については、横浜のBC級戦犯の裁判に全部かけられました。多くの中国人を殺した花岡の関係者も、捕虜虐待の戦争犯罪人として当然BC級裁判で裁かれることになります。その時に証人として出廷してもらうために中野の刑務所に身柄を確保したわけです。法廷にはこの12人を含む23人が出廷することになり、他の人たちは1945年12月までに全員中国へ帰りました。中野から横浜の法廷まではアメリカの車で送ってもらい、法廷で花岡の作業現場での監督の態度や、中国人労働者の扱いがどうであったとか、斬殺された模様だとかを克明に証言したわけです。

「外務省報告書」

中国人の強制連行がどのような形で行われたのかなどは、裁判の記録はそっくりアメリカへ持って行かれていますのではっきりしたことはわかりませんが、英文で2万頁ほどあるようです。これと別に中国人強制連行者に関しては外務省報告書というものがつくられています。GHQは、花岡だけでなく他の場所でも似たようなことが行われたのではない

かと思ったのでしょう。全国135カ所の中国人のいた事業所に報告書を出させ、それを基に1946年に外務省報告書「華人労働者就労事情調査報告書」というものをつくらせたので、どこでどういう人が亡くなったかなど、死亡者の名簿などもほぼ完璧に近いものがあります。

朝鮮人強制連行者については連行してきた人数もはっきりしないし、強制労働させられた事業所の数もわからないのですが、中国人強制連行者についてはだいたい4万人ということがわかっています。その内日本でなくなった人は7000人くらいですが、花岡の場合は418名で、中国人殉難の碑の裏には418名の氏名が全部刻まれています。先だって生存者のお二人と、お父さんが日本で殺された楊さんのおみえになったのですが、その殺された楊さんのお父さんのお名前もありました。昨年いらした二人の方のお父さんのお名前もありました。朝鮮人の場合はこんなにはっきりはしていないんじゃないでしょうか。たとえ慰霊碑があっても、そこで亡くなった人の名前が刻まれているということはないんじゃないでしょうか。中国人の場合は外務省報告書でかなり把握されているので、はっきりしたことを知るのが可能なんですね。さらに戦後は中国人強制連行者の遺骨の送還運動が起こり、1953年7月から1964年11月までの約10年間に9回にわたって遺骨が送還されています。これも外務省報告書があってこそわかるのです。遺骨の送還は民間の運動なんです。今も昔もそうですが政府は実に何もしてませんね。

遺骨の送還運動

遺骨の送還は日中友好運動の各支部が、外務省報告書にそってこの事業所で何人が死亡したのか、その遺骨はどこにあるのかなどたんねんに調べたのです。花岡の場合信正寺という寺に遺骨があるのですが、裏山に1951

年に鹿島建設が華人死没者供養塔というモルタル造りのお粗末なお墓らしきものを造っています。そこに眠っていた遺骨を掘出して中国に送ったわけですが、遺骨の送還は花岡だけではなく全国的にやっています。日本の民間運動もやることはきちんとやったといえますが、何故こういうことをしたのかと言えば、中国からの引き揚げを無事にすませたかったからなのです。日本政府は関わりたくないんですが、民間団体である日中友好協会など3団体が引き揚げの交渉をやり、53年の3月に中国からの引き揚げ第1船が入ったのです。その後21次にわたって中国からの引き揚げ船が入ってきます。そういうことに対する返礼の意味もあって中国人の遺骨を送還したと言えます。それにしても日本政府は何もしなかったんですね。

名簿調査

韓国側から名簿の問題が提起されています。名簿には人間一人ひとりの歴史が込められていると思いますが、朝鮮人については未だに生死もわからない人や、どこに連行されたのかわからない人がたくさんいる状態です。中国人については早い時期に名簿が出ていますが、朝鮮人については非常に難しいのです。ですが名簿を通じて歴史を掘り起こしていくという意味からも、中国よりずいぶん遅くはなりましたけれど日韓の間でもきちんとやらなければならないと思います。

中国の強制連行はだいたい山東省、河南省、河北省あたりからなのですが、河北大学の学生が昨年の夏休みにこちら側が提供した名簿を基に、遺族や生存者探しをやったんです。名簿はもちろん当時連行された人の名前、だいたい300人くらいでしたが、中国の人はそう大きくは動いてないようで、花岡で働いたという人が30~40人ほど生存していたようです。中国ですとこういうことも可能なのですが、朝鮮の場合はどうでしょうか。

たとえば、三菱に徴用され被爆した人たちでも、生存者や遺族をどれだけ突き止められるか。こう考えると日中と日韓との違いがはっきりわかんと思います。

補償問題

補償の問題では、法律的な処理で言えば台湾の間では1952年に日華平和条約によって、1965年には日韓条約による有償無償5億ドルということで、一応の戦後処理は終わったということになっています。これ以後外務省との交渉では何かにつけて、日韓条約で解決済みですという、判で捺したような談話が必ずでできます。日中間では1972年に共同声明がだされ、中国側は日本に対する戦争補償を放棄しました。当局の方はこれで一応のけりがついたとし、社会全体もいつまでも戦争を引きずっていてもしょうがない、もう終わったんじゃないの、という感じになりがちなんですが、果してそれでいいのかなということを考えてしまいます。中国では、今年3月に行われた全国人民代表大会に対日民間賠償要求建議書が出されました。そのポイントは、戦争中に中国が日本から受けた被害は3000億ドルであって、共同声明で放棄したのは1200億ドルであり、1800億ドルはまだ残っている。これは民間が受けた被害である。たとえば南京大虐殺は民間の被害であるが、これらについて賠償を請求する権利がある、ということなのです。どこでも民間と国レベルの問題は別に考えているわけです。

民間レベルの運動

日韓の問題は解決したといっても、たとえばサハリンにおいてけぼりにされた人たち、在韓被爆者の問題、従軍慰安婦の問題などなど、いっぱいそういう被害があります。そういう人たちが声をあげはじめている。これをどう考えたらいいか。わたしはやはり民間レベルの問題というのは非常に重要だと思います。

す。シベリア抑留の問題で言えば、ゴルバチョフ大統領はシベリアで亡くなった日本人の墓に献花をしてから来日しました。かつて日本の総理大臣が一度でもそういうことをしたでしょうか。ゴルバチョフ氏はなかなか立派だと思えます。シベリア抑留については、抑留された人が約60万人、亡くなった人が5~6万人ですが、抑留された60万人のソ連に対する不満はうんとあるわけで、それぞれ大きな団体をつくってソ連に対していろいろな働きかけをし、その結果、亡くなった人たちの名簿を提出してもらうことになったのです。しかし日ソ間では1956年に共同宣言が出され、戦争に伴う問題についてはお互いに放棄するとなっているのです。国レベルではそうであっても被害を受けた民間レベルでは黙っていない。先だつてのゴルバチョフ氏の来日の時には団体の代表達が何人か握手しましたが、日本の総理大臣が、たとえば強制連行された人たちの代表と握手したことがありますか？戦争は全部終わったということで世の中は動いているようですがそうではないのです。

民間請求権

去る3月20日の参議院で、シベリア抑留の補償問題で日本人の民間の立場からの補償請求について、わが外務省の兵藤局長は、日ソ共同宣言でお互いに請求権を放棄したのは国と国とのレベルであって、民間の立場でソ連に対し何を要求するかということについては国はいっさい関係なく、禁止するというようなことでは全くない。ソ連に対し何かを要求するのであれば好きなようにやってください。外務省は手伝うことはできないが、それをやるのに何の防げにもならないように日ソ共同宣言はつくってあるのです、という発言をしました。だから中国も韓国も民間レベルで日本政府相手に補償などをどんどん請求すればいい。日韓条約で3億ドル払っていよ

うと、中国側が賠償放棄をしようという関係ない、ということにはならないのですね。国会でもそこところは質問しない。けれども今までのようなものの考え方はあかかないというのも事実です。

歴史に対する認識

思想的なレベルの問題でしょうか。海部さんは口ではいろいろ言うけれどシンガポールに行っても犠牲者の慰霊碑に献花のひとつもしない。ドイツのブラント首相も先ずユダヤ人の墓にぬかずいたわけですよ。シンガポール側から掃海艇の露払いにきたんじゃないのと言うのを、現地にいる記者が、イヤ、首相は心から詫言いましたとかばったのですが、これが逆目に出て、心底から詫言のなら何故記念碑に花輪のひとつも捧げないのかと言われました。しかも海部さんは日本人の墓に頭を下げてきたゴルバチョフと握手し、その手の温もりも冷めないうちにシンガポールに行ったんですよ。この歴史に対する鈍感さ。

かといって海部さんだけを問題にしてもはじまらないというか、わたしは日本のマスメディアは全くしょうがないというのが実感です。首相が特別機を飛ばす時はマスメディアの連中も大勢ついていくわけですが、シンガポールでの様子や現地の反応について1行の原稿も送ってこないです。首相に、何故記念碑に献花をしなかったのか訊くことができない。首相が行なう政策演説についても何ひとつ質問ができない。

時間になりましたのでこのあたりで話を終えます。

入門講座講演 (2)

地域での調査の進め方

金 蓬 洙



カメラを持って仕事へ

みなさんこんにちは金蓬洙です。

実はわたし今現場でへとへとに疲れていて、座っていても寝ていても全身が痛くてたまらないというような状態なんです。わたしは今、各務原市の川崎重工の裏手にあたる興亜町というところで仕事をしています。興亜は亜細亜を興すという字を書くんですが、中国人や朝鮮人の強制連行の跡地ばかりで飯の種を稼いでいるんじゃないかって言われほどなんです。実はここもそうなんです。写真集をつくる時も写真を撮りやすいようにということで、トンネルのすぐ近くでマンションの設備工事を請け負って、仕事をしながら写真を撮って歩いたりしたんです。『写真集 証言する風景』は、昨年の全国交流集会を終った後で風媒社の社長から持ちかけられたんですが、わたしたちは出版社から写真集を出すような、そんなテイのいい人間ではな

いということで断わり続けていたんです。それが、先にお話をなさった田中先生は人にものを頼まれると絶対に断わったりしないという方なので、風媒社の社長も先に田中先生に話を持ちかけて、なんとなく写真集の仕事をさせられる羽目になってしまったんです。聞くところによると田中先生は、東京の出版社の強制連行全国版の編集委員になられてるそうで、戦々恐々としているところです。

調査に若い力を

わたしは入門講座の話をせよと言われたとき、こりゃたいへんなことになったと思ったんです。入門編で話をするので若い人が1人でも多く強制連行に関心をもってくれ、ただでさえ人手不足の調査の時に若い力がはいてくれたらいいんですが、早い話がスカウトマンをやるようなもんですから大変だなと思ったわけなんです。今日は自分の体験を通して感じたことなどお話ししてみようと思います。

朴慶植先生との出会い

わたしが初めて朴慶植先生に出会ったころ朴慶植先生はちょうど今のわたしの年だったんです。48才でまだ朝鮮大学に籍をおいておられました。ちょうど愛知県の犬山市に博物館明治村というのが開館した時で、わたしはその頃明治村駅の近くに住んでいたものですから、朴慶植先生が訪ねていらしたときは明治村の駅で待ち合わせをして一緒に現場を歩いたりしたことがあります。その頃の朴慶植先生はお酒は一滴も飲まれなかったのでへんな朝鮮人だなと思っていました。もっとも今はかなり飲まれているようです。

飛び込みで調査

わたしは18の頃から犬も歩けば棒にあたる式で1人でふらふらと高山線沿線や飛騨川沿線など歩いていたんです。その頃、飛騨金

山の町で酒屋に入って、この辺りに朝鮮人の家はありますかと訊ねて教えて貰い、いきなりその家に行って強制連行の現場はありませんかと訊いたりして、失礼な奴だと怒鳴りつけられたりしたこともあります。岐阜県の亀岡に行った時もそんな調子で、本屋で見つけた朴先生の最初の『朝鮮人強制連行の記録』の本をもってふらっと行ったわけです。わたしたちは朝鮮人のことを調べているんですが、どうしても必然的に中国人のことも見えてくるんです。朝鮮人だけという現場はけっこうあるんですが、中国人だけで働いていたという現場はほとんどないわけで、ほとんど朝鮮人中国人がいっしょに働かされていたようです。少なくとも岐阜県下の5カ所はそうです。

企業の責任

さっき田中先生も、強制連行が始まるについては企業が労働力を求めて政府に要請したとおっしゃいましたが、軍需工場用の地下トンネルに関しては、企業が軍に対して工場疎開用の地下トンネルを掘って欲しいと再三再四要請しているんです。あの当時、飛行機をつくる機械というのは世界的な1級品を輸入していたようですが、そんな高価な生産手段を爆撃から保護したかったんですね、企業は。だから強制連行に関しては、特に企業の責任を追求していかなければならないと思うんです。企業は、あれは国のやったことだからと言って逃げを打ちますが、企業の要請に基づいて、当時の軍が応援の工事を進めたんです。そうやって生産手段を温存した企業はあのようにいま太ってるわけです。その辺の事は今後この問題を追求していくとき皆さんも押さえておいてほしいと思います。

地域での調査方法

地域で何かを調べようと思ったら、まず町史や村史など地方史を調べるといいと思う

んですが出てこない方が多いですね。それでも希には出てくることもありますから、やはりそういうものも目を通すべきだと思います。社史もほとんど触れてないところが多いんですが、10に1つくらいは触れていることもあるんで、まずは目を通して見る必要はあると思います。貴重なのは、当時強制連行に関わった建設会社にいた重役など、たとえば川崎とか三菱で重役だったような人間は、死ぬ前に、虎は死して皮を残すみたいな感じで本の1冊も残したくなるようなんですね。そういう回顧録のようなものの中で、今までオフレコにしてきたようなことを割と滔々としゃべっているんです。だからそういう回顧録のようなものも目を通してみるといいと思います。また現場なんかにいったら地元の人たちと仲良くして、何でも話ができるようなよい関係をつくるように心がけるといいですね。わたしもよく現場に行きますが、写真集をつくる時も田舎の人はわい談が好きだからと、風媒社の編集者がいっしょに行って非常に下品な言葉を乱発しながら聞き取りをやったことがあるんです。地元にもうくとけ込むというのは難しいですね。たまには何か手土産を持って行ったりしますが、地元の人と仲良くなると、たとえば他の人たちが何人くらいトンネルを見にきたとか、誰かが慰霊祭をやったとか、どこの新聞社が取材に出遅れたとか、いろいろなことが全部耳に入ってくるんです。そうなればしめたものです。

名簿調査

戦後補償については、犠牲者に対する補償は朝鮮人の場合は非常に残念ながら証拠というものが全くないので難しいのです。朝鮮人と中国人が働いていた河辺というところでは、岐阜県の渉外課から関係書類を全部焼却するようにという通達がきたのです。国から県、県から現場へとタテの関係なんですが、それらが全部いっしょになって証拠隠滅を図

っているんです。だからといって名簿の作成が全く不可能ということはありません。日本国内で死亡した人の名簿は、法務省が明治以降、永久保存として全部マイクロフィルム化して保管しているそうですから、それを見ても死亡者名簿はつくれるはずなんです。ぼくらは民族的感情から言うならば、日本政府のあくまでも名簿公開はしないという不条理な態度に対しては、わが国を早く統一し、1個師団くらい派兵して法務省の倉庫に突入してでも名簿を入手しなければと思うほどなんです。10年くらい前ですか、企業爆破事件が続いた頃は、ぼくたちの強制連行の調査もずいぶん足を引っ張られました。その頃田舎を調べて歩いても、ぼさぼさの頭をしていたら過激派じゃないのかと言われて全然話してもらえなかったりしました。ですがあの爆破事件の彼らはまじめに勉強していて、強制連行のことでもぼくらよりはるかによく知っているんです。

日本社会の変化

最近の日本社会は変わったというのか、老人なんかでも割と気楽に自分の知ってることを話してくれるようになりました。昨年、全国交流集会をした時にぼくは朝日新聞の“人”の欄に載ったりして、会社を首になるんじゃないかと心配したんですが、社長の奥さんが新聞を見て拡大コピーして事務所に貼ってくれたんです。ずいぶん変わったなあと思いました。そういう意味では地方を歩いてもやりがいはありますね。中部地方もまだまだ調べなければならぬ現場がたくさんあるんです。

強制労働の現場

田中先生も、朝鮮人に関しては人数もはっきりしないとおっしゃいましたが、たしかに資料的にははっきりしないんです。昨年、韓国の連合通信の記者が取材に来たときに強制

連行の現場を案内して歩いたんです。彼らは、こうして現場を見て歩くとわが朝鮮半島の青少年は全員日本に連行されたような感じがするなあと言いました。たとえばトンネル工事とか、丸山ダムという、当時は東洋一のダムだったようですがこの崖っぶちのコンクリートを打ちとか、水面下の基礎工事などでは、朝鮮人中国人はもちろん、連合軍の捕虜や囚人なども動員されて工事したらしいんです。土地の人の話では、その当時の人間がコンクリートのなかに埋まっているだろうということなんです。中には奇様な人もいてトンネルの中に自費で観音像をつくって祀ってくれたりしているんです。まあ、こんなことをしたから商売も繁盛したハハハハというわけなんですけどね。

慰霊について

慰霊碑について言えばぼくは慰霊という考え方は納得できます。以前亀岡に行って『朝鮮人免許願綴り』を見ながら死亡者の名前を書き移していたときですが、ぼくと同じ世代の子供たち、ちょうど1945年に0才から1~2才の子どもたちが夥しい数死んでいるのがわかったんです。それでも手書きではとてもその子どもたちの名前までは書くことができなかったんで、正の字を書きながら数えていったら82人いたんです。その時からぼくは自分1人の力で亀岡の町に母子像を造りたいなあと思う続けているんです。運動の仲間でもある弟が、まだそんなセンチメンタリズムに浸るのは早すぎる、今はまだ他にやらなければならないことがいっぱいある。時がきたら自分も半分手伝うからと言ってくれるんですが、ぼくたちがこんなにこだわるのはやはり同胞への思いと同時に、自分も毎日現場で苦しい労働をしているので強制労働をさせられた人たちを忘れることができないからだと思うんです。今は中国人が強制労働をさせられた場所で働いているもんです



から、仕事が終わって毎日餃子を食べながら生ビールを1杯飲んで、あの当時強制労働させられた中国人たちは餃子も食べさせて貰えなかった、ましてや生ビールなどとんでもないことだったと、強制労働させられた朝鮮人中国人の苦しみに思いをはせながらとにかく毎日堪え忍んで働いているわけです。

大手の会社の姿勢

どうしてこんなに働かなきゃならないのかと思うくらい、建設現場というのはとにかく人手不足で、韓国人の留学生でもアルバイトに連れて行きたいくらいなのですが、監督に訊ねると留学生は絶対ダメだと言われます。大手の建設会社は、たとえば外国人がたった1人でも死亡事故を起こそうもんなら、われわれのような人間がわーと寄ってきて過去にまで遡って追求されるということをちゃんと

知っているんです。だから一流の建設会社の現場はいっさい外国人労働者はおよびではないんです。外国人は小さな三流の現場でしか働けないんです。日本の国立大学にいるちゃんとした学生でもダメで、そのくらい徹底した排除というか方針をもっているんですよ。むかしどれだけ悪いとをしたかだいたい想像がつくというものです。

これくらいで話を終えたいと思います。

「花岡蜂起事件」にアジア民衆との連帯をたぐる

(司会 猪八戒・金唱律)

1. テーマ設定とプログラム

(1) 1989年12月、蜂起指導者耿諄さんらの創る「花岡事件受難者联谊会」が鹿島建設に対し強制連行と418名の死者を数えた虐待の責任およびその謝罪と清算を求める公開書簡を送った。(資料1)

書簡は、花岡事件にしろされた鹿島建設の残忍さを改めて世に暴くとともに、生存者、遺族の癒されぬ傷跡の深さを浮きださせた。

同時に、花岡蜂起の意味を投げ棄てている日本社会への苛立ちと怒りを窺い知るもので、アジア民衆史とのありようを問う。

(2) 分科会の参加者は、中国人の強制連行は初耳!の人を含めて32名。終了時8時45分まで残った人24名。4時30分の開場では、中国人強制連行関連年表・文献目録、パンフ『花岡鉋泥の底から』、『暗闇の記録』の抜粋資料が配付された。

最初にビデオ「鉋泥の底から－花岡事件の今」が30分放映され、以後次の順序で進行した。

◎「花岡事件の調査が踏まえる事」－桜井秀一氏(花岡蜂起問題にこだわる会)

◎「中国人強制連行－国家と企業の戦争責任」－石田元博氏(こだわる会)

◎「花岡蜂起の継承と花岡運動」－石動綱彦氏

◎スライド－B・C級横浜法廷に提出された検察側証拠写真

◎「カメラの見た朝鮮人・中国人と日本」－金唱律氏(ピットムの会)



◎「秋田民衆と花岡事件」－野添憲治氏

◎討議

(3) 各報告に先だって、花岡事件への日本政府及び鹿島建設の見解、対応が説明された。

(a) 日本帝国主義は華北各地の占領地の維持や周辺の治安確保の目的で強制連行を実施していた。それは、民衆を抗日勢力と結合する可能性の高い流民であるとの認識に基づいており、強制労働を当然とした。組織的、計画的に「大東亜共栄圏」建設に利用するための拉致・連行は主に軍事力によっていた。

(b) しかし、日本政府は、連行された中国人の身分を、国際法上の捕虜か否か詳細な資料を存在しないために判明しないとした上で、契約労働者と定義づけ、1972年日中共同声明後は、日中間の戦争に係わる問題はないとして今に至っている。

(c) 鹿島建設も政府と同一見解であった

が、1990年7月「花岡事件受難者联谊会」との直接交渉の場で、強制連行と酷使の事実を認め、謝罪を表明した。(資料2)

その後、「共同発表」の空洞化を画策。賠償は一企業が負うべき問題でないと逃げの姿勢である。



II. 各報告の要点

「花岡事件の調査が踏まえる事」

桜井秀一氏

(1) 日本への強制連行の基本構造は、愧らい「満州国」にその根を持つ。うち華北の捕虜の連行は、盧溝橋事件直後に発生した「通州事件」(1937年7月28日)の保安隊補充隊員が、9月下旬吉林省豊満ダム土木現場で日本の特殊法人「大東公司」(関東大震災の際に大杉栄らを虐殺した甘粕正彦に実権)のもとで酷使されたのを最初とする。続いて11月、承德-古北口間の軍需物資輸送簡易鉄道の工事現場、榎谷組工区に連行された。鹿島組(当時)も請負組のひとつ。抗日気運が生んだ日本側の「労働力の枯渇情況」に、ジュネーブ条約の俘虜虐待禁止条項を無視した関東軍は、捕虜による充足を「満州」土木建築業協会(95%以上が日本人経営者、会長は榎谷仙次郎、鹿島組は評議員)に通知、協会は国策上の見地と称して「試験」使役。軍監視

下の従業成績良好を理由に以後の漸増を決定し、業界はあげてこれを歓迎した。捕虜を消耗品労働力の供給源泉とみなし、実際の使役可能とするため、軍警との癒着をはかり、企業が募集費名目などの金銭支払いで軍と捕虜の売買を開始した。

(2) 鹿島守之助の大政翼賛会調査局長時代、強制連行の立案過程で果たした役割など、必要とされる項目を挙げて報告を終わった。

<主な資料>『満州国史各論』『満州土木建築業協会報』『大東』『榎谷仙次郎日記』など

「中国人強制連行-国家と企業の戦争責任」

石田元博氏

(1) 奴隷労働の提言

1939年、統制経済の下、より低賃金な中国人を国力増強に奉仕させることは、国策に合致するとして連行を政府に迫る「願書」に始まり、1941年の中国人を国内立法によらず、特殊管理下に置けとする「鉱山労務根本対策意見書」に引継ぐ。大陸での企業暴利を可能にした奴隷労働の提言である。

(2) 虐殺で増幅する企業利益

1944年「中華人労力供給賃金計算書」は、上の提言を数字に置き換えたもので、被連行者300名に対し50名もの死亡者数(17%)が計上されている。高死亡率が形式上負担すべき高い「処理費」を必要総経費に加算して、底上げを行い、企業利益を「必要総経費」×15%としてはじきだす仕組みである。工事進展に支障をきたさない限りの高死亡率は政府、軍公認であり、食料の粗悪化、医療費の削減なども企業利益につながる。なお、工事請負請求書は別途提出。

(3) 1944年8月、政府の「国民動員計画」に中国人3万人を組むに前後して、大手土建に軍需会社法の準用のほか、運輸通信省より港湾荷役会社に「華人労務者移入補助」として606万円が、軍需省から石炭・鉱山関連会社に「華人労務者確保費」として約200万円



が、そして「華人労務者内地移入」に伴う警察機構拡充費2900万円余が、いずれも「昭和十九年度第二予備金」から支出されている。

(4) 以上の事実、中国人強制連行が企業側の強い要求と政府の手厚い保護の下に実施された事の一端を示すもので、「1942年東条内閣の閣議決定により」とする枕言葉での責任の回避は許されない。

＜主な資料＞『暗闇の記録』『法令全書』『昭和十九年第二予備金支出調査書』など

「花岡蜂起の継承と花岡運動」

石動綱彦氏

自らの生い立ちに花岡事件への関心を重ねて語った後、四面楚歌の状況下で集团的武装蜂起を決行した事実、最も大きい意義があったと強調。戦後、日本階級斗争が朝鮮人・中国人の解放斗争に学ぶことなく、無視して来た傾向を批判した。又、蜂起後、耿諄さんらがうけた秋田有罪判決は今も放置されており、異議申立の必要性などを説いた。

「カメラが見た朝鮮人・中国人と日本」

金唱律氏

主に写真集『証言する風景』をベースとして話は進められた。「外務省報告書」1946年3月の虚偽の記述と事実の記載もれを指摘。

また、岐阜県川辺町で、飛島組に酷使されていた朝鮮人と中国人が、1945年8月14日夜、付近の神社に結集、憲兵隊や警察の警戒体制にひるむことなく、一日早い独自の解放を迎えていた事実などを披露した。

「秋田民衆と花岡事件」

野添憲治氏

貴重な指摘も多く、別の機会に報告を譲りたい。なお、同氏の『聞き書き花岡事件』（御茶の水書房）を一読されたい。

III. 結び

朴慶植先生の記念講演「50年代、中国人強制連行問題は日本の民衆運動の一端を構成していたが、60年代に衰退した…」の言葉が耳に残る。事実、その後は、秋田での聞き書きをされている野添氏の成果を除いて、見るべきものは少なく、中国人強制連行の分野の研究者のなさや調査研究の低さは目に余るといって過言でない。この事態は第2分科会にも現れており、報告は初步的な段階にある。野添氏を除いた他の報告は、いっそうの深みを要求されている。さもなければ「联谊会」の呼びかけに応じられないであろう。もちろん、第三回の交流会に向け努力を惜しまないのだが。

各報告とも熱のこもった内容で、じっくりと討論をかわすには、時間が少なすぎた。会場ぎりぎりの15分前までねばったが、参加者各人の短い感想で幕となり、惜しむ次第である。

〔資料1〕鹿島建設に対する公開書簡

1944年7月、日本侵略軍はわれわれ中国人捕虜1000人を日本の秋田県花岡町に強制連行し、鹿島組花岡出張所の監視のもと、花岡鉱山の河川工事という苦役を強制した。そして、鹿島組補導員（看守）の凶悪残忍な虐待

のもと、日本到着から日本敗戦までの間に、前後 418 人が死亡した。われわれ殉難者の遺骨は、一部今なお日本の土に埋もれるもの、故国に送還されたもの、いずれもその肉親にとって耐えがたい苦痛をもたらしている。心あるものなら誰しも、その骨肉の引き裂かれる痛みを感じることができよう。

わが会は、ここに、鹿島組がはっきりと改悛の意を示し、史実を重んじ、平和の大道を歩むことを特に要求したい。すなわち、花岡の惨劇を教訓とし、後世を教育するとともに、世間に鹿島組の“過ちを知らば改める”との公明正大な態度を示すことである。それによって初めて、このいまだ償われない血債も清算されるのである。

わが会は、ここに、次のことを決定した。即ち、鹿島組が以下の3点を実行することを要求する。

(1) 鹿島組は、わが殉難烈士の遺族及び生存者に対し、鄭重に謝罪を表明すべきである。それによってこそ、この血債が血債簿から消滅するのである。

(2) 鹿島組は、改悛の態度を表明し、日本の大館市及び中国北京市にしかるべき規模の花岡殉難烈士記念館を建立すること。記念館は参観者の烈士追悼に供し、後世を教育するために存し、鹿島組の懺悔の態度をたたえ、敢然として改悛する者の模範となるであろう。

(3) 鹿島組は、われら花岡の受難者 986 人(殉難者遺族・及び生存者)に対し、各人に 500 万日本円の賠償を支払い、もって、わが受難者が蒙った肉体及び精神上の苦難・傷痕そして犠牲に対しての補償とすべきである。

もしも鹿島組が、なおも頑迷でありつづけるならば、千秋万代の後、われら子々孫々の末代まで、永遠に鹿島組に対してこの血債を追及しつづけるであろう。まして、花岡の惨劇は世間周知の事実であり、どうして覆い隠すことができよう。

1989年12月22日 北京に

て
鹿島組花岡強制労働生存者及殉難者遺族聯誼準備会

(略称：花岡受難者聯誼準備会)

会 長 耿 諄

副会長 李 介生

幹 事 王 敏

張 肇国

(資料2) 共同発表

1944年から1945年にかけて、株式会社鹿島組花岡鉱山出張所において受難した中国人生存者・遺族が今般来日し、鹿島建設株式会社を訪問し、次の事項が話し合われ認識が一致したので、ここに発表する。

1. 中国人が花岡鉱山出張所の現場で受難したのは、閣議決定に基づく強制連行・強制労働に起因する歴史的事実であり、鹿島建設株式会社はこれを事実として認め企業としても責任があると認識し、当該中国人生存者及びその遺族に対し深甚な謝罪の意を表明する。

2. 中国人生存者・遺族は、上記事実に基づいて昨年12月22日付けで公開書簡を鹿島建設株式会社に送った。鹿島建設株式会社は、このことについて、双方が話し合いによって解決に努めなければならない問題であることを認める。

3. 双方は、以上のこと及び「過去のことを忘れず、将来の戒めとする」(周恩来)との精神に基づいて、今後、生存者・遺族の代理人等との間で協議を続け、問題の早期解決をめざす。

1990. 7. 5 東京にて

花岡事件中国人生存者・遺族を代表して

耿 諄

鹿島建設株式会社代表取締役副社長

村上光春

土木建設工事と朝鮮人・中国人労働者



(司会 徐根植・宋秀子)

が相次いで見つかっています。これらは解放(1945年8月15日)前に建立されたものです。担当者の勝手な希望ですがこれらを取り上げ石碑調査を通じて在日朝鮮人の歴史の掘り起こし、再発見を進めて行きたいと考え分科会で発表していただきました。

◎発表

①日本軽金属(株)・富士川水電工事への朝鮮人労働者動員の実態と課題

—金浩氏(在日朝鮮人運動史研究会関東部会)

・質問、返答、意見

—質問：飯場の労働の実態についてどんなものだったのか？

—返答：朝鮮人側の証言者がいない。

—質問：朝鮮人が飯場頭だったのか？

—返答：1939年に7割が朝鮮人だったのでそれ以降日本人の若い人が戦争に取られたのでこれ以降の工事はほとんど朝鮮人だった。そうなると飯場頭は朝鮮人でないとおさまらない。また飛島組などでは飯場頭をまとめる人、一人で工事を請け負うような人がいたという証言がある。

—質問：朝鮮人労働者を斡旋するとかという何か口利きする団体などがあったんでしょうか

*ここで朝鮮人労働者の集団雇用がどのように行われたかについていろいろな話になる。

*飯場頭やたこ部屋、請負の形等につい

I. 分科会参加者数

①発表者：4名

②参加者：19名

③司会：2名

④合計：25名

II. 進行プログラム

◎第3分科会について紹介

第3分科会は資料集の中の紹介にもありますように、取り上げる時期を強制連行期以前に広げました。それは土木建設と強制連行の事実は今日まで調査、発表されたものがたくさんありますが、特に今回は土木建設工事における朝鮮人、中国人のその地域社会における貢献、日本人との連帯、親交の歴史的事実をとりあげたいので広げました。

最近、土木建設工事で犠牲になった朝鮮人労働者の名前が刻まれた慰霊碑、追悼碑など

て意見が多くでた。発言者4人

②昭和池と朝鮮人労働者

－友井公一氏（兵庫県社町町会議員）

③石川県加賀市の下福田ため池と朝鮮人労働者

－加端忠和氏

④近鉄旧青山トンネル工事における朝鮮人労働者

－森川篤実氏（三重在日朝鮮人史研究会）

⑤「韓国併合」条約以前の日本における朝鮮人労働者の調査、研究と解放前に建立された在日朝鮮人が関係する石碑調査について呼びかけ

－徐根植氏（兵庫朝鮮関係研究会）

（加端氏の発表は事前の申込がありませんでしたが、時間的に4人の発表は可能と思い、発表していただきました。）

・質問、返答など

－質問：外国人労働者制限法があるにもかかわらず1908年の時期にこんなにたくさんの朝鮮人労働者が日本に入ってきたのか？それは正規ルートなのかどうか？

－質問：農業関係にも1928年に数十人単位の朝鮮人労働者を農家が雇入れている。そんな雇用がどんな経路で行われたのか？

○朝鮮人労働者の就労の経緯についての質問

・誰が朝鮮人労働者を工事現場に斡旋したか？どのような形で飯場が形成されたか（親方は朝鮮人か？日本人か？）

・企業の斡旋か？、専門のブローカー等がいたのか？それとも単なる縁故によるものか？

Ⅲ.朝鮮人労働者について出たい ろんな意見、研究者の話

－明治初期鉄道建設や炭鉱に囚人などの労働力が使われたが、企業の海外進出に伴い現地での雇用経験から外国人労働者、朝鮮人など

を使うようになった。

－「韓国併合」以前にたくさんの朝鮮人労働者が日本で働いていたが当時は勅令 352号で中国人の就労は禁止されていた。しかし朝鮮人労働者は多く入って来ている。これは朝鮮を植民地化しようとした、明治政府が併合前であるが日露、日清戦争を戦った日本は朝鮮をすでに属国と見ていたので特に禁止や制裁を強く求めなかったのではないかな？

－「韓国併合」以前にたくさん来ていますが日本名を使っています。創氏改名以前、それも併合当時から使っている。

また新聞などを見ると裁判中の併合以前は「朝鮮人」で併合すると「韓人」になり1週間も経つと「鮮人」になる。そこに差別意識が生まれてきている。

－朝鮮人の中に親日家があったが彼らは生活の便宜上日本名をつけたのではないかな？そんな人もいる。

－在日の1世の人たちの話を聞くと日本の収奪が激しくて朝鮮では食べられないと言うんです。内地でも地主収奪がひどかったが韓国では当時農民の手元に翌年の2月までの食料しか残さないようにすることが認められていたと言うんですよ。

そして翌年の2月になって食べるものが無くなるんでしょ、すると満州から雑穀でしょコウリャンとかあいうものを持ってきたそれを売りつけて朝鮮の農民に食べさせるといふ、そういう風なことを資本と政府が組んで政策的に日本の内地よりはずっと過酷なことをやり易いから行われたと言う事実もあるから政治的な強制連行以前に行おうとすればいくらかでも出来る素地が植民地支配の中で出来上がっていたでしょう。資本と日本の植民地支配は想像していた以上に過酷なものがあった。

－植民地政策については時期を区分して見ないと見えなくなるものがある。時代によって政策も変わっているので、それによって朝鮮

人労働者の日本への渡航が変わるから時期を分けて見る必要がある。

—交流集会が強制連行・強制労働がテーマなので仕方がないかもしれませんが、土建関係は特に地域に密着した形で行われているので朝鮮人が主体的に闘ってきた部分も取り上げてみる必要がある。

—朝鮮人が日本にいかに関われてこられたかと言うことと同時に在朝日本人のことがもっと調べられて語られるべきだ。日本人の立場から朝鮮における植民地支配をとらえることは在朝日本人を抜きにしては語れないんじゃないか。

—今の在日朝鮮人をとらえるためには地域史的なとらえ方、地域の在日朝鮮人社会の形成をとらえないと今の問題が見えてこないんじゃないか、そういう意味で出来ればテーマをもっと狭めてやればいいんじゃないか。

—資料も地方にまだ見つけられていないものがたくさんある。考えていないので見えてこない資料がある。探せば出てくると思います。

IV.まとめ

参加者の3分の1しか発言していない。発表者を除くと5分の1しか発言がない。もっと多くの人から質問や疑問が出されるべきでそう運営するべきだった。

交流集会なので発表や質問でなく、調査研究で知りたいことを自由に聞き、知っていることを活発に教えるざっくばらんな雰囲気にするべきだった。

担当者の発言が以外と多かったので反省。もっとたくさんの方に発言してもらえよう運営するべきだった。

・当初の予定で強制連行期以前について取り上げたが、強制連行、強制労働の実態や調査などについて質問、返答、意見が少なく、「韓国併合」以前の朝鮮人労働者の日本への就労



の経緯について論議された。

・質問者の多くが朝鮮人労働者の労働現場での雇用関係のシステムについて知りたがっていた。すなわち多数の朝鮮人労働者がどのような経路で日本に働きに来たか、すなわち工事現場への斡旋や紹介はどのような経路で行われたかを知りたがっていた。

しかしこの問いに充分に応えることが出来なかった。

第3分科会からの提案

—石碑調査の呼びかけ

解放前に建立された在日朝鮮人が関係する石碑調査について

兵庫朝鮮関係研究会

徐根植

日本各地には解放前（1945年以前）建立の工事で死亡した朝鮮人労働者の名が刻まれた碑などがたくさんあると思われます。この交流会を通じて全国に呼びかけ、何処に、どんな石碑が建てられているのか調べて、まとめてみたいと思います。

石碑はまさに朝鮮人労働者がその工事に従事した証であり、後世に伝えるインパクトある手段であり、第1級史料と言えます。

石碑の存在を確かめ、建立の由来を調べていくことで在日朝鮮人の忘れられた歴史を発

掘できると思います。

石碑という目でみて確かめられる在日朝鮮人の歴史の証を日本全国的に調べ集めまとめる事は在日朝鮮人の歴史研究で貴重な資料になると考えます。

○調査内容

- 1) 碑の名前
- 2) 建立年月日
- 3) 発起人
- 4) 碑のある場所
- 5) 碑が建立された経緯
 - ・工事名及び簡単な内容・企業名
 - ・請負業者・朝鮮人労働者の数・事故など
- 6) 碑に祭られている人の名前、人数
- 7) 碑の大きさ（高さ、幅など）
- 8) 碑の写真（正面、斜め、周囲を入れて）
- 9) 碑銘全文

◎参考

『六十三年後からの出発－朝鮮・日本民衆の真の連帯をもとめて』三重県木本で虐殺された朝鮮人労働者の追悼碑を建立する会編

・この本のP105 に日本各地の朝鮮人、中国人関係の石碑がまとめられている。

○調査してわかったことについて兵庫朝鮮関係研究会にまとめていただければ会報「兵朝研」に載せて他の方にお知らせします。

解放前（1945年以前）に建立された石碑

兵朝研：徐根植作成

①肥薩線 大畑、人吉間工事犠牲者追悼碑
調査：小松裕

・肥薩線 大畑駅に「鉄道工事中殉難病死者追悼記念碑」がある。

・1908年（明治41年）10月建立

・14名の犠牲者が祭られているが朝鮮人1名の名前が刻まれている。

②山陰線の「招魂碑」

調査：徐根植

・山陰本線 鉄道工業合資会社請負の第22、23区及び余部工区における鉄道工事中職斃病死者の供養のために建立

・1911年（明治44年）10月1日建立

・建立の由来と27名の犠牲者、発起人21名の名前が刻まれている。

・27名の犠牲者中7名が朝鮮人である。

③旧生駒トンネル西口「招魂碑」

調査：田中寛治

・東大阪市日下町の稱揚寺に近鉄奈良線（旧大阪軌道）旧生駒トンネル西口工事中の犠牲者の招魂碑がある。

・犠牲者24名の名前があるが、3名が朝鮮人である。

・他に発起人18名の名前が刻まれているが建立年月日が無い。

・工事終了が1914年4月18日で、この頃に建立されたと考えられる。

④旧青山トンネル工事「供養塔」

調査：森川篤実

・三重県名賀郡青山町に近鉄（旧参宮線）旧青山トンネル工事犠牲者を祭った「供養塔」がトンネル西口近くにある。

・1930年（昭和5年）3月建立

・工事殉職者16名が祭られているが、8名が朝鮮人である。

⑤昭和池の「慰霊塔」

調査：友井公一

・兵庫県加東郡社町の「昭和池」にため池築造時の犠牲者を祭った慰霊塔がある。

・1934年（昭和9年）3月建立

・殉職者7名の名前が刻まれているが、4名が朝鮮人である。

第4分科会

炭鉱・鉱山・軍需工場と強制連行

(司会 川瀬俊治・島津威雄)



1. はじめに

第4分科会の「炭鉱・鉱山・軍需工場と強制連行」は当初、①炭鉱労働の実態全般について、②強制連行と炭鉱・鉱山労働、③徴用と軍需工場、④協和会と炭鉱徴用、⑤中国人の強制連行と鉱山・炭鉱－を考えていたが、④、⑤は別の分科会ならびに内容として今回はふれられずに、次回以降の課題として残った。

さて強制連行については、15年戦争の進展の中で日本政府が、1938年4月1日、「国家総動員法」を施行、以降、朝鮮人、中国人の炭鉱・鉱山・軍需工場・土木工事現場での就労に強制していく。朝鮮人の強制連行は1939年度（会計年度）から始まるが（内務・厚生

両次官通牒「朝鮮人労働者内地移住に関する件」）、その実態はどうだったのか。政府関係文書の発掘はどうか。また地域での発掘はどうか。こうした史実をつきつけられることこそ、侵略の歴史をたどることができるわけであり、その意味で史実の発掘、掘り起こしはきわめて大事だけに、今回の各地の報告は注目された。また資料面では企業側からの資料の提供を求めることがなかなか難しい現状や、公文書では一級資料である知事引き継ぎ文書の公開を勝ちとる粘り強い運動を展開していく重要性を確認した。

II. 発 表

「長生炭鉱の“水非常”を歴史に刻む会」

まず山口県の「長生炭鉱の“水非常”を歴史に刻む会」の山口武信氏から、①事故の概要、②長生炭鉱殉難者之碑について、③長生炭鉱の“水非常”を歴史に刻む会の誕生とその活動—の三点について報告があった。

事故は1942年12月3日午前10時ごろに発生、183人が水死した。47人が日本人、朝鮮人は133人（「自由」50人、「募集」83人）、民族不明が3人で、いまでもその遺体は眠ったままだ。

炭鉱は1933年創業といわれているが、記録からみると、32年初めから創業しており、一般坑内夫はほとんど朝鮮人で、通称「朝鮮炭鉱」と呼ばれていた。39年度からの「募集」形式による強制連行で朝鮮半島（特に慶尚南、北道）からの連行が多く、41年6月までに1258人が雇い入れられていた（中央協和会）。

犠牲者の名前の確認だが、位牌には139人が朝鮮人名で、48人が日本人名になっている。会では朝鮮人犠牲者は「133人から136人」としている。それは最近千葉で発見された「集団渡航鮮人（ママ）有付記録」と、筑豊の慶尚院所蔵の大日本産業報国会編『殉難者名簿』から絞り込んだもので、「三人が不明だが、その人も朝鮮人の可能性が強い」（同会、澄田亀三郎氏）として、3人を加えたのが136人だ。

こうした地道な名簿による犠牲者名の補強は会の今後の活動にとって重要。82年4月に地元の有志、および遺族が炭鉱跡地に「殉難者の碑」を建立したが、その文言には「永遠に眠れ、安らかに眠れ、炭鉱の男たちよ」と刻まれているだけで、具体的な犠牲者の名前が刻まれていない—などの問題点があり、会では、日本人としての謝罪を含めた文言と犠



牲者全員の氏名を刻んだ碑の建立」という活動目標をたてている。

③の会の発足と活動だが、85年6月13日に宇部市で韓国籍の青年3人が指紋押捺を拒否、これに支援する会が6月16日に誕生、87年11月15日に支援する会主催の「宇部の炭鉱跡をたずねる集い」を開き、91年2月3日に「長生炭鉱の“水非常”を歴史に思い起こす集い」を開催、同年3月18日に「刻む会」発足。

今後の活動として、先にあげた日本人としての謝罪を含めた文言と犠牲者全員の氏名を刻んだ碑の建立のほか、▷ピーヤ（排気塔）の保存▷証言集を含む資料の収集—などをあげている。

資料面について金慶海氏が「連行者などの数は会社の原資料が一番信用できる。寺の過去帳に記載された犠牲者名については、記載時に誤るケースなどあり、慎重に検討すべきだ」とアドバイスした。

「長崎の炭鉱の歴史と強制連行問題」

次いで、「長崎の炭鉱の歴史と強制連行問題」と題して長崎県の前川雅夫氏が発表した。

まず、「強制連行問題への視点」と題して、長年の炭鉱史研究をふまえながら、日本近代

の人口問題、韓国労働力の推移、強制連行問題と機械化、契約期間について—など多岐にわたりそれも独自の視点から切り込み興味深い考察をした。なかでも強制連行問題と機械化では、「日中戦争の長期化により労働力不足、経費上昇が問題となり、1939年頃、それを強制連行によってではなく、機械化で解決する事は考えなかったか。結果として出来なかったが、その理由として

①兵器生産の増加による鉱山機械生産の減少。

②輸入の途絶による。

③解決策としての機械化は、物資不足の時期あり、当初から考えられていなかった。

④統制経済、補助金づけ、「適正利潤」(5%)の規制などで会社側に企業努力の意欲なし。

などをあげた。

戦時経済と強制連行問題の必然性をあげ、そこに日本の植民地支配、民族差別の物質的基盤を控えたわけだが、さらに「契約期間について」では、2年契約と当初したのは、日中戦争が2年で終わると見ていたのではないか、という仮説をだした。「中国がいつまでも降伏しない。予定がくるった。2年で帰せば、労働力が不足する。そこで次にとられたのが徴用ではなかったか」とした。これに対して参加者の朴慶植氏は「2年契約と限定しないと、朝鮮人が働きにこなかった」と前川説を否定した。

さらに発表では「賠償問題をめぐる日本とドイツ」と題して、「日本の戦争責任を問う声は戦前の支配勢力が残ったため、厚い壁となり押しつぶされた」「ドイツは本土決戦をしたため、ヒトラーなど指導者が公式的に支配機構からいなくなり、戦争責任問題は表面的には早く解決された」と指摘した。

「泉南における朝鮮人強制連行と強制労働」

次に「泉南における朝鮮人強制連行と強制労働—多奈川・川崎重工と佐野飛行場の場合—」と題して大阪府朝鮮人強制連行真相調査団の園部俊治氏が発表した。

まず「多奈川で何があったか」と題して発表、戦前から戦後の歴史を概観した。38年5月、川崎重工が多奈川をドック群、艦船建造工場候補地に選定、海軍は同年11月、大型ドック構築を決定、瓦工場 190戸の強制移転など行い工事を開始、42年6月には第一艦を起工、45年8月までに潜水艦12基、海防艦33基など竣工さし、一般従業員2100人、徴用工、動員学徒、挺身隊など4700人、計6800人が従事した。また当時は呉海軍建築部の大型ドックの工事も行われると同時に秘密ドックもあった—といった点についても報告した。

朝鮮人、米軍捕虜、囚人に対する強制労働は工事とともに行われ、地元警察の資料から「朝鮮人は4、5000人は働かされていたのではないか」と指摘(大阪府警察部の各年次版『警察統計書』から)、また捕虜については44年当時、アメリカ人300人、オランダ人60人が収容されていた。

朝鮮人犠牲者については正教寺の過去帳記載から判明、「半島人」(ママ)として16人が記録されていることがわかった。

会では精力的に聞き取りを行ってきたが、多奈川には三カ所の朝鮮人宿舎があったと報告、比較的管理がゆるやかな宿舎が二カ所、そして囚人宿舎と同じ場所にあったのが戦争末期に強制連行されてきた者の宿舎であり、厳しい管理が行われていた。戦争末期の被強制連行者の管理は厳しく、ほかの「内地」朝鮮人の労務動員、徴用とは峻別されていた実態が各地で発掘されているが、多奈川でもそうした歴史を刻んだ。

またトンネルが存在するが、これについては「地下工場の予定だったという建設会社の人の証言がある」として、今後さらに調査す

ることにしている。

聞き取りの一つとして会では1923年に両親に連れられ渡日、多奈川の川崎重工で働いた金在讃さんの証言を紹介した。「最初、ここに（朝鮮人を）強制収容して、山の上を削り、海岸べりを埋め立てたのは、全て朝鮮人でした」「ハッパをかける危険な仕事は全て朝鮮人がしたのは間違いない。だから腕が飛んでいるの、足がどうの、あるいは命を落とした、という事故の人も（地区の）正教寺に入っているわけです」「死体を大八車に積んで火葬場に運ぶ、そのような光景は何度も見ました。朝鮮人の場合も、アメリカの捕虜の場合もしかり」－など。

さらに戦後では1952年3月に多奈川事件が発生した。事件は警察の弾圧で朝鮮人1人がひとちがいで射殺されたが、今後新聞の検索を徹底して事件の概要を正確に把握していきたいという。

なお南海電鉄多奈川線が朝鮮人労働者の労働によって敷設されたことが聞き取りからわかっていて、このことから会では南海電鉄に対して工事担当の業者の名前などを出してほしいと資料公開を要求したが、朝鮮人労働者の歴史を知る手掛かりとなる資料は一切皆無だった点も付け加えた。

「広島強制連行を調査する会」

最後に広島で90年12月発足した「広島強制連行を調査する会」から正木峯夫氏が報告した。県内の「同和」教育でがんばっている仲間などが参加して会を結集、現在130人が参加。今後、県内全域で調査していくが、公的には広島県が県内での被強制連行者は三菱重工広島造船所の157人しか確認されていない。

130人は各地域ごとに世話人を設けて、自治労との協力をえて各地で学習会を行い、市町村がもっている資料を発掘していく活動を

展開している。一方、こうした活動は「韓国・朝鮮人との交流・連帯を深めることだ」と位置づけている。

文書発掘では91年7月18日に県に知事引き継ぎ文書の資料提供をはかるべく交渉した。ここで「調査希望関係書類リスト」として最終的に50件をまとめた。県は「戦前は作っていない」と回答、公開を要求できたのは戦後分だけだ。

具体的には「未渡金関係綴り（昭和23-24年）」があるが、強制連行者の名簿や未払い賃金リストの関係ではないかと考えて、現在、公開の交渉を進めている。

運動を広げるため学習資料（冊子）を作り、今後の活動について、①知事引き継ぎ文書の資料公開、②市町村資料の公開、③証言者からの聞き取り、④連行企業について追求、⑤未払い賃金問題、⑥労働現場の確認、⑦マイクロフィルムの閲覧－などをあげた。今回の発表ではこの冊子にもとづいて各活動課題について説明した。

⑤の未払い賃金の問題では法務局に資料があり、「マスコミの人が来て、見せて欲しいといったら見せたという実態がある」という。

質疑では金慶海氏が、「私たち兵庫の調査では在日朝鮮人の数とか帰国者の数など警察史の記述と知事引き継ぎ文書の数とはピッタリと合った。各地域の警察史は重要なものだ」と指摘した。さらに「粘り強く知事引き継ぎ文書の公開を求めるしかない。しかしガンとしてみせないでしょう。われわれは、『なぜ見せられないのか、その理由をかけ』ということまでやって交渉の実を獲得。あの手、この手使って公開を求めてきたのだ」と兵庫のたたかいをあげた。正木氏は「広島警察史をみたが、記述されていない」とし、「知事引き継ぎ文書は永年保存であり、戦前分がないというのはおかしい」のではという視点からさらに追求していくと述べた。

地下工場・地下軍需施設建設工事と強制連行

(司会 洪祥進・伊地知紀子)



I. 参加者

全国いたる所に残るトンネル跡は、私達に歴史の事実を教えてくれる。綿密かつ意欲的な報告が5本あり、約40名の人々が熱心に耳を傾けていた。

II. 発表

①まず兵庫朝鮮関係研究会の鄭鴻永氏が、各地で様々な形態の地下施設が発見されている中、今後調査を進めていく上での何らかの枠組の必要性を主張した。そこでその前提として、全国の現状と調査状況を総括し、次のような分類を発表した。

地下施設を大きく3つに分類する。(1) 地下軍需工場。これは軍需品の生産を目的とするものであり、その中でも航空機関係とその他という2つにわけられる。(2) 地下軍用施設。これは軍が個々の目的に応じて使ったものであるが、これも軍(陸・海)直接使用目的のものと、「本土決戦」用のものとにわけ

ることができる。(3) 防空壕。人が避難するためのものとして位置づける。

次に、資料としての米国戦略爆撃調査団による報告書の評価であるが、朝鮮人関係の記述が少なく、自衛隊の翻訳は地名・人名が必ずしも正確ではないという点を指摘した。千葉県富津市の地下工場は米軍資料にないものであり、このことを裏付けるといえる。そこで他の手掛りとして会社史や地域史、特に学校史の活用をあげた。

会場からは、地下軍用施設の太平洋岸側への集中が指摘され、また、労働者としての朝鮮人の多様性、個々のつながりにも目をむけていくべきではないかという声もあがった。

②次に各地域での調査報告。1本目は、当日飛び込みの「強制連行の足跡をたどる in 富山」の藤田彰弘氏である。会では、1990年夏県内の朝鮮人強制連行の跡をたどる中で『不二越50年史』の本文中、大山町文珠寺に建設途中の地下工場についての記述があるのを知り、調査を進めてきた。

同社史によると1944年軍需省及び陸軍省より第一次軍需工場の指定を受け、各種兵器とその関連部品の製造に邁進し、工場の新設増設を急いだ。そして、熟練工が次々と兵員として徴集される穴埋めとして、朝鮮から1944年から45年にかけて女子挺身隊1090名、男子報国隊540名が入社ということである。同社史の中の「奉公の道」には、これに応じて従業員らは職務に精励し、生産増強に挺身することを誓った、と堂々と書いている

ことに身震いさえしたという。現在不二越は、県内機械工業のトップメーカーであり、それも戦争協力、その下での過酷な労働の犠牲があつての上でありながら交渉は進展していない。

トンネル調査の結果、横穴1つ縦穴6つ。フラスコ形、2段掘り構造のものなどで最長70m。地面にはレール跡とみられる枕木の一部やかすがいが発見された。工場の分は80%完成していたということで、現在は基礎用のコンクリートブロックが残っている。当時現場に約300人の朝鮮人労働者がいたが、上記の数に入るかは明らかでない。富山県警察史の中で挺身隊として総数2500名というのがわかっているのみである。ただ、上記の数をひいてもまだ余る挺身隊の人々の動向がまだわかっておらず、県内の未調査とあわせて今後の課題である。

③大阪の状況に関しては大阪府朝鮮人強制連行真相調査団の空野佳弘氏が報告した。大阪には炭鉱や鉱山はないが、軍事関係、企業関係―鉄鋼・造船などの基幹産業への徴用があり、対象50ヶ所である。現在集中調査中のものは、生玉公園の地下軍事施設、陸軍造兵廠の関係、多奈川の呉海軍基地の分所、本土決戦のための基地建設の4つである。今回は前者2つについての報告である。

大阪天王寺にある生玉公園の地下施設は現在封鎖中であり、通気筒からのみ中の様子が撮影できる。現場近くには、大阪の靖国神社といえる生玉神社がある。この地下施設は1942年後半から43年半ばに建設され、真珠湾攻撃前後に着工された。

工事は、露天で土を掘り、コンクリート建築しその上にグリ石を二層と土をかぶせたもので、1トン爆撃が落ちててもビクともしない堅固なものである。内部は2階構造だったらしいが、木の床は現在落ちてしまっていない。大きさは奥行50m幅20m、高さ7~8mであ

る。当時の朝鮮人労働者の証言では、現場監督からきいたところによると、建設目的は大阪陸軍第四師団司令部移転のためということだ。実際、1945年3月の大坂大空襲の後、陸軍通信隊が入ったと、当時の通信隊長が証言している。軍の資料はまだなく、内部調査も市と交渉中であるが、市側は公園管理の面を強調し、ここにも行政側の歴史的視点の欠如が伺える。

次の造兵廠あるいは砲兵工廠についてだが、これは、大坂城の敷地より大きく日本最大の兵器工場だったのではないかと思われる。戦後直後の資料によると「半島徴用工員1,319名」とあり、米軍資料の中にも朝鮮半島からの徴用、また疎開工事についての記述が見られる。この調査からは、廠内での強制労働、及び兵庫の三田、京都の園部など疎開工事における強制労働の実態が明らかになるであろう。疎開については、園部の当時の町長(92才)が、1947年の町長引き継ぎ書を保管しており、その中に手掛かりがありそうだということである。

④次に東京八王子の地下壕問題を考える会の齊藤勉氏の報告である。八王子浅川地下壕は1944年9月から敗戦まで掘られ、完成部分は中島飛行機武蔵製作所の地下工場として使われた。またこれは、地下壕、地下工場として全国有数の規模をもち、この掘削を運輸通信省から請け負ったのは、佐藤工業と大倉土木(現、大成建設)である。

佐藤工業では、富山県黒部川第三発電所の「高熱隧道」工事に約500名の朝鮮人労働者(家族含めて約1500名)があたった。1944年11月の段階で30戸あった。彼らは親方8名(日本人2名、朝鮮人6名)に率いられ、鑿岩機械を使った発破工法で、三ヶ所のうち二ヶ所を請け負った。また、熱海にあった通称「トンネル学校」の生徒が1コ半近く掘った。高校、中学にあたる者を学徒勤労動

員し、実習させていたらしい。佐藤工業は、他に庄川の小牧ダム、祖山ダムの工事も請け負っており、前者では1926年朝鮮人労働者主導の賃金争議がおきたと新聞にあり、後者では1933年に死者のための石碑が建てられ、中に5名の朝鮮人の名前があるということである。また80年史によるとフィリピンの工事もしていたらしい。

大倉土木は、1945年4月にこの工事に加わり、残る1ヶ所の掘削にあたった。ここには、2名の親方に率いられた約100名の単身の朝鮮人が、静岡県日本坂トンネル作業所から送り込まれた。

浅川の工事については、佐藤工業の方が技術が優れていたらしく、大倉土木は、計画通りでない所がある。また、死者は、近くの寺の過去帳によると成人男性6名と乳幼児、老人もいたらしい。労働への動員形態については、佐藤工業は朝鮮半島から奴隷的に連行されてきたのではなく、大倉土木は二次的な強制連行だったのではないかと見ている。そして、帰国後、韓国の土木業界で戦前の技術を生かして働いているのではないかという疑問を提示した。最後に、保存については土地の所有権の問題があり進展していない。また子どもの遊び場にならない保存方法を考えていくべきだということであった。

会場からは、協会の役割の中に、強制労働の訓練というのがあり、指導員が朝鮮人の場合があったが、これらの人々の聞き取りは非常に難しいという指摘があった。

⑤最後は「高槻“タチソ”保存の会」の金博明氏の報告である。旧日本軍は、1944年秋、高槻市成合北部の山間部に秘密地下トンネルを作ることを決定した。当初は、中部軍の地下倉庫として利用される予定であったが、途中で川崎航空機の疎开工場に変更され、さらに戦局が本土決戦を迎える状況になると、軍需基地としての役割を担うようになったと思

われる。証言によると、当時2〜3万の朝鮮人がいたらしい(当時高槻の人口3万)。その中でも、強制連行された朝鮮人の飯場は別にされ隔離状態にあった。彼らに対しては、もともと日本にいた人々と違って、給料は配給チケットであったらしい。戦後はほぼ全員帰ったということだ。また、松ヶ丘や安岡寺といった所に海軍のトンネルがあり、高槻が戦略の中で重要な位置を占めていたと考えられる。

会では、1990年7月成合中の町「阿弥陀寺」で、朝鮮人の遺骨5柱を発見。そこで高槻市に1944年秋から敗戦直後までの朝鮮人の埋葬許可証の公表を請求。約50名という数が明らかになったが、市側は、本人のプライバシーの問題もあるため、性別、当時の住所、年齢、死因に限って公開を承諾した。会では今後、全面公開を求めて市と交渉し、遺骨を本国へ帰すべく本籍地、遺族の調査を進めていくつもりである。

プライバシーの問題については、林えいだ氏の著書の中にある群馬県夜野町での中国人埋葬許可書公開の例をあげ、証拠があるのだから、資料をそろえ、マスコミを使って、強制連行の事実をプライバシーなどで言い訳するのは市の姿勢にかかわるというふうにおしていくべきだとの指摘が会場からあった。

Ⅲ. まとめ

以上、内容の濃い報告ばかりであった。ここで、全体を通して浮かび上がってきた課題を整理しておこう。①時間がないということ。つまり、当時を語れる人々が数少なくなりつつあるということである。②地下施設を多角的にみるということ。地域性、時代性、政策目的における共通性、図面の比較による構造上の類似性などである。③労務形態の分類を歴史的にとらえ、そこから、強制連行・強制労働の概念枠組を明確にしていく。④以上の課題へ向けての、各地のネットワークの形成と情報交換である。

軍人・軍属・慰安婦

(司会 金英達・金静美)



I. 参加人数

朝鮮人約20人(女性10数人、男性数人)
日本人約60人(女性約40人、男性約20人)

II. 内 容

方清子氏(在日韓国民主女性会)「朝鮮人従軍慰安婦」と在日同胞の課題、朴美津子氏(朝鮮人従軍慰安婦問題を考える会)「朝鮮人従軍慰安婦問題を考える」、田口裕史氏(日本の戦争責任を肩代わりさせられた韓国・朝鮮人BC級戦犯を支える会)「韓国・朝鮮人BC級戦犯と日本の戦争責任・戦後責任」の三つの報告、松代・朝鮮人慰安婦の家を残そう実行委員会からのアピールのあと、金太華氏と韓

哲曦氏から、かつての「日本軍兵士」としての体験を聞かせていただき、その後、臼杵敬子氏(日本の戦後責任をハッキリさせる会)と樋口雄一氏(在日朝鮮人運動史研究会関東部会)の個別発言のあと、討議にはいった。

III. まとめ

方清子氏の報告は、従軍慰安婦とされた同胞の苦しみや思いを自分のものとして日本政府の責任を追及している韓国の運動の現状を報告し、問題をかくし責任を回避してきた日本政府を糾弾した。そして、韓国において従軍慰安婦問題を歴史の闇におしこめてきた家父長制イデオロギーに在日同胞女性自身もたらわれてきたのであり、この問題を通して自分たちの意識の変革が促されていると、従軍

慰安婦問題に対決する在日同胞女性の姿勢を語った。

朴美津子氏は、朝鮮人従軍慰安婦の歴史的経緯とこの問題をめぐる最近の韓国と日本の動きを紹介したあと、従軍慰安婦問題の本質は、①戦争被害、②民族差別、③女性差別、の三つの側面からみていかなければならないと述べた。そして、社会の女性抑圧の構造を変えていくためと、朝鮮社会の最も貧しい層の女性たちが慰安婦とされていったという民衆の視点から、エリート層中心のこれまでの女性運動の変革を強調し、両氏の報告は、いずれも、今後ともに考え、運動を進めていくうえでの基礎的な問題を提起しようとするものであった。

田口裕史氏からは、日本の戦争責任を肩代わりさせられた「朝鮮人BC級戦犯」を支えようとする日本人の立場から、日本の戦争責任・戦後責任を問おうとする報告がなされた。

金太華氏は、日本軍（海軍）に志願した自分の在り方を問い返そうとしつつ、かつての体験を話され、韓哲曦氏は、志願に迫り込まれた学徒兵の体験を話された。

討議では、重要な問題が鮮明にされた。

韓哲曦氏から、「自分の故郷は済州市の近くの村だが、そこでは従軍慰安婦の話は聞いたことがない。従軍慰安婦の問題は大事なことだが、当人たちのためにもいたずらに掘り起こさないほうがいいのではないか」という趣旨の発言があった。それに対し、方清子氏、朴美津子氏から、「朝鮮女性を従軍慰安婦にしたことの第一の責任は日本が負うべきだが、従軍慰安婦にされたことを隠し、故郷に帰りたくても帰れなくしているのは、性差別を根幹においている家父長制・儒教道徳が朝鮮社会に生きているからであり、それを批判していかなくてはならない」という応答があった。

この討論の過程で明らかになったことは、従軍慰安婦とされた「一点のくもりもない」



朝鮮人女性が、故郷で家族と再会し、精神的な束縛を受けずに生きていけるようにするために、半世紀も過ぎた今でさえ私たちがしなければならないことが多いということである。それにはなによりもまず、日本の政府と民衆に事実を認めさせ、謝罪させ、賠償・補償させる事である。そして、そのような日本の朝鮮・中国・東南アジアに対する侵略の責任を追及する作業とは別個に、朝鮮社会が内包している家父長制・儒教道徳を克服していくことも、従軍慰安婦とされた女性の解放と私たちの解放にかかわる課題である、ということであった。

最後に、運動をすすめるときには、従軍慰安婦とされた人たちにさらに負担をかけることのないように細心の注意をはらうべきだ、という意見が出された。

司会のふてぎわから、討論の時間が十分にとれず、討議が開始されたあともなく分科会を終了せざるをえなかったが、今後の方向は示されたと思う。この分科会での出会いを、今後さらにさまざまな場で広げ、あるいは深めていきたいと思う。

教育実践 —地域の在日の歴史と学校・社会教育—

(司会 大黒澄枝・小林里香)



I. 参加人数

50余名

II. 発表

(1) 北条地下工場と平和教育

姫路朝鮮問題研究会・林田中学校

中浜久喜氏

1988年、兵庫朝鮮関係研究会からの「姫路近辺の地下工場と強制連行の問題についていっしょに調査してもらえないか」という話がきっかけで取りくみはじめた。手さぐりでスタートしたが、次のような成果があった。

(ア) 地下工場跡の測量や撮影に成功したこ

と

調査したトンネルがその後採石や宅地造成のためにつぶされ、この時作成した測量図や写真・映像が記録された唯一の資料となってしまった。

(イ) 強制連行に関する証言をえられたこと

「なぜ強制連行・強制労働の歴史がうずめられたのか」。地下工場の建設が軍事機密の中で行われ日本人としてこのことに関心をもつことすら許されなかった状態にあった。当時役所に勤めていた山本さんから証言をえ、事実を確認することができた。

(ウ) 結果的には破壊されてしまったが保存問題にとりくめたこと

採石による破壊が進む中、市長あてに、
・市当局の責任で調査し、全容の解明と記



録にあたること

・「地下工場」を保存すること

の内容の要望書を出したが、保存のための土地買収には膨大な経費を要し、困難との回答があった。

(エ) 教材化して平和教育の一つとして実践できたこと

教職員が自ら調査して教材化していくことの大切さを痛感した。ビデオの作成により生徒への説得力も増した。他の教職員からもビデオ借し出しの申し出がでてきている。

しかし、いくら教育の現場で授業をしても実物を見せていかなければ本当にわからないのではないか。戦争遺跡として残していくことが本当の平和教育・生きた教材になるのではないか。日本の教師としてこういう問題を掘りおこし、教材化し、保存問題に取りくんでいくことが必要だと痛感した。

(2) 成合・タチソ フィールドワーク

高槻市立第4中学校 村上民雄氏

・本校は同和教育推進校で反差別の取りくみを継続して行ってきた。1年時では被差別部落へのフィールドワークを実施した。

・2年生では各クラスを5班にわけ、5か所に別れてフィールドワーク・聞き取りを行った。

◎茨木の被差別部落

◎高槻市域の被差別部落

◎ゆうあいセンター — 障害者の福祉と解放のためのセンター

◎成合・タチソ — 在日韓国・朝鮮人の集住地域・高槻地下工場跡・むくげの会など

◎市役所 — 同和対策部などを中心に

・成合・タチソのフィールドワーク

成合へ行く班の班長と代議員からなる実行委員会が事前学習の打ち合わせや、トンネルへの下見を行い、本番を迎えた。事前には、「ある手紙の問いかけ」というビデオを見た後、(ア) なぜ日本にたくさんの韓国・朝鮮人がいるのか、(イ) 朝鮮人が本名をなめることは(当日案内をしてくださるハン・アシンさんのこと)、(ウ) タチソとは、の内容を学習した。

当日、「在日朝鮮人のために何かしようとかいうのではなく、自分たちの仲間関係をみなおしてほしい。いやがらせ、いじめがないか、こまっている友達もそばにいるやろ」と話されたハンさんの話に、差別意識や仲間関係で自分をとらえ返し、自分や周りをみつめる子がふえていった。

フィールドワーク後、各クラスで報告会が行われた。

・その後、タチソ保存の署名活動を行ったクラスがあったり、8月9日の平和登校日には実行委員会から全校生への報告も行われた。

・3年生になってからの長崎への修学旅行では、在日韓国・朝鮮人被爆者のパク・ミンギュさんからの聞きとりと、赤迫住吉地下軍事倉庫へのフィールドワークも行われた。

・反省点もあるが、生徒が主体的に動けたという点で班ごとのフィールドワークはよかったと思う。

(3) 「史実」になれなかった「真実」

— 協和隊45年目の証言 —

岡山県立玉野光南高校 青木康嘉氏

・岡山県立玉野光南高校は人口75000人の玉野市にあり、市長や市議員も「三井」出身の「三井造船」の町にある。それまでなかなか証言を得られなかったが、戦後45年「三井」の退職者が社研部の「高校生」に語ってくれた。

・地下軍事工場がどんなものであったかを復元していったが、それを「いつ」「だれが」「どのようにして」掘ったかについては、玉野市史にも岡山県史にも何もでていなかった。手がかりは玉野市史と三井造船50年史の「半島から1500名来客」という一行だけであった。三井造船の1944年の社内報に「松原豊成」氏の「我ら協和隊の使命」という手記を発見し、この人をさがすことにした。韓国の東亜日報に掲載されると、ロスアンゼルス在住の金龍玉氏から「私は元協和隊員だ」という26枚にもおよぶ手紙が届き、その後「松原豊成」氏は禹奎鎬氏といい、現在ソウルで健在だとの連絡をうけた。韓国へ行き、禹氏をさがしたが、「なぜ思い出したくもない過去の事を聞きにくるのか」ととどたどしい日本語でなじるように言う氏に「真実を高校生に語って下さい。真実を知った上で真の交流をしたい」とお願いし、貴重な証言を聞くことができた。

・3500人の協和隊員は特別年齢徴用で日本につれてこられ地下軍事工場の掘削にあたり、完成するとそこで4人乗りの人間魚雷「蛟龍（こうりゅう）」を製造した。

・3500人中死亡した協和隊員が16人いたとの証言をもとに、市の火葬許可証で確認した。うち8人の遺骨は本国へ持ち帰られ、残り8体は地元の寺にあずけられたという事実がわかった。16人のうち13人が現在の朝鮮民主主義人民共和国に本籍があり、残り3人が韓国に属するということも判明。韓国の3人の遺族を捜したところ2人がわかり、この夏その遺族に会いに韓国を訪問し一人の日本人の生き方としてこういう事実があったこと

を伝えていきたい。

・2年前に始めた活動が今想像もつかないような展開になっている。

質問・埋火葬許可証を公開させていくにはどうしたらよいか

・市役所→上司に→県庁に→法務省にたずねて、いろいろと条件はついたが学術上に使うのならということで見せてもらえた

(4) 高校生が切りひらいた真の国際連帯の道
— 亀島山地下工場から朝鮮人の遺骨返還まで —

亀島山地下工場を語りつぐ会・岡山県立倉敷中央高校
花房英利氏



・部落問題を研究することからスタートした社研部

昨年3月無縁仏となっている在日韓国人の遺骨を遺族に返すために、韓国を訪ねたが、それまでの6年間の活動についての報告である。

・倉敷市水島の「亀島山地下工場」は三菱重工水島航空機製作所の疎開工場であるが、調査活動を開始するまで地元の人にさえ知られておらず、まして朝鮮人の強制労働によって掘られたということは全く知られていなかった。1987・88年度の2年間に当時の朝鮮人労働者の様子にくわしい人、実際にトンネル掘りの作業に従事した人など合計7名の在日韓

国人・朝鮮人からの聞きとり調査を行った。

・県内で無くなり無縁仏となっている78体の朝鮮人の遺骨の管理、供養をしている大隅実山住職との出会いがあり、「遺骨を一刻も早く故国に返してあげたい」と熱っぽく語る86歳の師の言葉に、生徒の心は大きく揺さぶられた。

・亀島山での強制労働の証人捜しのため韓国のマスコミに手紙を送ったところ韓国日報が「日本の高校生からの手紙」として大きくとりあげた。40通をこえる手紙が届き「海外犠牲者同胞慰霊事業会」の人たちとの交流も始まった。78体の遺骨の引き取り手捜しはこの慰霊事業会を中心に進められたが、この社研部の活動への経済的な支援もあり、1990年3月遺族捜しの旅が実現した。出発直前に2体の遺骨の引き取り手が見つかり、無事返還することができた。

・訪韓にあたり、過去の日本の行為への責めも覚悟のうえでの出発であったが滞在中どこへ行っても大歓迎で、韓国の高校生との交流の機会も得た。日本人や日本の高校生を代表して行ったわけではないが「もし責められたら、ことわりをしてもいい」と言った生徒の気持ちを大切にしたい。日本で本気になる者がいて韓国に本気で遺族を捜す人がいればこれからも全国各地での遺骨返還は可能である。

・地下工場での強制労働の実態や埋もれている歴史を掘りおこすことが最終目的ではなく、地域の中で日本人と在日の人々がどうすればもっと仲良くくらしていけるかという地域づくりの課題の一つとしての活動であった。訪韓の際「いつまでも韓国人が過去にこだわることはまちがいだ。だけど事実は事実として受けとめた上で、これからの日本と韓国の関係をどう築いていくかが大事だ」と何人もの韓国人の人々に言われた。我が社研部のような活動が全国の高校でいくらでも見られるようになれば日本と韓国「在日」の人たち

との関係が切り開かれていくのではないだろうか。

質問①高校の報告はいずれも部活動の報告だが授業での取りくみはどうか

(花房) ・岡山県の民族教育は遅れている。部活動でしかできないというか私にとっては一番近道であった。現代社会の事業で使っている資料を小中学校でも教材として使用している。

・池田市に地下魚雷格納庫があり、朝鮮人がたくさん働いていたようである。掘られたあとの実態をまとめ、小学校5年の同和の授業で取り上げた。実際に6m30cmの魚雷を作ってみた。

(資料集)「奈良県桜井市立初瀬小学校の実践」

(花房) ・聞きとり調査をもとに「二つの国に生きて」という物語をつくり、紙芝居やビデオ作りに取りくんでいる。

質問②在日朝鮮人の高校生の反応はどうか

・他の学校より在日の子の割合は多いが本名で通っている子はいない。進路保障の取りくみはほとんどできていない。「特別」な気持ちはなく他の日本人の子どもが社研部の取りくみを見て感じているのと同じような受けとめ方をしている。

質問③社研部の活動を見て「実は私は朝鮮人なんだ」というような反応はでないか

・文化祭で「身近かな外国人」というテーマで、クラスの在日韓国人の子の親から聞きとりをした学級があった。「自分たちのクラスに一人の在日韓国人の子がいる」という実態をふまえての取りくみを行った。社研部の活動の影響も確かにあると思う。

(5) 強制連行の足跡を若者とたどる旅
強制連行の足跡を若者とたどる旅

加藤慶二氏

・社会教育の立場での報告で、北九州、福岡、



下関などでそれぞれ市民運動を行っていた、教員、自営者、主婦、サラリーマン、医師、職人、公務員など10名のスタッフの3年前からの活動である。

きっかけは、在日一世がだんだんと少なくなり、強制連行の跡がどんどんこわされていく中で、若い人達を目や耳や口や肌で実際に感じさせたいという思いからである。

・子ども達は旅の中で歴史の重さにふれると、叫ぶ、泣く、うめく、夜はうなされる。その中でしだいに希望を語りだしていく感性のすばらしさ。「命をかけた言葉」をしっかりと受け止め返していった。大人が今まで歴史の事実に出合せていなかったことの責任の重さをつくづくと感じた。

・中ソ離散家族会の人たちとの交流では「謝罪の言葉より明日の生活を考えて欲しい。日本人はつれていけばつれて帰るのが道理じゃないか」と言われた。

・「知らないということは本当に罪だった」と素直に言える子供たちを見て、つくづく「頭でわかってしまわないこと」が大事だと思う。

子供たちは韓国で多くの糾弾や叱責をうける中でしっかりと連帯する言葉を聞きとってくる感性をもっている。

・「若いあなた達が糾弾や叱責をうけて苦しんでいない訳はないけれど、歴史は一つだ。あ

なた達の一世代、二世代前にこういう事があったということはしっかり覚えておきなさいよ」と語るおばあさん。「我々を焼きつくしたり、殺しつくしたのは上の者だ、しかしこの若者たちはその歴史をしっかり学ぼうとして今日の前にいる、みんな本当の事を話そう」というおじいさん。韓国の若者との交流では「日本人がまちがって教えられた歴史から解放されない限り、日本人にも自由はないんじゃないか、正しい歴史を獲得することから始まる」と語った青年。

・「正しい歴史の掘りおこし」を自分の生き方をかけてやっている大人のたたかいから学ぶことの大きさを若者たちはしっかり感じとっている。

意見

・活動の人数が限られているように思う、もっとたくさんの人に感動を与えて欲しい。

大阪に10校ある夜間中学では生徒が語り部となって各学校に出かけていっている、もっと身近な所に教材があるのではないか。

東大阪の夜間中学では松原三中とずっと交流をしている。学校全体の取りくみで、全体の意識を高める必要があるのではないか。

・社会教育と学校教育のタイアップが必要。社会教育の立場から公教育はこうあって欲しいというのを出していってほしい。

・教育現場以外の所で市民的感覚として在日の人たちを排除していこうという動きがあることを知った上で、就職活動などにも参加していって欲しい。

・歴史教育を徹底してやって欲しい。

(6) 児童文学にとりあげられた「強制連行」 オリニの会 仲村修氏

・「オリニの会」は神戸で4年前に発足し「朝鮮を扱った児童文学作品を読む会」である。現在50編位の作品を読んで評価したり、紹介したりしている。

・強制連行を扱ったもの9作と、中国の強制連行を扱ったものを2作載せている（資料集P. 48、49参考）

それぞれの特徴の説明

・日本に現在1400名位の児童文学の作者がいる。テーマの重さが原因でなかなか出版できない作品もある。

・書いても売れない。

・推理小説仕立ての作品もあるが、糖衣錠のように砂糖ばかりが残っているのでは本当に伝えたい中味が伝わらないことになる。

・戦争の話や侵略の話はなかなか子どもたちに入っていない。これからは随分技法的な工夫が必要だ。

・作品に登場する中国人、朝鮮人のほとんどが腹をすかし、目はうつろで個性的な人柄が少しもない。仲間を励ました人々の様子も描かれていない。

・日本、中国、韓国、北朝鮮ですぐれた作品を共有する必要があるのじゃないか（翻訳）。この11編の中では、大坪かず子さんの「スウボンの笛」を韓国で出版予定である。

・日本と韓国、アジアの国々で、侵略と被侵略の間の共通の財産として、いい作品を残していく必要がある。

質問 「オリニ」とはどういう意味か。

・朝鮮語で「子ども」という意味。

(7)「アンニョンハセヨ」による児童生徒・市民にむけての取り組み

西宮市立鳴尾南中学校 原田孝一氏

・数年前の家庭訪問の時、在日韓国・朝鮮人の親から「先生、先生ら知ってるか？」と言われた。「私ら小学校入学の時に2つのことを考えるんや。日本の学校にやろうか、民族学校にやろうか・・・＜就学願＞っていうの出すの知ってる？就学案内もないよ」。「この子のためと思って日本の学校にやる。入れて下さいと頭をさげて入学式にやってきましたら体育館に日の丸が掲げてある。涙が出るよ」と話さ

れたことを思い出す。「先生らって、ほんとに勉強してないね。選挙権がないってこともこちらが言って、はじめて知ったんよ」。

・西宮市には約5200人の在日韓国・朝鮮人が生活し、その子ども約600人が幼稚園、小学校、中学校に通っている。1982年10月1日に外国人登録法の指紋押捺制度の義務年齢が14歳から16歳に引き上げられた。ところが当時「指紋押捺のために欠席します」という連絡は一度も聞いたことがなく、きっと「おなか痛い」というような理由で休んで出かけていったのだろう。14歳の子が自分の誕生日前後にどんな思いでいたのかを考えることもなく教師生活を送っていた。

市教委が出す「帰国子女教育のあゆみ」を読んで、その中に在日韓国・朝鮮人を意識した取りくみはみられないことや帰国子女を「日本」の型枠に無理にはめようとしての苦労話に疑問をいだき、何か「まちがったこと」「ひどいこと」をしているのではないかと思いはじめた。教研の「平和と民族」や「人権教育」などの分科会にレポートを出したりする何人かの仲間とそんな話をする中で「在日韓国・朝鮮人教育部」が設置された。

・年に2回ずつ「アンニョンハセヨ」という冊子を出していこうということになった。「これを手にするあなたに」の「あなた」は本当は子どもではなく、ほとんど何もしない1800人の教師に、である。幼稚園から中学校まで約45000人の子ども達に手渡している。教師向けには「在日韓国・朝鮮人の子どもたちを受け持つ教員のために」という指導の手引き書を出した。ただ行政の動きが速く、内容的に少し古くなってきているので改訂版を出す予定である。

・冊子を出すたびに「自主編成講座」を行い、こんな思いをこめて作っている。こんな思いを子ども達に伝えて欲しいということを話していつている。その中で「こんなことまでも教えていい」ということで自信を持って言っ

てくれる先生もでてきている。

・並行して保護者の運動もあり、行政が動き、就学案内が配布されたり「就学願」が「就学申請書」になったり、学籍等の書類が西暦と元号の並記になったり、各校に「人名仮名表記事典」が配布されたり、西暦記入のできる卒業証書が配られたりという、いい方向への変化がみえはじめた。

・一番喜んでくれたのは、日本人教師をほとんど信用しなかった在日韓国・朝鮮人のオモニ（お母さん）たちで、日本人教師が動きはじめているということを感じて下さっており、励みになっている。

・冊子を使っでの授業で朝鮮の歌を歌ったり、ハングルを覚えようとする子ども達の生き生きとした姿がみられたり、キムチ作りに取り組む学校がでてきたりしている。

・「点」であった活動が、少しずつではあるが「線」や「面」にひろがりつつあると感じている。

質問①組合で作られたものだが非組合員の先生も配っているか。

・いろいろな配り方がされている。小学校では「読んどきなさい」というのが多い。中学校では道徳や社会科の時間に活用している。非組合員の先生の事は、よくわからないが大丈夫だと思う。

質問②卒業証書の西暦記入はすべての生徒が希望すれば可能か

・外国籍の子どもの人数分程しか配布されていないが、日本人の子どもにも呼びかけ希望者には全員西暦記入したという学校もあった。中には外国籍の子どもに確認しないで元号のまま出した怠慢な教師もいた。

意見 元号のおしつけに反対。在日の人への配慮とかじゃなくて、日本人としての自分が反対である。そういう視点で考えると、在日韓国・朝鮮人教育だけではダメで日本人教育が必要だと思う。日本社会の問題は日本人が中心に解決していかなければならないのでは



ないか。

（原田）全くその通りで、その視点は失っていないつもりである。

感想 朝鮮学校の教師 日本の学校の先生とは少しちがう視点で実践教育をしている。二世・三世となるにつれて民族的意識が薄れていくけれど過去を決して忘れてはいけないということと、どこまでいっても、朝鮮人という「誇り」と「自覚」を持たなければいけないということである。尼崎朝鮮初中級学校の時に、立花中学校と宝塚第一中学校の生徒といっしょに福知山線の廃線跡を歩いた。その時の感想に「私は部落の出身で差別をうけてきたけれど、朝鮮人より上等な人間やと安心していた。差別をうけてきた者同志がそんなことではあかんと思う」「トンネルの雫がしょっぱいのはきっと犠牲になった朝鮮人の涙やなあ。自分ら今まで何しとっやんやろ」というようなものがあつた。それを聞いた朝鮮の子どもたちが「びっくりした、先生。日本の人にもほんとにいい人たくさんいてるんやなあ」と話していた。今日は日本の人達の実践に教えられるものがたくさんあつた。これから明るい、展望のある朝・日関係を作っていかなければならないと思った。

Ⅲ. まとめ

・報告レポート数が多く十分に討議を深める時間が取れなかったが、各分野でのすばらしい実践を聞いたのが良かった。

・まず学校教育の報告では、姫路朝鮮問題研究会のメンバーが中心になって、北条地下工場跡の調査に取り組み、証言を聞き、その保存問題に取りくんだこと。また教師の立場でその取り組みを教材化し授業に生かしていった活動は生徒にとって身近な地域での学習の場としての成果を上げている。

・また高槻の「タチソ」へのフィールドワークは、反差別運動の取り組みをすすめている地域へ出かけていき、運動をしている人たちの思いを知り、少しでも身近な問題として取らえ直してくればとのねらいで、1年から行われてきた。学年としての継続的な活動の一環である事を評価したい。また生徒の実行委員会を作り、班を中心に実施されたことも生徒の自主的活動をすすめる上での参考となった。

・次に高校の社研部の報告が2つ続く。玉野光南高校の報告は、三井造船の社内報に寄せられた手記を手がかりに、高校生が韓国の新聞社に手紙を出し、証言者を捜して韓国まで出かけ、市史や県史にも出てこなかった地下軍事工場の実態を明らかにしていったという内容である。

倉敷中央高校の報告は、亀島山地下工場の労働に従事したと思われる韓国人の遺骨を遺族に返すために高校生が韓国のマスコミに手紙を送り、その後の調査をもとに韓国を訪れ、2体の遺骨を返還したというものである。

いずれも部活動での取り組みであるが、教師が常に何に視点をおいて活動しようとするのか、そのねらいがはっきりしている。高校生が「過去の真実」に触れることで生じる韓国・朝鮮の人との摩擦も含めて直接肌で感じることでしか、活動のバネにはならないし、現在の自分をみつめ直し、新たな第一歩を踏み出すには到らないのである。そういう意味で高

校生のこれからの活動がより広い範囲でおこなわれていくことが期待できる。

・また社会教育の立場からそれぞれの地域で市民運動を行っていた人たちが、強制連行の足跡を若い人達に実際に肌で感じて欲しいという願いから韓国への旅行を企画し、歴史の掘りおこしだけにとどまらず、どのような意識でこれから在日韓国・朝鮮人と係わっていくのかを考える場を提供できたことは評価したい。

・もう一つ「強制連行」を扱った児童文学作品の報告では重いテーマながら出版にこぎつけた11編について、その特徴の説明があったが、全体を通してもっと登場する中国人や朝鮮人の民族性を描くことが必要との指摘もなされた。仲村氏自身が韓国で「スウボン」の翻訳出版予定とのこと。今後の活躍が期待される。

・西宮市の教組の報告では、現場の教師の手によって発行された「アンニョンハセヨ」という冊子は、児童生徒・市民は勿論、「何も知らない」教師のために作られたものだという。この活動をきっかけに教師と保護者が協力して行政に要求をしていく機会が増え多くの改善点もみられ、すでに内容が古くなっているとのこと、改訂版が待たれる所である。

・今分科会をふり返ってみると、私たち大人の活動の対象が幼児から高校生までと開きがあるものの、いかに私たちが真実に「こだわり」続けるのかということである。

調査し、資料を作り、ビデオを作り、証言を聞き、いかに「本物」に触れさせていくのかという大人の側のこだわりが、子ども達をはじめ、まわりの教師や保護者、行政を動かし変えていく原動力になるにはではないか。それぞれの立場で今は「点」の活動であっても必ずや「点」が「線」に、「線」が「面」へとひろがっていくものと確信している。

ビデオ（映像記録）

（司会 太田光一・船橋正樹）

I. 参加者

25名くらい

II. まとめ

当日持ち込まれたビデオテープ7本（下記）を上映した。時間的に制限があり、ゆっくり討論、批評までするところまでは行かなかったが、各地の取り組みをビデオで見るとあたりかなり関心を持ってみる事ができた。各地で、強制連行の掘りおこしが民間の力で進められ、それを記録としてビデオ等に残していることはかなり行なわれていると考えられるが、それを、だれも見られるような

形でコンパクトに編集しなおしている作業はまだ少ないように感じられた。討論の中で、映像として残す作業を安易にテレビ局とかに委ねるのではなく、この運動に取り組んでいるさまざまなグループが、真実の記録として、まとめ上げていく作業の大切さも出された。各地で掘り起こされているこれらの歴史をさらに多くの人々の目に触れやすい様にしていくためにも、この種の交流は、今後も続け、各地の動きが参考になるよう情報の集中化をはかる必要性も話し合われた。来年度さらに、多くのビデオ記録が、持ち込まれ交流される事を期待しています。



ビデオで記録を残すにあたり

- ・何を柱にまとめ上げるか（表現するか）
- ・制作上の交流。編集等に伴うビデオ機器の技術的な交流（今回も、持ち寄ったビデオテープが、編集過程において、音声のアフレコの方法の違いで、一台のビデオデッキでは再生できないということも起こりました）

- ・何分にまとめ上げるかという問題（今回は、10分位で依頼しましたが、内容、等によってさらに発表の工夫が必要です）

- ・証言者の高齢化が進んでいる今現在、早急に体験者の聞き取りなどを進め、記録に残す作業の必要性

等を、意識して今回の分科会を進めました。

Ⅲ. 発表内容

ビデオタイトル 制作 時間 問い合わせ

1.「武庫川と朝鮮人の歴史」西宮市立学文中学校 3年5組 '87 20分 西宮市高座町1-45 太田光一

2.「長生炭杭の水非常を歴史に刻む」中原憲明 10分 山口県萩市椿565-5 08382 (5) 9833

3.「北条地下工場と朝鮮人強制連行」姫路朝鮮問題研究会 '88 姫路市飾磨区恵美酒600 姫路市教育会館内 姫路朝鮮問題研究会 0792-35-2020

4.「真相調査団大阪からの報告」大阪府朝鮮人強制連行真相調査団 スタジオ游 7分 075-241-1577

5.「千葉の強制連行」松原明 '91 10分 東京都中野区中野5-24-16-201 ビデオプレス 03-3385-6901



6.「マンガン鉱山に生きる」マンガン鉱山を記録する会 京都府北桑田郡京北町字下弓削 丹波マンガン記念館付 07715-4-0307

7.「旧生駒トンネルと朝鮮人労働者」田中寛治 '90 18分 07437-4-5840

* 他、強制連行に関するビデオリスト

1.「ウトロに生きる」ビデオプレス 37分
「強制連行パートⅠ」・体験者の証言等・ビデオプレス 35分

「ここにもあった強制連行」・真相調査団中間報告・ビデオプレス 28分 03-3385-6901

2.「姫路で爆弾製造の工場跡発見」サンテレビ報道部 神戸市中央区港島中町 サンテレビ報道部

3.「パラム・ウララの朝鮮と日本の歴史」西宮市立学文中学校2年7組制作 '89 25分 西宮市高座町1-45 太田光一

4.「トンネルは語るⅠ」・岐阜県久々利の地下軍需工場・10分
「トンネルは語るⅡ」高槻市成合の地下軍需工場 田中寛治 07437-4-5840

地域史のみなおし

(司会 薬師寺小夜子、吉崎篤志)



I. 参加人数

15名

II. ねらい

1. トンネルなどの戦跡・遺跡の保存運動、碑建設運動が全国各地で取り組まれている。現状を報告してもらい、共通した課題を明らかにする中で、運動の方向性を見出していきたい。
2. 地域の真実の歴史を伝えるため、地域史の書き替えの取り組みが行われている。各地の情報を交換し、全国的に拡げていくきっかけとしたい。
3. 戦跡保存・地域史の書き替えを通して、国・

自治体の行うべき責任課題を明らかにする。

4. これらの運動を進めるため、共同の取り組みを模索する。

III. 発表

- (1) 新聞報道から見た全国強制労働一覧

梁泰昊氏

各地で調査が進められているが、日本全国の全体像、俯瞰ができないのでつくってみたい。

- ① 在日韓国・朝鮮人にかかわるもので、生活史などの参考資料があれば送っていただきたいということで、全国の県庁所在地の図書館に問い合わせた。問題の設定があいまいだ

ったので、回答が様々な形で来た。(強制連行前の歴史、関東周辺では大震災当時のこと、古代の日朝交流の歴史なども来た)

② きちんと書かれたものはない(図書館に問い合わせてもわからない)ことが判明した。新聞記事の収集をすると、1975年ぐらいから、5年ぐらいずつの刻みで調査活動が行われているようだ。

地元の方が地名を見れば、ある程度見当がつくと思うので、そこから掘り下げていくと、いろんなことがわかると思う。

③ 北海道、九州だけでなく、東京、大阪にも強制連行の事実があった。

④ 記録に残りやすいもの(鉱山、炭鉱など、企業がかかわっているもの)と、そうでないものがある(土方労働、沖仲士等)。

⑤ 一つの目的から派生する多種の労働
滋賀県 琵琶湖干拓(朝鮮人の他戦時中の捕虜等も働かされていた)

熊本県 健軍飛行場の整備工場、物資を運ぶための鉄道、川の改修等、様々な種類の労働が必要とされる。

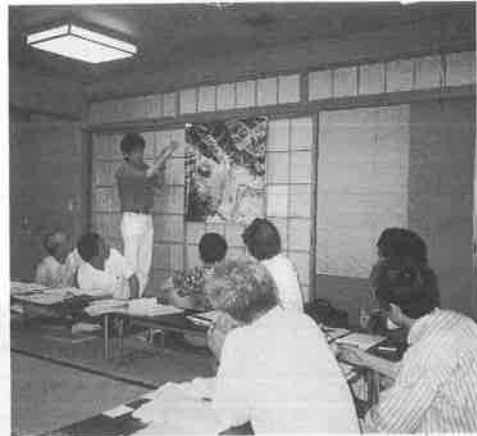
⑥ 資料の保存について、図書館に保存させる必要がある。

パンフ、新聞記事、資料類など、公の目にふれる機会をつくる。そのことから、地域の教材に入れることもできるのではないか。

刊行された本も含め、コピーをつくり、資料集という形でストックさせるやり方をしたらどうか、朝鮮人問題からのリサーチができると思う。

(2) 松代朝鮮人慰安婦の家保存運動について 菊地嘉晃氏

1944年11月から8月にかけて、本土決戦に備えて陸海軍を統帥する大本営、政府、皇居を移す計画ができ、延長13キロ、三つの山にかけてトンネル工事が行われた。強制連行も含め、約7千人の朝鮮人労働者が働いていた



といわれている。

(家屋の使用に至る概略等、詳しい内容は資料参照。また、1947年当時の米軍の航空写真(国土地理院所有)による松代周辺のトンネル群、建物等の説明があった)

① 松代大本営の地下壕の一部が公開されているが、公開の方法への批判が出ている。

安全対策を重視して岩盤を削った。以前は照明もなく、当時の雰囲気は体感できたが、安全対策がされたため苦勞なく入れるようになり、「日本は戦争末期に、よくつくったな」という程度の感想しか出ない。「獨立万歳」など、有名な落書きの場所は今回の公開の場所に入っていないから残っていると思うが、安全という理由で、小さなものは消されたのではないか。

案内板には朝鮮人強制労働に関する一言もない。去年、『考える会』や名古屋の人たちと交流集会をし、長野市に朝鮮人強制労働、戦争の事実など、保存公開の理念を伝えるよう申し入れた。11月頃、一部案内板を書き換え、「朝鮮人労働者も」というような形で、1～2行書き加えられた。

地元の有力者の意向が入っている対策委員会では、「若者が朝鮮人に頭があがらないのは困るから、そういうことは書かない」との発言があったという。

② 建物自体が大正時代のものなので、慰安婦が置かれたであろう部分を基本的に復元し、残りは原型を尊重しながらつくり直したい。

③ 松代町内に移転先をみつけないとと考えているが、まだみつかっていない。

移転後は、松代大本営の資料館として利用したい。

④ 地元の対応としては、『松代大本営の保存を進める会』が市に地下壕の保存の要求をしたとき、「松代は広島や長崎のようにアカの連中の思うようにはさせない」との発言など、朝鮮人の強制連行を隠した形で公開が進んでいる。地元の若い人たちの力を借りながら、公開を進めていきたい。

(3) 山形県の朝鮮人強制労働について

佐久間昇氏

先ほども全体会で述べたが、山田先生たちに同行させてもらって、勉強させていただいたのが、いまから15～16年前になる。『山形市の近代史研究』に載せていただいたのが、8年前だ。

私があえて地域史の見直しという分科会を希望したのは、あの当時、大蔵村という小さな村の調査をまかせられて行った。そのうちに、たまたま永松鉦山に約1千人近い労働者がいたことがわかった。先ほど、地域の人間でなくて、よそ者がしなければならない矛盾のお話があったんですが、1975年という、まだ朝鮮の中での対立みたいなものがあり、そのうえ強制連行の調査によそ者が来たということで、誰もそれを受けてたって何かしてくれるようなことはなかった。私は、よそ者だという自由さもあったが、こういうことを明らかにしなければならないと、いまもって思っていて進めているつもりです。3千名ぐらい、そこに住んでいたという跡があります。いまでは人一人しか住んでいませんが。

当時、中学生で学徒動員されてきた人たちが「永松会」をつくり、毎年来ているが、関係者がどんどん亡くなっている。さらに大変なことだと思っているのは、山形県に壮丁錬成所、朝鮮人を日本人化する教育機関としての錬成所があったが、それについて、もはや地元で語る人はいない。唯一の生存者、被害者の生存者として朝鮮人の方が山形市の山大医学部あたりで、でっかい肉屋を経営している。去年、たまたま放送で朝鮮人の強制連行の特集という形でやるので、私が水先案内みたいなことで出た。そのとき、一緒に出て下さいと言ったら、断るんですね。困ってしまっただんですが、顔を見せない、声も変えるということで、後向きになって出てくれた。その理由は、私もようやく人並みに生活できるようになった、それは日本人のお客さんが私を信頼してくれるからだ、いまもって私が日本人を憎んでいるのかと思われたくない、ということだった。私は、それを言われたとき、言葉がないような感じがした。

(4) 三重県木本で虐殺された朝鮮人労働者(李基允・裴相度)の追悼碑を建立する会

斉藤日出治氏

資料に書かれていない事件の概要、活動の成果を中心に報告したい。

① 1926年1月3日、木本(現、熊野市)で起きた事件。三重県県道の改修工事の一環として木本トンネルをつくるため、京都の土建業者が入り、日本人労働者も含めて数十人の朝鮮人労働者が飯場をつくって暮らしていた。

② 1月2日、明治座(映画館)の終演間際に、朝鮮人労働者が中にいる知人に会うために無理に入ろうとしたところとめられ、いざこざが起こり、日本刀で切りつけられ重傷を負った。切りつけた日本人を、警察は事情聴取のみで釈放。翌日、不満を持った朝鮮人が神社に集まる。

③ 町長が消防組と在郷軍人会に出動を要請。朝鮮人労働者飯場を襲撃し、労働者は山へ逃げ、応戦してダイナミトを投げたりして抵抗する。その際、二人の朝鮮人がなぶり殺しにあう。

裴相度氏 ダイナミトの責任者として紛争をとめるため町に行き、殺される。

李基允氏 町民に立ち向かって殺される。

④ 朝鮮人全員が逮捕され、強制退去される。

裴相度氏の妻は韓国に戻るが、翌年死亡。長女も数年後に亡くなる。

⑤ 裁判の結果、日本人は懲役1～2年の軽い刑で終わる。

⑥ 公式に残っている文献等

☆極楽寺の二人の無縁仏

京都の土建会社の親方がトンネルの石を使用してつくった。「鮮人」とし、アキヤマ・ハルヤマという日本名が彫られている。四文字戒名で、水子等につけられる一番低い位の戒名といわれる。

☆熊野市史(1983年発行)(資料参照)

☆事件体験者手記(資料参照)

成 果

① 遺族がみつかる(裴相度氏の次男が釜山に健在)

② 調査や意見交流の中で、排他的な差別感情はあるが、地元住民と朝鮮人労働者と交流があったことがわかる。(裴相度氏は、殺される直前まで地元日本人と将棋をさし、責任感から制止を振りきり現場に行き、殺される)

③ 朝鮮人、日本人の子ども同士の交流もあった。

地域史についての対市交渉の結果(概要は資料参照)

① 市史の訂正は、購入者に葉書を送る

谷川氏の手記は小学校同窓会文章のため、

市は関与できないとしていたが、教育長が校長宛に訂正要望を出し、校長が仲立ちとして谷川氏が訂正する形になった。しかし、「鮮人」を「朝鮮人」としただけで、事件の背景を根本から見直す訂正作業は進んでいない。

追悼碑建立について

① 政教分離を主張していたが、新市長誕生後、市民の協力を得ながら進める表明をした。市内の団体が受皿になり、主催して建立する。市はそれをバックアップする形にしたい。(市民の中から積極的な動きが出ない場合には、建てないこともあり得るという姿勢)

② 熊野市の中で、市民が主体的に取り組む動きは弱い。過疎の町で人間関係が濃い。学校で教師が事件に触れると、生徒の祖父祖母がそこにかかわっていることもあり、口にするだけでも地元には気まずい雰囲気がある。

③ 7月に意見交流会をしたが、碑建立には同意できるが、「虐殺」の表現を入れるのは住民感情から避けてほしい、という意見があった。

④ 地元の差別への内面的な規範を伴わない碑の建立は意味がない。(裴相度氏は誤って殺されたという認識があるが、逆にいうと、朝鮮人はならず者で殺されても仕方がないという認識ではないか)

⑤ 地元を一方的に非難するのではなく、人間的交流があったことを公にしていき、現在及び将来に向けての外国人との交流のあり方を考えていく方向としたい。

三重県史について

資料編の社会文化編で、木本事件が取上げられることになり、当時の子どもたちの日記、東亜日報等の新聞記事を資料として掲載することになった。

三重県全体の地域史見直しの運動として、旧青山トンネルの運動など、連動させて活動していきたい。

(5) 丹波マンガン鉱の保存と記念館建設について 李貞鎬氏

マンガンとはどんなものかを話したい。電池の材料として知られているが、採掘量の85%~90%ほどは、鉄を強くさせる副原料として使われている。日本のマンガン鉱床は小さく、人が立てないような高さの鉱脈を出してきた。私は小学校1年のときに、親についてマンガン鉱に行くようになった。1948年に新制中学を卒業して鉱山に入った。1976年にじん肺になった。

記念館建設の経緯

① 1975年頃に同胞のためにも、原型を残した形で残そうと思った。朝鮮人の強制労働をうたった記念館になっている。

② 京北町と文化事業、郷土の歴史ということで交渉したが、観光地としてはだめだということでも断られた。

③ 1988年完成。鉱山は閉鎖後は閉めなければならないが、通産省の許可を受けて開けている。

開館後2年半ほどになるが、町広報にも出さなかった。町の観光コースから外せという人もいる。ニュースでは朝鮮人強制連行と出るから、町の者は怒っている。

強制連行の定義に関して意見が違う。私は日本に来ざるを得なかった朝鮮人は強制連行と同じだと考えているが、1938年かの国家総動員法以降が強制連行だと思っている。直接、徴用で来た者はマンガン鉱山にはいない。大手鉱山から逃げてきた者がいた。松下関係のかけはし鉱山に連れて来られた例はある。子どもの頃、各地の飯場を回ったが、日本人は兵隊にとられていない。鉱山にいるのは朝鮮人ばかりだった。



(6) 高槻からの報告 吉崎篤志氏

具体的な碑の建立、記念館の建設、戦跡の保存、調査を通して、そこにあった事実を地域史に反映していくことが必要ではないかということで分科会が設定されたが、簡単に高槻からの報告をしておきたい。

① 資料集の68ページにあるが、強制連行の実態を解明する点では、市民グループのほうが行政より調査の知識がある。市史編纂をしている歴史家の人たちの中にも、視点がしっかりしている人がいるという報告があったが、彼らの協力のもとに地域史の見直し運動をやっていく必要があると思う。

② 米軍の戦略爆撃調査団の資料がトンネル関係の基礎的な資料になっていると思うが、高槻に関しては間違いがある。米軍調査団への報告書が、間組から出ている。その中では、近くの谷に住んでいた朝鮮人3,500人を労働に使ったと述べているが、当時、そういう事実はない。宇津木氏の話では、米軍の調査は何班かに分かれているが、岐阜の班は綿密に調べているが、高槻ではあまり調べていない。岐阜、名古屋の報告書と高槻を比べると、高槻は手を抜いたとわかるような報告書になっている。

③ 国、自治体の資料については、磐手小学校(国民学校)の日誌が、市史編纂の資料の

中からみつきり、当時、何人の朝鮮人児童がいたかがわかっている。

④ 地方自治体の市町村史の書き替え

山形、広島、岸和田でも事実在即したものができつつあるということだが、こちらに有利な状況を各地に波及していくことが必要だと思う。すでに出ている場所については、今後の補完した部分で事実をつけ加えさせていくべきだと思う。

⑤ 小学校での副読本の書き替え

高槻では3年生で地域の歴史を学ぶが、タチソについて朝鮮人の強制労働でつくられたという記述はない。学校の教師も一緒になって、改正していく運動をしている。

⑥ タチソを校区に抱える学校では、自主教材をつくる運動がある。

この分科会を通して、各市町村、都道府県史の書き替えにこれからも取り組みたい。また、すでに書かれたところでは追加をさせる。小学校の副読本、自主教材での地域の歴史を伝える点を入れていきたい。これを全国的に進めていきたい。

埋火葬許可証の資料は読んでいただきたい。

IV. まとめ

1. 地域史の見直しについて

① 聞き取り調査をする過程で、生存する証言者がいなくなりつつある。また、西宮、岸和田のように、当時労働に従事していた朝鮮人・韓国人が現地にいない地域もある。その中で史実をどう探っていくのか。

また、生存者がいても、その地域で生きていきにくくなるという理由で、証言を拒まれる例もある。背後にある日本社会の保守性に、各グループともぶつかっている。

② 高槻、広島、山形等の市町村史に朝鮮人強制労働の記述がある。編纂者には、事実として「強制連行」の記述を認める人も多いこ

とがわかった。各地市町村史の調査とともに、編纂者と協力しながら、記述をさせていく取り組みが必要である。

③ ②とからめ、小中高等学校副読本・自主教材の中で、地域史を伝える努力が始められているが、全国的規模に拡大したい。

2. 碑建立・記念館建設について

① 碑文等の記述について、明確に「虐殺」と表現するか、記述の中で事実を明らかにしていくか、論議が分かれた。

② 日本人の側には、加害性を認める土壤がない（日本人自体も被害者であるという認識・過去のことには触れたくないという閉鎖性社会）。その中で、虐殺主体を明確化するのがむずかしい。

一方、朝鮮人・韓国人としては、経験を語ることで地域で生きにくくなり、証言がしにくい現実がある。また、犠牲者数が不明確な場合も多い。

③ 現状では、行政が保存する場合、地元住民感情もあり、加害の歴史は残さず、あいまいに平和を歌うものになりやすい（松代大本営跡等）。象徴的な言葉にこだわらず、史実を記録する形で書かれた碑文（記述）で、結果的に「虐殺」等の事実が伝えられる努力がされている（花岡共楽館跡、埼玉上里町、丹波マンガン記念館等）。

3. 地域史、碑建立、記念館等、全国的なネットワークがつかれないか

現在、調査活動が行われている部分は氷山の一角である。全国無数にある強制労働の現場を調査を始めるための情報、マニュアルが必要となってきた。

各地の強制連行・強制労働の事実、保存運動など調査結果をもとめ、検索できる目録をつくり、資料として各地の図書館に置かせる運動を展開したい（例・広島）。

戦争動員・強制連行・強制労働と戦後補償

(司会 仲原良二・三木こずえ)

I. 参加人数

45名

II. 発表

(1) 軍属への「援護法」の補償について

鄭順一氏

① 「戦傷病者・戦没者遺族等援護法」(以下援護法という) による障害年金受給資格確認と慰謝料請求訴訟がすでにはじまっており、その原告本人鄭商根氏より、発言があり、この裁判には自信がある。先日、訪韓し、私を支援する会が韓国にも出来、また旧日本軍関係で死亡した場合、1975年7月1日から2年の間に申告した者は30万ウオン支給されている証明を入手した。これで在日だけが補償されてない証拠となった。

② 鄭商根さんの戦後補償裁判を支える会より、まず裁判に至るまでの経緯として、韓国、済州島生まれで1942年7月、20才で海軍軍属に徴用され、翌43年12月、マーシャル群島で米軍の爆撃によって右腕切断、戦後、援護法が制定され、その支給を求めて厚生省、大阪府に嘆願書提出、いずれも却下、鄭さんと同程度の障害年金は第3項症で344万9千円(1991年4月より)である。

③ 援護法は1952年4月30日公布施行(4月1日に遡及適用)。同法は2つの条項で、すなわち、14条1項2「日本国籍を失ったとき受給権は消滅する」と、付則2「戸籍法の適用を



受けない者は当分の間、本法を適用しない」とでもって日本国籍以外の者を排除している。

④ 日韓条約の請求権協定第2条で日韓両国の請求権問題は完全かつ最終的に解決されたとあるが、同条2項(a) 在日韓国人の「財産・権利及び利益」には影響を及ぼさないとある。在日の請求権は残っていることになる。

⑤ 日韓条約で無償3億ドル、有償2億ドル計5億ドルを受けとった韓国側は、対日民間請求権申告法を制定(1971年)(死者1人当30万ウオン支給しているが、申告法2条1項「戦後日本に居住した者は除外する」とされている。つまり、日本政府からも韓国政府からも補償されないことになっている。

鄭さんは、91年1月31日援護法の受給権確認と慰謝料請求訴訟にふみ切り、現在まで2回公判を終えている。

(2) 朝鮮人強制連行問題の戦後処理

古庄正氏

① 強制連行された朝鮮人労働者の戦後処理に対し、在日本朝鮮人連盟（以下、朝連と略）を中心に、即時帰国、衣食住の提供、退職手当預貯金の返戻、死亡・逃亡者の退職手当、弔慰金の朝連への委託など、酷使、虐待への慰謝料を含めた要求を各企業につきつけた、いわゆる補償要求と未払金返還の闘いが展開された。

② 次の3つの闘いが注目される。

(i) 1945年10月頃、古河鋳業足尾鋳業所に対する補償要求である。企業は厚生省に、厚生省はGHQに相談し、進駐軍地方軍政部の仲介で朝連側要求の約2割額で妥結、支給。

(ii) 1946年1～2月、日本建設工業統制組合所属の14企業、鹿島組、大成建設、間組などに対する退職慰労金など1人当り1,300円支給、残り7社は係争中とのこと。

(iii) 1945年12月～翌46年9月、朝連岩手県本部を中心として釜石製鉄所等への要求に対し、岩手県内務部長の調停案が出される。補償は認めるが、死亡者等には受取人が判明するまで県で保管するという。これが、のちの供託制度につながることになる。

③ GHQの方針転換

釜石製鉄の補償問題は地元企業はOKするが、最後まで本社及び政府が拒否することになって、これらの要求闘争がつぶされていく。その背景にGHQの方針転換があった。朝鮮人は連合国人として取扱わず、朝連への取締強化である。

1946年6月21日「朝鮮人、台湾人及び中国人の給与等に関する件」厚生次官通牒を発し、給与は1945. 11. 28、退職金は45. 9. 2以降の請求に限ることとし、それ以前の要求は不当であり取締まりの対象とするとして弾圧してきた。

④ 供託制への転換

朝連の要求を拒否し死亡・逃亡者への未払金は司法事務所（現、地方法務局）へ供託する制度を発足させた。1946年8月26日民事局長通達（民事甲 516）によって「供託要領」が示され、9月10日までに一覧表作成報告のこととされている。未払金供託報告書は供託番号、年月日、本籍地、雇用・解雇の時期、事由、未払金の内訳を記載し、2部作成し地方長官（現、知事）に報告することが義務づけられている。しかも、報告書は関係者（債権者）の要求があれば閲覧を許可し、異議申立に応じ公正をはかることとしている。これが現在も残っており、1958年3月12日民事局長通達（民事甲 529）で「供託金は10年で時効であるが、そのまま保管し関係書類も保存しておくこと」とあるから法務省には保管してある筈。

⑤ 日韓条約と請求権問題

日韓条約は5億ドルで請求権も解決したと両国政府は言っているが、韓国側からの請求権の中に未払金項目があったが、日本側はその根拠となる資料、つまり、この未払金供託報告書が無いので応じられないとして、一括して経済協力5億ドルとからめながら「解決」とされている。従って、この隠しつづけてきたこの報告書が出れば、日韓請求権協定がインチキであることがわかってしまうのである。今後は、これを出させることによって請求権や補償問題を大きく前進させるカギであり、それがなければ大きな突破口は開けないだろう。

(3) 戦後補償と土地追い出し

横川栄次氏

① 京都府宇治市伊勢田町ウトロは在日韓国・朝鮮人の住む街で、戦時中、飛行場建設のため集められた朝鮮人労働者の飯場であった。戦後は職を失い何の保障もなく放置され、ウトロの人たちは飯場跡にバラックを建てて生活してきた。3年前からやっと水道が

ついた。戦前の国策会社「日本国際航空工業」から「日国工業」へ、そして1962年8月「日産車体」がウトロの土地（登記簿上の）所有者となり1987年8月住民を無視して一方的に「西日本殖産」という不動産会社に土地を売却した。

それ以降立退きをせまられ、「土地明渡し」訴訟をかけられ、89年3月より、のべ180回にわたる裁判闘争を行っている。

② 問題点

(i) ウトロの住民の形成に関わりをもつ日産車体が、ウトロ住民を「不法占拠者」と位置づけ、土地を第三者の「西日本殖産」に売却したことにあること。

(ii) ウトロ問題は単なる土地の権利問題ではなく、戦後補償の問題——在日韓国・朝鮮人に対する戦後処遇のあり方を問うものであること。

戦後補償とは一般的には、具体的な損害に対して現状回復の形をとっているが、ウトロの場合は、戦時中は国策会社のため強制労働させられ、戦後は何の保障もなく放り出されやっと自力で築いてきた朝鮮人の生活そのものを消し去ってしまうような内容になっている。この裁判や、運動の中でも、どういう切り口をもって戦後補償の要求を具体化できるのかという問題に直面している。皆さんの智恵と力をかりたい。

Ⅲ. まとめ

① 時間不足もあったが、全体討論はほとんどなかった。各報告の個別課題は充分理解できても、これらをひっくるめて、「戦後補償」についての議論になると、まだまだ話が進まない状況である。

② 戦後補償の基本理念は、戦前、戦中の日本の侵略、植民地支配に対する歴史的責任を認識し、その自覚の上に立って、日本国民と同等またはそれ以上の人権尊重の具体的処遇

を行うことである。

③ まず、補償の意味を明らかにするため賠償と請求権と補償ということをはっきりさせることが必要である。（高木建一氏も「戦後補償の論理」フォーラム実行委・凱旋社91.6の中でのべている）

戦勝国に対する戦時賠償は2国間協定でその時の状況に応じて決めるもので、必ずしも民意を反映したり、個人の損害を補償したものとはなっていない。

朝鮮と日本の関係は戦勝国との関係ではないようにみえるが、植民地支配による収奪は賠償と同じ次元で考えられるべきであろう。

問題は個人の請求権は国家間協定によって束縛されない権利であるとする論理を法的に構築する必要がある。実際すでに、日韓条約で解決済といっても、在日の問題は解決されていないばかりか、韓国からも日本政府への補償要求が次々と出されてきている。また、中国、マレーシアなどからも補償要求が出されている。つまり現実には、問題がそのような進行しているのである。

④ 本分科会についていえば、鄭商根氏の援護法の障害年金受給要求は、日本人同等のいわば国籍要件の撤廃要求であり、また、釜石製鉄など朝連のいう退職金、預貯金の返戻、死亡者への慰籍料など、同じく当然の要求である。これらの個々の請求権は国家の都合によって左右されない権利である。

さらに戦後、植民地支配に対する責任を明らかにし、きちんと戦後処理をしなかったこと（障害年金、未払金、ウトロの居住権）に対しては、今まで放置してきた損害として慰籍料的な意味をもつ補償は当然支払われるべきものであろう。

いずれにしろ、補償の意味をわかりやすく説明し、幅広い要求運動になるよう取り組みなくてはならない。

於 神戸学生青年センター

西宮での全体会、分科会の後、電車で、神戸学生青年センターへ移動。参加者、約180名。宿泊者、約160名。定員46名の学生センターのホール、会議室、スタジオにまで貸しボタンをかりて敷き、計160名が泊まったので、窮屈であった。

おでん、キムチ、おつまみ、トマト、キュウリ、それに缶ビール（550本）はすべて完売。

センター内のあちこちで交流の輪ができ交流会としては成功裡に終るが、写真等の記録はない。（飛田）



一、本局為便利市民起見，特在
 各區設立辦事處，以便市民
 隨時向本局領取各項資料，
 並向本局提出各項建議，
 本局將竭誠為市民服務，
 以期達到市政建設之目的。



フィールドワーク

前夜の雨もすっかり上がり、好天に恵まれた日曜日、第2日目の最大行事であるフィールドワークが行われました。現在は高級住宅街に変身している西宮市甲陽園の山あいに残る川西航空機の地下工場や海軍地下施設のトンネルを見学しました。

(トンネルについての説明は、『資料集』の77～81頁を参照してください。)

参加者の総数は、305人(ガイドや連絡・準備係の主催側の人数を除く)で、20～30人ずつグループを組んで、順次入れ替わりながらトンネル内に入りました。

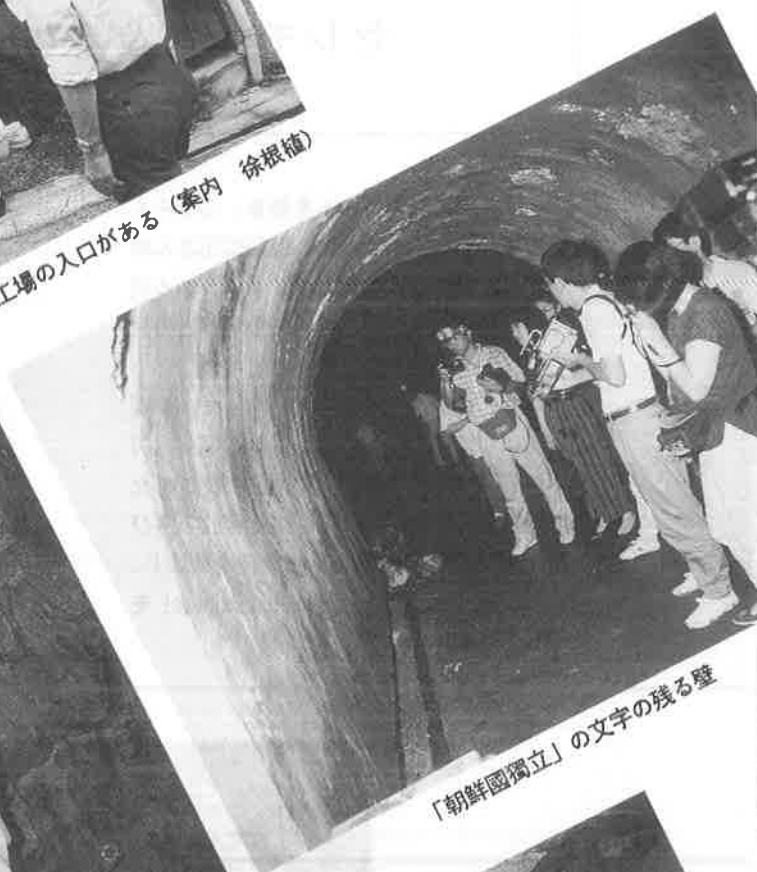




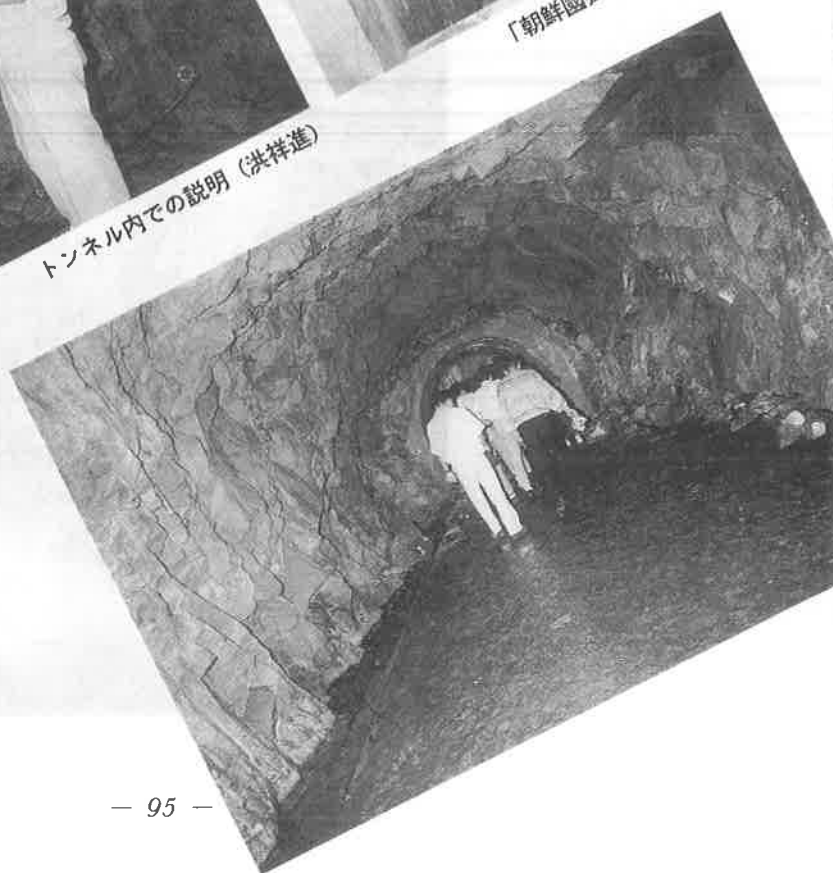
こんな住宅地の中に地下工場の入口がある (案内 徐根植)



トンネル内での説明 (洪祥蓮)



「朝鮮國獨立」の文字の残る壁



セレモニー&ミニコンサート

トンネル内に防水シートを敷き、ろうそくを立てて、会場をつくって、友松信也さんのあいさつと司会進行により、まずトンネル建設工事で犠牲になった朝鮮人労働者などの冥福を祈って、黙祷し、花を捧げました。

ついで、金龍吉さんのアコーディオン演奏を伴奏にして、金悦子さんが当時の朝鮮人労働者の苦難を思い起こし、壁面に残された「朝鮮國獨立」の文字に託された解放の喜びと新国家建設への希望をうたう詩を朗読し、朝鮮の民謡「アリラン」と歌曲「鳳仙歌」を熱唱しました。





「朝鮮國獨立」「緑の春」の文字が見える



司会の鄭鴻永 (左)、友松信也 (右)



映画『アリランのうた』上映と全体集会



甲陽園小学校の体育館で、朴寿南・監督、
『アリランのうた』製作委員会・製作の沖縄戦
の戦火の中へ強制連行された朝鮮人「軍夫」
「慰安婦」の歴史に光をあてた映画『アリラン
のうた—オキナワからの証言』が上映されま
した。真夏の冷房のない体育館で、人口受付
で渡された手製のうちわだけがたよりの映画
会でしたが、約350人が鑑賞しました。

映画のあと、体育館の窓を開放して、第2
回全国交流集会のしめくくりとして、全体集
会が簡潔に行われました。地元の実行委員会
のスタッフも参集して、実行委員会から飛田
雄一の総括の言葉、そして次回の開催地であ
る広島ของกลุ่มからのあいさつがありまし
た。

（採録）

高砂開港

イヌリ本館同賀会東面交回ニ候

越前能登郡高砂町

< 資料 >

新聞報道

第2回交流集会賛同団体リスト

都道府県別参加者数



27日から西宮で

強制連行を考
える全国集会

第二回朝鮮人中国人強制連行を考える全国交流集会（同実行委員会主催）が二十七日、二十八日の両日、兵庫県西宮市で開かれる。

同集会は全国各地で強制連行・強制労働の調査活動を続ける個人、民間研究グループの経験や知識、情報

の交換により相互の交流を深めて、実態の把握と真実の歴史を究明することが目的。昨年は名古屋で集会が開かれ、多くの成果をあげている。

スケジュールは二十七日午後一時から、西宮勤労会館で全体集会、歴史家の朴

慶植氏の記念講演。午後四時から①入門講座②炭坑、鉱山と強制連行・強制労働③土木工事現場と強制連行・強制労働④軍需工場と強制連行・強制労働⑤地下軍施設建設工事と強制連行・強制労働⑥軍人、軍属、従軍慰安婦の強制労働の朝

鮮人、台湾人戦犯問題⑧教育実践⑨ビデオによる記録活動⑩遺跡保存運動、戦後補償——の分科会を行う。

また二十八日は、「朝鮮国独立」の文字を記す同市甲陽園の地下工場跡を視察予定。参加費は二千元（宿泊代は朝食付き、別途三千元）。参加申し込み、問い合わせは☎078-851-2760（神戸学生青年センター、飛田氏）。

強制連行を考える集い

「朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える全国交流集会」（主催・同集会実行委）が二十七日、八日、兵庫県西宮市を会場に開かれる。

全国集会は昨年の名古屋に続いて二回目。北海道から九州まで全国各地で戦前・戦中の強制連行・強制労働の調査、研究に取り組んでいる約七十グループが参加。二十七日の分科会で

は、四百人を超える犠牲者を出したという秋田県の花岡鉱山事件をはじめ、兵庫県や三重県など各地での強制労働や朝鮮人従軍慰安婦問題などの活動調査報告、ビデオ記録の上映がある。

二十八日は、西宮市甲陽園に残る地下工場跡の見学や全体集会をする。参加費二千元。問い合わせは、神戸学生青年センター内の同交流集会実行委員会（078-851-2760）。

強制連行考える全国集会

第2回 規模広げ開催へ

日本の各地で強制連行・強制労働の掘り起こしや保存運動に取り組んでいる個人、グループによる「第二回朝鮮人・中国人強制連行、強制労働を考える全国交流集会」が、七月二十七、二十八日の両日、兵庫県西宮勤労会館で開催される。

初日は全体集会和分科会、各地での取り組みについて学びあう。朴憲植氏の記念講演に続いての分科会テーマは十個。主なものは「花岡蟠起事件」「土木建設工事と朝鮮人・中国人労働者」「炭鉱・鉱山・軍需工場と強制連行」「地下工事施設建設工事と強制連行」「軍人・軍属・慰安婦」など。昨年はグループだけの報告にとまっただけに、テーマ、内容とも大きく広がった。

参加者も昨年の三百人を上回る四百人が見込まれている。全国交流集会実行委員会では、第一回の名古屋集会所から一年を経て地域での掘り起こしがさらに進んだと見ており、「画期的な発表」もあるのではと期待している。

二日目は、西宮市甲陽園にある「朝鮮国独立」の文字が残っている地下工場跡を訪ねるフィールドワークと、朴

神南さん製作の「アリランのうた」特別上映会を予定している。

実行委員会連絡先 078・851・2460（飛田）

来月、西宮で

強制連行問題 全国交流集会

西宮で来月27・28日

日本がアジア諸国を侵略する過程で、朝鮮人・中国人を強制して日本に連行し労働させた問題を調査研究している全国のグループが、七月二十七、二十八日の両日、西宮市の西宮勤労会館などを会場に交流集会を開く。昨年八月名古屋で開いたのに続く第二回。

二十七日は、西宮勤労会館で全体集会和分科会を開き、歴史家朴憲植氏の講演の後、土木建設工事や炭鉱・軍需工場などの強制労働や、軍人・軍属・従軍慰安婦の実態など、この一年間の調査活動や研究を学びあう。二十八日は、西宮市甲陽園にある「朝鮮国独立」の文字が残されている地下工場跡の見学と映画「アリランのうた」観賞がある。

参加費は二千円と、必要な場合は宿泊費三千円（朝食付）。七月十日までに郵便振替神戸9140152「第二回強制連行交流集会」へ申し込む。連絡欄に住所・氏名・電話・所属を。問い合わせは、0657神戸市灘区山田町三の二の二、神戸学生青年センター内、全国交流集会実行委員会の飛田さん。電話078・八五一二七六〇。

「朝鮮国独立」の文字が残る
西宮市の地下工場跡



加費二千円（宿泊費別）。申し込みは10日（水）までに実行委の飛田雄一さん（学生青年センター内）へ。

★朝鮮人・中国人の強制連行
阪神西宮東口駅北東で13時
から全体集会。歴史家、朴憲植
氏の記念講演など16時から20
日は西宮市松原町2の勤労会館
時まで会費 会費17時半18
時）を挟んで分科会▽
21時から神戸市灘区山
田町3の神戸学生青年
センター（078・
851・2460）阪
神大甲駅北東で交流
会。28日は朝から西宮
市甲陽園の地下工場跡
見学や甲陽園小学校
で映画「アリラン」のう
た（朴寿南製作）観賞
の後12時13時、甲
陽園小で全体集会。参

「朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える全国交流集会」

政府批判相次ぐ 強制連行考える 全国交流集会

行・強制労働を考える全国交流集会」(主催・同集会実行委)が二十七日、兵庫県西宮市松原町の市立勤労会館で始まった。全国各地で調査、研究に取り組んでいる八十五団体の市民ら約四百人が参加し、強制労働や従軍慰安婦の実態、戦後補償問題などについて報告、意見を交換した。

全国集会は昨年八月の名古屋に続き二回目。元朝鮮大学教員の歴史家朴慶植(パク・キョンシク)さん(六八)が「調べるべきことがあまりに多く残されている。急がないと証言者がいなくなる」と強調、資料公開に積極的でない日本政府の姿勢を批判した。

補償を求めて今年一月提訴した東大阪市の在日韓国人一世、鄭商根(チョン・サンゴン)さん(六八)は法廷での意見陳述書を朗読し、「日本人同様、日本のために働いてきたのに日本

政府からも韓国政府からもはがき一枚来ない」と訴えた。

旧海軍特別志願兵で和歌山や石川に配属された金太華(キム・テファ)さん(六八)も穴掘りと土官の拷問対象だった日々の記憶を語り、「軍人でなく、まるで奴隷だったが、戦後は対日協力者のらく印を押されたと振り返った。

旧芳山国民学校(ソウル市)の教師で、担任してい

た小学六年の女子六人を女子挺身隊(ていしんたい)として日本の軍需工場に送り込んだ経験を持つ奈良県生駒市の池田正枝さん(六八)の報告では、今月上旬に訪韓、四十七年ぶりに六人のうち三人と電話で話した。

「女子挺身隊は従軍慰安婦と見られ、ずっと夫にも子にも事実を隠し続けていた。さぞつらかったでしょう」と話し、三人を来年、日本に招く、という。

二十八日は、西宮市にある田川西航空機地下工場跡を訪れ、「朝鮮国独立」の文字が残るトンネルを見学する。

朝鮮・中国人強制連行

「考える会」西宮で集会

「朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える全国交流集会」(同実行委員会

主催)が二十七日、西宮市松原町の市立勤労会館で開かれ、全国各地から約四百人が参加した。

集会は、全国の研究グループなど八十二団体が、昨

年の名古屋大会に続いて開

いた。午後一時からの全体会で各グループが強制労働の体験や研究の成果を報告。続いて歴史家・朴慶植さんが「強制連行」調査の課題と展望」と題して記

求め、飛び入りでスピーチをした。午後四時半からは、十グループに分かれて地下工場と強制連行、教育現場での実践リポートなどのテーマで分科会を開き、参加者は活発に意見を交わしていた。

二十八日は午前九時から、同市甲陽園の地下工場跡見学と、市立甲陽園小学校での映画会などを行

「強制連行」考える集会

西宮市で
きょう 最新の研究成果報告

全国各地で戦中の朝鮮人・中国人強制連行問題を調査している研究者やグループらが「第二回朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える全国交流集会」を二十七日午後一時から、西宮市松原町二の市立勤労会館で開く。昨年八月の日本政府の調査結果発表以後、民間レベルでの強制連行に関する名簿や資料の発見が相次いでおり、分科会で最新の研究成果が報告される。

植さんが「強制連行調査研究の意義と課題」と題して記念講演。続いて十の分科会に分かれ、駒沢大経済学部、古庄正教授の「連行朝鮮人労働者に対する未払い金問題」▽在日韓国民民主女性会、方清子さんの「朝鮮人従軍慰安婦の実態について」▽オリニの会、仲村修さんの「児童文学にとりあげられた『強制連行』」など約五十の報告がある。

午後九時からは神戸市灘区山田町三の神戸学生青年センターで懇親会を兼ねた

交流会を開く。翌二十八日は、西宮市甲陽園の地下工
場跡を訪ねるほか、甲陽園小学校で朴寿南さん製作の映画「アリランのうた」の上映会も開かれる。
参加費は二千元。問い合わせは、神戸学生青年センター（078・851・2760）へ。

毎日新聞 91.7.31

兵庫県西宮市甲陽園に残る地下工場の跡に入った。同市で先ごろ開かれた第二回朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える全国交流集会のフィールドワークに加えてもらったのだ。

この辺りは今は住宅地になっているが、太平洋戦末期に、朝鮮半島から強制連行された人々が、海軍の命令で巨大なトンネルを掘らされていたところ。一九八七年から民間グループが始めた調査で、七カ所合計三十一本もの工事跡が明らかになった。

地下工場の入り口は民家の裏にあって、なか



地下工場

ひんやり冷たく、暗い空洞が吸い込まれるように続く。地下水がはじめ染み出ている。飛行機工場と海軍施設に使われる計画だったようだが、敗戦で途中放棄された。何という膨大な徒労。無理やり、こんなあほくさい重労働にせき立てられた人々の思いはどんなだったろう。

加害者の責任をあいまいにしていると、またこういう狂気の徒労は繰り返されやすい。このトンネルは人間や組織の「魔」を示すものとし残してほしい。最近の草の根からの調査活動のひろがり

(杉)

サンデー

香取 泰行記者
第二次大戦中に行われた。

た朝鮮人・中国人強制連行の研究が全国から集う「第二回朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える全国交流会」が二十七日、西宮市で始まった。隣国に対する戦争責任を語る時、日本は常にドイツと比較され、「臭い物にフタだ」と批判を受けてきた。今年は太平洋戦争開戦から五十周年。あの戦争は何だったのか。強制連行研究をめぐって考えてみた。

集会には、新潟から熊本まで全国から八十二グループ、約四百人が参加。歴史家、朴慶植さんの記念講演「強制連行調査研究の意義と課題」の後、十の分科会、制連行の事実も報告され、演壇に立った同校の青

木康嘉教諭は「工場、木庫、倉庫、学校、社会教育」をテーマに、強制連行の事実も報告され、演壇に立った同校の青



高校生の強制連行研究の取り組みを発表する青木康嘉教諭 27日

「朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える全国交流会」を取材して

このほか、「長野県の松代大本営建設現場近くに残留朝鮮人「慰安婦」の家の移築保存について」（松代大本営を考える会）、「韓国・朝鮮人BC級戦犯と日

を訪問する手紙を出し、新たな日韓交流が生まれまじ」と全国での調査を呼びかけた。

戦争責任 常に「臭い物にフタ」

逃げ腰の日本政府へいらだち募る

記者走る

本の戦争責任・戦後責任」連行の国内調査結果を発表。朝鮮人強制連行数は、七十万人とも、百五十万人とも言われているが、政府発表の連行数は九万人足らず。西宮市の地下トンネル

昭和六十二年秋、防空壕として使われていた地下トンネルで「朝鮮国獨立」の緑の春の文字が見つかった。その後、旧海軍の軍需工場跡で、少なくとも五百人の強制連行された朝鮮人が働いていたこともわかってい

こうした航空機関係の地下施設は全国に九十、その他の軍需品の製造工場は百七十五あるという。しかしその大半は、実態調査がされぬまま。特殊潜航艇や人間魚雷の工場にいたって

は、当時機密に作戦が進められ、場所さえはっきりとは確認されていない。日本政府は昨年八月、韓腰の日本政府へのいらだち

国政府の要請で行った強制はつづるばかりだった。

ひとは

生徒が韓国の証言者に手紙を出し交流が...

岡山・玉野光南高
青木康嘉教諭

第2次世界大戦

強制連行調査
発掘

市民運動広がる



前回は大幅に上回り81団体450人が参加した「強制連行を考える全国交流集会」

二十七日は西宮市勤労会館で全体集会と十の分科会が開か

軍需、補償…10分科
歴史隠しの壁が厚く

北摂連が、八木米次西宮市長がいちばん本気でさつしたほか、歴史家の朴慶植氏が「強制連行」調査の課手井当で参加した。二日目の二十八日には「朝鮮独立」の文字が残されている西宮市甲陽園の地下軍需工場跡を訪ねてフィールドワーク（現場調査）を行った。献花など追悼のセレモニーと時朗読、独唱のミニコンサートも。

花岡（秋田）事件、土木建設工事と朝鮮人・中国人労働者、炭鉱・鉱山・軍需工場、軍人・軍属・従軍慰安婦、強制労働と戦後補償問題から地

取り組むこの運動の広がりを示した。

昨年の1.5倍

81団体450人参加

同胞、日本人生々しい報告

西宮市で第2回全国交流集会

【神戸】日本の全国各地で調査活動を行っている在日韓国・朝鮮人と日本人のグループ、個人が一堂に会する「朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える全国交流集会」(実行委主催、事務局：神戸青年学生センター)内の第二回目が二十七日、二十八日の両日、西宮市で開催され、昨年八月の第一回名古屋集会(三十団体三百人)を大きく上回る八十一団体四百五十人が参加し、暗い歴史の発掘に

城史のみならず、教育実践、入門講座、映像記録に至る十の分科会構成は、手井当のこの運動の「厚味」を示した。分科会での各報告は、計一万五千人の朝鮮人労働者・家族を動員した日本軽金属(株)富山工場、奥行き百五十メートルのトンネルを計数十本掘りぬいた高槻市成台の旧日本軍工事への三千五百人から二万人の朝鮮人動員など、強制連行期から戦争末期の「本土決戦」準備期までのさまざまな強制労働と犠牲を示すもの。

中には昨年九月から調査を始めた近鉄旧青山トンネル(三重)などの新事実も。しかし、ほとんどのケースで朝鮮人、中国人強制労働の事実が確認されているものの、社史、工事誌には一切記述がなく、犠牲者供養館から名前を削り出し、寺院の過去帳から掘り出すなど、いぜん歴史隠しの壁が厚いことも実感させた。

参加した関係者、日本人たちは「集まって情報交換してみても自分たちのしていることの全体像がよく分かってきた」と感想をのべていた。「私たちの活動の」足跡

が歴史になる」という決意表明が印象的だった。

兵庫 県
在日朝鮮人の

人権を守る会

ニュース

No. 2
1991 年 9 月 日

兵庫県在日朝鮮人の人権を守る会

神戸市中央区中町通三丁目一五番一五号
神戸コーポラス二階
神戸合同法律事務所内
電話〇七八三七一一〇一七二（代）

第二回朝鮮人・中国人強制連行・

強制労働を考える全国交流集会報告

去る七月二七日午後一時から西宮勤労会館で第二回朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える全国交流集会が開かれ、その全体集會に出席しましたので、ご報告します。

今回の全国交流集會は、八六団体の賛同を得て開かれ、後日の報告によりますと延べ五〇〇人の参加があり、おおきな成功をおさめております。

全体集會では歴史家の朴慶植氏の講演が予定されておりました。全体集會には、西宮市長（代理）などの挨拶があり、また講演の前後に各地で朝鮮人・中国人の強制連行・強制労働に取り組んでいる団体約四〇団体がその取組の実情などについて、三分間スピーチを行いました。

朴慶植氏の講演の内容を詳しく報告します。朴氏は「強制連行調査の課題と展望」と題して講演を行いました。まず、最初に強制連行調査の意義についてふれ、日本の植民地支配、侵略戦争の影に隠れて、強制連行の事実が隠されてきており、この問題に対する歴史的認識を改める必要があること、一人一人の問題として認識しなければならぬこと、戦後四〇年を経過し、日本当局はこの問題をひた隠しにしようとしており、歴史を風化させないためにも、当局との戦いにより、実態を明らかにする意義は大きく、

また体験者の高齢化が進んでおり、証拠収拾が一層難しい現状になってきており、短期間での調査が不可欠であることを強調していました。調査の課題についてですが、ひとつは調査を通して、日本の強制連行政策を明らかにすることであり、また強制連行は日本本土に対するものだけでなく、中国北部や南方、サハリン、千島列島への強制連行も行われており、この実態もひろくおおよけにしていくなければなりません。強制連行は強制労働だけでなく、従軍慰安婦としての強制連行もあり、また炭鉱、軍事工場などには厚生省の指示により慰安所が設けられ、そのための強制連行もあり、これらの実態を明らかにすることも重大なことであり、また、それから、強制連行数の調査も不可欠であり、朝鮮総督府の報告があり、これらからできるだけ正確な数字を調査していくことも重要であり、連行方法も軍隊による連行、暴力による連行など様々あり、この実態も十分に調査する必要があります。連行数については、政府、公共団体、企業などからの資料収集が大事であり、これへの取組が重要であります。現在一五府県が公表しているが、これを更に広げていくことが必要です。また、体験談の収集は高齢化して

いる現状から急がなければならないのは当然ですが、これまでは強制連行された人々の体験談は多数存在しているが、強制連行した日本人の側からの証言が不足していることが指摘されています。協和会や特高からの証言は是非とも獲得しなければならず、これらの取組に力を入れる必要があります。また、軍事工場、地下工場、炭鉱、鉱山の実態調査も続けていく必要があります。これらの施設を保存し、後世に伝えていくような取組も不可欠な課題であります。最後に強制連行により、被害を被った者に対する戦後補償の要求も重大な課題として提起されました。

朴氏は講演はその後に予定されている分科会のために非常に制約された時間内になされましたが、今報告したように、非常に中身の濃いものであり、今後この問題に取り組む視点などを的確に指摘して、非常に意義深かったものであります。引き続き分科会がひらかれましたが、都合で参加できませんでしたが、分科会は全部で十分分科会が設けられ、入門講座からビデオなど多彩な内容の分科会が予定されていました。なお、第三回の交流集會は来年広島で開催することが決まっております。人権を守る会としても、本集會の意義を考え、今後とも右集會の成功に協力していく必要を痛感しました。また、守る会独自でも、強制連行・強制労働、戦後補償の問題について、今後どのような取り組みができるかについて、検討していきたいと考えております。



第二次大戦中、日本帝国主義は、日本の民衆だけでなく、植民地朝鮮の民衆も侵略戦争に強制動員した。朝鮮人男子を日本軍の兵士として徴集したのをはじめとして、軍属への徴用や国家総動員計画の労務動員によって、計画的で集団的に連行したのである。さらには、「満州」への開拓移民や、はては朝鮮人女性の勤労挺身隊や従軍慰安婦にまで及んだ。

このような戦時における朝鮮人動員は、その民族支配関係のなかで強制力の強さと、朝鮮から日本、樺太、南方へという移動の遠方性から、一般に「強制連行」政策と呼ばれている。

日本の敗戦後、このような植民地民衆の戦争動員に対しても、日本の国家は戦争責任を問われるはずであった。しかし、まともな戦争処理は何ひとつとして十分になされなかったと言つてよい。

何のために朝鮮人「強制連行」の実態調査するのか

キム ヨン ダル
金 英 達 (むくげの会)

戦後半世紀近くたつて、近年ようやく朝鮮人戦時動員に対する戦後処理を問う動きが、朝鮮本国でも日本国内でも盛り上がりつつきた。それは、大戦中に動員された当事者やその家族が、直接に声を挙げはじめたからである。

戦後処理とは、過去の侵略戦争や植民地支配の歴史を清算して、新しい隣国関係をつくっていくことである。具体的には、帝国主義讚美の歴史観を改め、侵略と他民族支配の罪過を認めて謝罪し、与えた損害を賠償して、友好善隣関係を築きあげていくことだ。

そのためには、まず、過去の歴史的事実を明確にしなければならないだろう。その一つが、「強制連行」政策の真相究明である。本来ならば、このような歴史の調査研究は、政策遂行の主体であった日本政府が率先して行うべきことであるが、敗戦後このかた日本政府にそのような姿勢は見受けられない。

日本において、朝鮮人「強制連行」史を記述してきたのは、商売をしながら、あるいは勤務のかたわら、地域において資料の

断片を収集し、現地調査をし、聞き取りを続けてきた在日朝鮮人と日本人の草の根の研究者であり、グループであった。歴史の真実を明らかにすることによって、帝国主義の歴史観を改めさせ、社会を変革していく一つの力となるんだという確固たる目的意識が、その地道な活動を支えていると言える。

その歴史調査は、たんに日本政府に戦後処理の実行を迫るための証拠集めをしているのではない。それは、在日朝鮮人にとって、同胞社会の民族的な結束軸の一つとなりうる歴史意識の共有のためでもある。在日朝鮮人一世たちの苦難、たくましい生活、果敢な運動の足跡をたどり、掘り返して、自らの民族意識の糧とするとともに、次の世代に語り継いでいきたいのである。もちろん、第二次大戦中の朝鮮人戦時動員は、その語り継ぐべき民族史の一コマにすぎず、私たちの調査研究の課題は多い。地域に共に生活し、日本社会の変革をめざす日本人とともに、これからも在日朝鮮人の歴史の掘り起こしを続けていきたい。

天皇制の侵略・戦争責任の追及を！

―第二回「朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を 考える全国交流集会」に参加して―

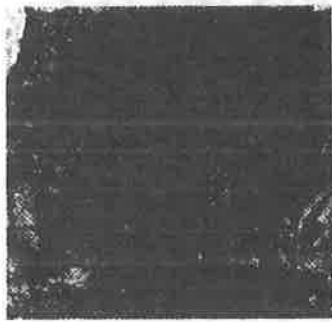
第二回「朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を
考える全国交流集会」が七月二七―二
八日に兵庫県西宮市で開かれ
た。昨午名古屋での第一回交
流集会は賛同団体三一、参加
者約三百人だったが、今回は
八二団体・約五百人にふえ、
「強制連行・強制労働の真実
を掘り起こし、日本のアジア
侵略の歴史の一面を究明」し
ようという取り組みが運動と
して拡がっていることを感じ
た。

第二回「朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を
考える全国交流集会」が七月二七―二
八日に兵庫県西宮市で開かれ
た。昨午名古屋での第一回交
流集会は賛同団体三一、参加
者約三百人だったが、今回は
八二団体・約五百人にふえ、
「強制連行・強制労働の真実
を掘り起こし、日本のアジア
侵略の歴史の一面を究明」し
ようという取り組みが運動と
して拡がっていることを感じ
た。

日本人自身の手で強制連
行政策の暴露・告発を

「強制連行」調査の課題
と展望」と題した記念講演で、
朴慶植さんは、なぜ、いま調

一日目は、全国各地で調査
活動を続けている個人・グル
ープの報告、記念講演、分科
会。二日目はフィールドワー
クと「アリランのうた」オキ
ナワからの証言（朴壽南さん



西宮市甲陽園の地下工場跡

の、戦後四五年
間無視されてきた。
この十年間、市民
の手で発掘が積み
重ねられてきたが、
日本政府が明らか
にしている事が多
く、まだまだ全
貌がわからない。
だからこそ、この
取り組みは運動で
あり闘いなのだ。

歴史的証人たちが亡くなって
いき、証拠物件もなくなつて
いく現実のなかで、私たちに
は悠長にしている時間は残さ
れていない」と。
朴さんがあげた課題は、何
よりも日本政府がかくしてい
る強制連行政策の全貌を明ら
かにすることだ。とくに、
炭鉱・土木工事・軍需工場
などへの労働動員に関しては
明らかにしつつあるが、軍
人・軍属・従軍慰安婦など軍
務動員に関してはほとんどわ
かっていない。これらについ
て、日本政府や企業に動員名
簿の公開を迫る運動をつくっ
ていかねばならない。しかし、
問題は動員にかかわった日本
人が証言・告発すればわかる

ことであり、こうすることが
本日の日本人となるきっかけ
ではないのか。朴さんの話
は終始静かな口調ながら、そ
の内容は私たち日本人に對す
る厳しい糾弾であった。

現在も変わらない性侵略
としての「従軍慰安婦」

分科会は「軍人・軍属・従
軍慰安婦」問題に参加した。

「従軍慰安婦」制度は一九三
八年に上海で日本軍司令部に
よって開設されたことに始ま
るが、その背景は南京大虐殺
や日中戦争の長期化にともな
って「皇軍」の強姦がさまざま
に、軍隊内で性処理する必
要に迫られたためである。そ
こには現在も何も変わってい
ない性差別・性侵略があり、
「従軍慰安婦」問題を明らか
にしないのは、日本人の男
を糾弾しない私たちが日本人
の女の問題でもあるのだ。

現在の帝国主義侵略を
撃つ闘いとして

二日目、フィールドワーク
として西宮市甲陽園の地下工
場跡を見学した。川西航空機
（現在の新明和工業）の地下
工場として建設されたが、戦
局の急迫のなかで大阪海軍警
備府の司令室に転用されたも
のいわれ、また、工事を進め
たのはほとんど朝鮮人である
が、その数も五百人とも二千
人ともいわれ、全貌はわかっ
ていない。

日本の敗戦によって工事を
放棄したことがわかるトンネ

ルの壁に墨で書かれた文字は、
ほとんど消えかかって判読不
明にもかかわらず、「朝鮮國
獨立」と「緑の春」の文字だ
けははっきりと読みとれる。
激しい強制労働をいられた
彼らが八・一五を迎えた解放
の喜びと希望を表したものに
違いない。ひんやりとした空
気の中に、今でも彼らの「恨
が息づいて、無言の告発を続
けている。」

こうした地下施設は全国に
三千カ所以上ある。閑静な住
宅地の地下に、強制労働でつ
くられたトンネル。これは現
在も何の痛痒を感じることな
くアジア・第三世界を侵略し
続けている日本を象徴してい
る。一番問題なのは、その侵
略によって今の日本の「豊か
さ」ができてあがっているのに、
日本人がその認識をもってい
ないことだ。

交流集会是来年広島で開く
ことを確認して終わったが、
天皇アキヒトが戦争・侵略責
任に類かむりをしたとまで、ア
ジア三国に踏みこむようとい
う今、こうした運動は現在の
日本の帝国主義侵略を撃つ
闘いとして私たち日本人自身
にとって重要であることを強
く実感した。

（兵庫・看護労働者・前田）

若い世代も意欲的

各地上で運動 様子知る人がいるうちに



戦時中の強制連行の実態を解き明かそうという動きが全国に広がっている。各地の市民団体の努力で、強制労働の工事現場跡や資料が次々に発掘されているものの、戦後半世紀近くたって当時の様子を知らない人が少なく、真相究明に危機感を持つ人も多い。

このほど兵庫県西宮市で開かれた「第二回朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える全国交流集会」では、強制連行の実態を次の世代に伝えていくための各地の取り組みが紹介された。

強制連行された人の総数は米国の調査で約七十七万人、実際には百万人を超えるともいわれる。しかし、昨年八月に国が発表した名簿は八万人分弱しかなく、

調査に対する国の消極的な姿勢が批判を浴びた。約四百人が参加した同集会で、記念講演した歴史家

朴慶植さんは「侵略戦争を繰り返さないために、連行の歴史の発掘を」と早急な調査の重要性を訴えた。

連行の歴史を子供たちにどう伝えるかを探る「教育実践」分科会では岡山県立玉野光南高の青木康嘉教諭が、地元の三井造船で強制労働させられた「協和隊」隊員らの証言を、生徒たちがクラブ活動で集めたことを報告。



強制連行の歴史を次の世代へ伝える方法を探った「教育実践」分科会＝7月27日、兵庫県西宮市の市立勤労会館

中、高校生と韓国や国内の関係地を訪ねる「強制連行の足跡を若者とたどる旅」（北九州市）代表の加藤慶二さんは「現地で被害者の話を聞く苦しみの中で、知らないことは罪なんだと学んでいく」と、実践活動の大切さを語った。

会場からは兵庫県の予備校教師が「報告はいつでも活動など。授業で取り上げられないか」と問題提起。加藤さんが「今の文部省の姿勢では公教育に期待できない面もある。自分たちが見てきた事実を多くの人に広げるのは大変だ」と訴えた。

これに対し、西宮市では市教組が在日韓国・朝鮮人の人権を扱った小冊子を発行、授業で使っている例などが紹介され「活動が学校内で自由にできる職場の雰囲気づくりが重要。外国人を排除している教員採用試験の段階から根本的に直す必要がある」と指摘する声が上がった。

第2回 朝鮮人・中国人

—— 強制連行・強制労働を考える全国交流会参加報告 ——

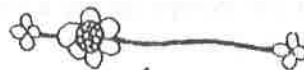
7月27、28日「旅」の資料準備に一区切りをつけて西宮市で行われた集会に参加した。

昨年、名古屋市で行われた300名の集会が今回500名にもふくらみ、地元事務局と参加者の紅潮した顔が会場を埋めていた。全国各地で調査活動、教育活動を行っている個人・グループが経験を交流し知識を提供しあうこと、活動の手法を学びあうこと、政府・自治体・企業に対して資料を公開させていくための運動力量の結集、学校教育・社会教育の実践報告等幅広い目的を持つ大会だった。朴慶植氏の記念講演をはさんだ3分間スピーチにはいくつの団体・個人が登壇したのだろうか。40数団体を越えていただろう。そんな運動がそんなにも地道にと思わずにいられない発表がつづいた。「たどる旅」も3分間を精一杯つかって話した。分科会は10会に分かれており「たどる旅」は第七分科会「教育実践」で発表した。教師の方々は学校教育の中で「強制連行・強制労働」を生徒にどう展開してゆくか熱心な発表と討議が続いた。もちろん「たどる旅」は社会教育という立場で話をしてみた。

2日目は映画「アリランのうた」の上映のあと、フィールドワークで「甲陽園地下工場」を現地学習した。米軍機の本土空襲が激化する中で川西航空機がつくった5つの地下工場の一つである。現場で労働させられたほとんどは朝鮮人だといわれるがその実数はわからないという。「朝鮮国独立」と岸壁に書かれた文字が鮮やかに残っていた。8月15日直後書かれたものであろう。参加者はトンネル内で献花・詩朗読・独唱の追悼セレモニーを行った。

思えば集会で初めてお会いした人々から、今度の旅の最中、所々でお世話になった。堤岩里(チェムニ)で通訳下さった金(キム)氏を同道して下さった本田栄一氏、ソウルで通訳ボランティアして下さった是石貴代氏、熊本の上鹿の地下工場跡を案内して下さった脇元公明氏などなど。「旅」は見知らぬ人の手で支えられている。

第三回の交流集会は92年7月25日、26日に広島市で行われる。今から予定され出席されることをおすすしたい。(加藤慶二)



‘朝鮮國 獨立’이라는 글자가 새겨져 있는 지하공장 견학기

김민영(일본사가대학 경제학과 연구유학중)

일본에 온지 어언 십 여개월, 하루가 새로운 느낌의 시간들이었다. 한국 근현대경제사(일제시대)를 전공으로 하고 있는 필자로서는 더욱 커다란 깨달음의 시간들이었다. 왜냐하면, 1910년 한일합방으로부터 81년, 1945년 해방으로부터 46년이 지난 오늘에도 일본의 각지에는, 식민지 시대의 상흔들이 여기저기에 방치되어 있었기 때문이다.

특히 1939년부터 1945년에 걸쳐, 일제의 부족한 노동력 보충을 위해 무자비하게 강제동원 당해, 노동수탈 속에서 숨겨진 수 많은 우리 동포들의 유골은 북해도, 구주 지역의 탄광지대라면 어디에서도 쉽게 발견되어 진다.

한번 이에 대해서는, 물론 뜻있는 재일한국 조선인 2세, 일본인들이 중심이 되어 실태조사, 연구작업 등이 진행되어 가면서 그 진실이 하나 하나 밝혀져 가고 있지만, 아직도 많은 사실이 무관심 속에 묻혀져 있는 현실이다.

그 조사, 연구작업의 가장 큰 구심체가 「조선인, 중국인의 강제연행, 강제노동을 생각하는 전국 교류 집회」이다. 작년에 나고야에서 제1회 대회가 개최되었고, 금년은 효고현의 니시노미야에서 제2회 대회가 개최되었다. 이번 대회는 지난 7월 27일, 28일 양일간 열렸는데, 일본 전국에서 강제연행 관계 조사·연구를 하고 있는 85개 단체, 500여명이 참가하여 최근의 이 문제에 대한 관심을 잘 반영해 주고 있었다.

일반적으로 강제연행은 탄광, 광산, 군수공장, 토목 건설공장, 지하공장 등의 노무동원과 군인, 군속,

굴 안쪽에 공장입구가 보인다. (?)

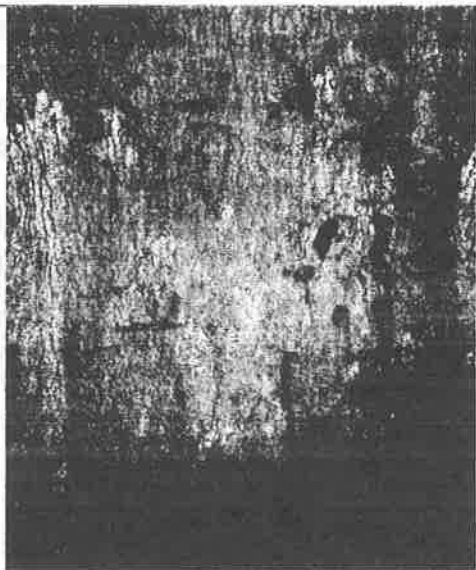
중군위안부 등의 군무동원 등으로 대별된다. 특히 태평양전쟁 말기의 지하공장, 지하군수시설 건설공사에의 강제연행, 강제노동에 대해서는 최근 조사, 연구가 급속히 진행되고 있다.

이번에 견학했던 곳은 효고현 니시노미야시 교요엔에 있는 지하공장터로, 무모한 침략전쟁의 말로와 함께 희생된 조선인 노동자의 원한 맺힌 절규가 여기저기에 스며있었다.

잘 단장된 고급 주택가의 한 담벼락 틈을 겨우 끼어 들어 간 곳에, 커다란 입구가 있었고, 그로부터 50여미터, 다시 오른쪽으로 40여미터, 그 곳에서 공사는 중단되어 있었다. 공사는 크게 굴착, 흙 운반, 동굴벽의 미장 등 3단계로 진행되었던 것 같다고 안내인이 설명해 주었다. 강제연행된 조선인이 이 공사에 몇 사람 투입되었는지 알 수는 없지만, 이 공사에 동원된 조선인 노동자도 인간 이하의 노동조건 속에서 혹사당했다는 것은 밀힐 나위도 없을 것이다.

인근 지역에서도 손 꼽히는 고급 주택지로 알려져 있는 이곳. 그 땅속에서 역사의 진실을 고히 간직하며 잠자고 있었던 이 지하공장이 사람들의 눈 앞에 그 모습을 드러냈던 것은 1987년 가을이었다고 한다. 특히 이곳이 인근 7개 지하공장터 가운데 가장 난공사였다고 하는데, 한번 굴 안에 들어 가 보면 금방 상상이 된다. 암절은 이곳 특유의 화강암으로 단단하여 굴착이 어려웠고, 산의 경사면에 단층이 있어 때때로 균열이나 낙반의 위험도 많았다고 한다.

한 여름인데도 바깥의 기온이 34~35도를 오르내리는 날씨여서 굴 내부는 시원함을 지나쳐 한기마저 느껴졌다. 공사가 중단된 가장 안 쪽에는 지하수가 스며 나온 것인지 상당량의 물이 고여 있었고, 동굴벽의 곡괭이 자국은 으시시함마저 자아내고 있었다.



동굴 한쪽 구석에 쓰여진 '朝鮮國獨立'은 오늘날 국적을 상실한 채 살아가는 우리를 꾸짖고 있었다.

행선지도 전혀 모른 채 강제연행되어 끌려 온 조선인 노동자들은 바로 이 어려운 공사장에서 노예처럼 혹사당하고 있었던 것이다.

그런데 놀라운 것은, 동굴벽의 한 후미진 구석에 조선인의 이름이나 성씨인 듯한 낙서 따위가 있었고, 그 옆에 희미하나마 확실하게 朝鮮國獨立이라는 글씨가 적혀져 있었다. 즉 강제연행된 조선인 노동자들은 인간 이하의 열악한 노동조건 속에서도 나라의 독립을 생각하고 있었던 것이다.

흔히들 강제연행되었던 조선인 노동자들은 계급의식이나 민족의식이 약했다고들 말하고 있다. 따라서 노동조건에 불만이 있더라도 일시적인 쟁의에 그쳤고 더우기 독립운동 등은 상상도 할 수 없었다는 지적이 있어 왔다.

하지만 생존자들로부터의 증언이나 당시 일제측 자료에 의하더라도, 조선인 노동자들은 폭압적인 파쇼정치하에서 도망 등의 소극적인 저항 뿐 아니라, 태업, 파업 등 적극적인 저항을 하고 있었고, 조직적인 형태를 취한 경우도 있었다는 것을 확인할 수 있다. 그리고 무엇보다도 중요한 것은 도망하고 태업하고 파업 등을 하면서, 마음 한 곳에서는 늘 조국의 독립을 생각하고 있었다는 점이다.

그러한 의미에서 이 지하공장터의 동굴 벽에 써

있었던 朝鮮國獨立이라는 문자는 매우 중요한 의미를 갖는 것이었다.

이번 모임의 참가자가 500여명에 달했기 때문에 견학은 두 개의 반으로 나뉘어, 안내자의 통제하에 질서정연하게 이루어 졌다. 안내자는 무전기까지 휴대하고 있었다.

동굴 안에서는 간단한 의식이 행해졌다. 헌화에 이어 아코디언의 멜로디에 맞추어 시 낭송도 있었다. 한복으로 차려입은 재일동포 3세 아가씨가 한 차례는 우리 말로, 한 차례는 일본 말로 노래를 불렀다. 노래는 일제하 우리 민족의 한을 상징하는 「울 밑에 선 봉선화」였다.

울 밑에 선 봉선화야, 네 모양이 처량하다로 시작되는 이 노래는 아코디언의 멜로디와 조화를 이루며 굴 안에 메아리되어 울려 퍼졌고, 듣는 이로 하여금 눈물을 자아내기에 충분하였다.

한시간여의 지하터널 견학을 마치고 굴 밖으로 나왔다. 밖에 나와서 보니, 새삼 주변은 마치 일본의 경제적 부를 상징이나 한듯한 고급 주택가의 한도통이로 골안의 풍경과는 너무나 대조적이었다. 그 지하에 이와 같은 엄청난 역사의 비밀이 숨겨져 있는지 그 누구라도 지나쳐 버리기 쉬운 곳이었다.

조선인 강제연행, 지하 공장터, 강한 암질의 화강암석, 곡괭이 자국, 낙반 사고, 굴 벽면의 글자들, 朝鮮國獨立, 울 밑에 선 봉선화, 잘 꾸며진 주택가, 이런 것들을 마치 파노라마처럼 연상하며 영화 「아리랑의 노래」가 상영되는 다음 장소로 무거운 마음을 옮겼다.

한일합방으로부터 81년, 해방으로부터 46년, 한일 국교정상화로부터 26년이 이 여름, 우리는 다시 무엇을 생각해야 하는가.

일본의 전국 각지에서 강제연행, 강제노동문제에 대한 조사, 연구활동을 하고 있는 단체 가운데 85개여 단체, 500여명이 모인 이번 모임의 성과를 되새기며 우리는 도대체 무엇을 하고 있는가를 다시금 생각해 본다.

일본의 시민단체, 연구단체가 이처럼 조사연구작업을 하고 있을 때, 당사자인 우리는 무엇을 하고 있는가. 이 여름, 다시 강제연행, 강제노동과 전후보상 문제를 생각하며, 새삼스럽게 전국가적 관심의 고양을 호소해 본다.■

【訳文】(『正平消息』1991年9月)

“朝鮮國 獨立”という文字が 刻まれている地下工場見学記

金旻榮 (キム・ミニョン、佐賀大学経済
学科研究留学中)

日本に来てからいつのまにか10余ヶ月、毎日が新しく感じられる日々であった。韓国近現代経済史(日帝時代)を専攻している筆者にとって、さらに大きく目を開かれる日々でもあった。なぜかといえば、1910年の韓日併合から81年、1945年の解放から46年が経過した今日でも、日本の各地では植民地時代の傷跡があちこちに放置されていたためだ。

とくに1939年から1945年にわたり、不足する労働力を補充するために日帝によって無慈悲に強制動員され、労働収奪の中で息をひきとっていった数多くのわが同胞たちの遺骨は、北海道、九州の炭坑地帯であればどこでも容易に発見されている。

一方、これについては、もちろん意識ある在日韓国・朝鮮人2世、日本人たちが中心となって実地調査、研究作業などが進められ、その真実がひとつひとつ明らかになっているが、まだ多くの事実が無関心のなかに埋もれているのも現実だ。

その調査、研究作業のもっとも大きな求心体が、「朝鮮人・中国人の強制連行、強制労働を考える全国交流集会」である。昨年名古屋で第1回大会が開催され、ことしは兵庫県の西宮で第2回大会が開催された。この大会はさる7月27日、28日の両日開かれたが、日本全国から強制連行関係の調査、研究をしている85団体、500余名が参加し、最近のこの問題に対する関心をよく反映していた。

一般的に強制連行は炭坑、鉱山、軍需工場、土木建設工場、地下工場などへの労務動員

と、軍人、軍属、従軍慰安婦などへの軍務動員に大別される。とくに太平洋戦争末期の地下工場、地下軍需施設建設工事への強制連行、強制労働については、最近、調査、研究が急速に進んでいる。

こんど見学したのは、兵庫県西宮市甲陽園にある地下工場跡で、無謀な侵略戦争の末路とともに犠牲となった朝鮮の労働者の怨恨に満ちた絶叫が、あちこちにしみ込んでいる。

きれいに化粧された高級住宅街のとある垣根の隙間にやっとのことで入り込んだところに、大きな入り口があり、そこから50メートル、ふたたび右へ40メートル、そこで工事は中断されていた。工事は大きく掘削、土運搬、洞窟壁の美粧の3段階で進行されていたようだ、案内人が説明してくれた。強制連行された朝鮮人が、この工事に何名投入されていたかは分からないが、この工事に動員された朝鮮人労働者も、人間以下の労働条件の中で酷使されたということは言うまでもないことであろう。

近隣の地域でも指折りの高級住宅地としてしられているこの場所。その土地の中で歴史の真実を大事にしまい込んで眠っていたこの地下工場が、人々の目の前にその姿を現したのは、1987年の秋だったという。とくに、この近くの7ヵ所の地下工場のうちもっとも難工事だったというが、いちどトンネルの中に入ってみればすぐに想像できる。岩質はこの地特有の花崗岩で固くて掘削が難しく、山の傾斜面に断層があり、時には亀裂や落盤の危険も多かったという。

真夏だから外の気温は34~35度を上下しているのに、トンネル内はすずしさを乗り越して寒気さえ感じられた。工事が中断された最深部には、地下水が湧き出たのか相当量の水がたまっており、トンネルの壁のつるはしの跡は、体をぞくぞくとまでさせるものであ

った。行先地もまったく知らないまま強制連行され引っ張られてきた朝鮮人労働者たちは、まさにこの困難な工事場で奴隷のように酷使されていたのである。

ところで驚くべきことは、トンネル壁のある奥まった隅に朝鮮人の名前や宋氏のような落書きのたぐいがあり、その横にうっすらではあるが確実に朝鮮國獨立という文字が記されていた。すなわち、強制連行された朝鮮人労働者たちは人間以下の劣悪な労働条件の中でも国の独立を思っていたのだ。

強制連行された朝鮮人労働者たちは、階級意識や民族意識が弱かったとよく言われている。したがって労働条件に不満があっても一時的な争議にとどまり、独立運動などは想像もできないという指摘がされてきた。

しかし、生存者たちからの証言や、当時の日帝側資料によっても、朝鮮人労働者は暴圧的なファッショ政治下で逃亡などの消極的な抵抗のみならず、怠業、罷業など積極的抵抗をしており、組織的な形態をとった場合もあったことが確認できる。そして、何よりも重要なことは、逃亡、怠業、罷業しながら、心の片隅ではいつも祖国の独立を考えていたという点だ。

そうした意味で、この地下工場跡の洞窟の壁に書かれていた朝鮮國獨立という文字は、非常に重要な意味をもつのである。

こんどの集会の参加者は500名に達したため、見学は2つの班に分かれ、案内者の統制のもとに秩序整然と行われた。案内者は無線機まで携帯していた。

洞窟内では簡単な儀式が行われた。献花に続いてアコーディオンのメロディーに合わせた詩の朗誦があった。朝鮮服を着た在日同胞三世の娘さんが朝鮮語と日本語を交互で歌を歌った。歌は日帝下のわが民族の恨を象徴する「鳳仙花」であった。

垣根のそばに咲く鳳仙花よ、おまえの姿が哀れなり、で始まるこの歌は、アコーディオンのメロディーと調和し、洞窟内にこだまして広がり、聴く人の涙をさそった。

1時間余りの地下トンネル見学を終え、トンネルの外へ出た。外に出てみると、周辺は再び、まるで日本の経済的富を象徴でもするかのような高級住宅街の一角で、トンネル内の風景とはあまりに対象的であった。その地下にこのようなとんでもない歴史の秘密が隠されているとは、誰も夢にも思わないようなところであった。

朝鮮人強制連行、地下工場跡、硬い岩質の花崗岩石、つるはしの跡、落盤事故、洞窟壁面の文字、朝鮮國獨立、垣根のそばに咲く鳳仙花、きれいに整った住宅街、こうした事をまるでパノラマのように連想し、映画「アリアランの歌」が上映される次の場所に、重い心移した。

韓日併合から81年、解放から46年、韓日国交正常化から26年のこの夏、われわれは再び何を考えなければならないのか。

日本の全国各地で強制連行、強制労働問題に対する調査、研究活動している団体のうち85団体500名が集まったこんどの集会の成果を踏まえ、われわれはいったい何をしているのかを再び考えてみる。

日本の市民団体、研究団体がこのように調査研究作業をしているとき、当事者であるわれわれは何をしていたのか。この夏、再び強制連行、強制労働と戦後補償問題を考え、あらためて国家的関心の高揚を訴えてみる。

第2回交流集会賛同団体リスト (50音順)

愛知県下の朝鮮人強制連行歴史調査班

〒464 名古屋市千種区希望ヶ丘1-5-37 高橋気付 ☎052-762-1528

アジア・太平洋地域の戦争犠牲者に思いを馳せ心に刻む会

〒556 大阪市浪速区塩草2-2-1 ニュートンマンション401号 ☎ 06-562-7740

アジア問題研究会

〒101 東京都千代田区猿樂町2-5-8 葵ビル301 ☎03-3291-3774

アジア・フレンド

〒557 大阪市西成区萩之茶屋2-8-9 旅路の里気付 ☎ 06-634-2127

あるすの会

〒461 名古屋市東区葵2-6-29 福信館気付 ☎052-935-9448

ウリ文化研究所 (大阪)

大阪市生野区中川西2-6-10 KCC内 ☎ 06-717-2653

大阪府朝鮮人強制連行真相調査団

〒530 大阪市北区西天満6-6-11 高千穂ビル2F 空野法律事務所 ☎ 06-361-5488

(南)大塚物産附属朝鮮研究所

〒970-11 福島県いわき市好間町中好間照田40 ☎0246-36-2357

外国籍市民の人権を考える八王子の会

〒193 八王子市めじろ台2-1 A404 豊島方 ☎0426-64-1656

外登法抜本改正・民族差別撤廃をめざす福岡の会

〒811-01 福岡県糟屋郡新宮町上府1592-426 李幸宏気付 ☎092-963-2684

外登法問題と人権を考える会

〒540 大阪市中央区玉造2-24-22 大阪トリック神学院内 ☎ 06-941-9700

亀島山地下工場を語りつぐ会

岡山県倉敷市水島南春日町23-1 倉敷医療生活協同組合内 ☎0864-48-6210

韓国の原爆被害者を救援する市民の会

〒565 吹田市山田西 2-9-A1-303 ☎ 06-878-7534

旧中島飛行機太田地下工場を保存する会 (トンネルの会)

群馬県太田市八幡町36-30 紋 治呂方 ☎0276-22-1526

強制連行の足跡を若者とたどる旅

〒806 福岡県北九州市八幡西区西神原町4-22 ☎093-521-2073

強制連行問題全国連絡会議

東京都千代田区永田町1-8-1 社会文化会館内 ☎03-3502-4040

神戸学生青年センター

〒657 神戸市灘区山田町3-1-1 ☎078-851-2760

国際在日韓国・朝鮮人研究会

〒542大阪市中央区上本町西5-2-8-201 コリアファミリー・サークル気付 ☎ 06-762-0300

在日韓国・朝鮮人の人権を考える会

〒518-01 三重県上野市下郡53-3 竹本 昇方 ☎0595-36-2167

在日韓国研究所 (HANYUN)

〒543 大阪市天王寺区玉造元町4-2 ☎ 06-765-9326

- 在日韓国青年連合（韓青連）
〒544 大阪市生野区桃谷1-7-16 ☎ 06-718-0581
- 在日韓国民主女性会
〒101 東京都千代田区神田小川町3-6-8 伸幸ビル5階 ☎ 03-3295-2638
- 在日韓国民主人権協議会（民権協）
〒113 東京都文京区本郷2-26-9 鈴木ビル4F ☎ 03-5689-8638
- 在日韓国民主統一聯合
〒101 東京都千代田区神田小川町3-6-8 伸幸ビル5階 ☎ 03-3292-0671
- 在日朝鮮人作家を読む会
〒452 愛知県西春日井郡枇杷島町大和町152 磯貝治良方 ☎ 052-502-6599
- 在日朝鮮人運動史研究会・関東部会
〒182 東京都調布市深大寺元町1-24-3 777問題研究所内 ☎ 0424-82-7012
- 在日朝鮮人運動史研究会・関西部会
〒654 神戸市須磨区須磨寺町4-3-1 マインド青丘ビル2階 青丘文庫内 ☎ 078-734-5989
- 在日の戦後補償を求める会
神奈川県川崎市桜本1-8-22 ☎ 044-288-2997
- 在日ハン民族問題研究所
〒554 大阪市此花区高見1-3-31-1202 ☎ 06-461-0456
- 相模湖ダムの歴史を記録する会
〒199-02 神奈川県津久井郡藤野町佐野川3387-4 高村方 ☎ 04268-7-2142
- 兵庫県韓国人三民会
〒653 神戸市長田区大道通4-3-2 ☎ 078-612-6660
- 地上げ反対！ウトロを守る会
〒611 京都府宇治市小倉町西山74-19 横川栄次方 ☎ 0774-21-3787
- 四国学院労働組合
〒765 香川県善通寺市文京町3-2-1 ☎ 0877-62-2111
- 篠ノ井旭高校郷土班
長野市篠ノ井御幣川1045 ☎ 0262-92-0726
- 指紋カードをなくせ！90年協議会
東京都千代田区三崎町2-2-13 信愛ビル502 ☎ 03-3221-8086
- 指紋押捺制度を考える熊本の会
〒860 熊本市手取本町8-3 熊本県同教気付 ☎ 096-325-2433
- 従軍慰安婦問題を考える会
大阪市福島区大開4-3-2-305 ☎ 06-461-5325
- 従軍慰安婦問題を考える在日同胞女性の会
〒157 東京都世田谷区南烏山2-36-20 第1乙黒ビル4階気付 ☎ 03-3300-4157
- 鐘声の会
〒174 東京都板橋区東山町36-10 若竹荘5号 高柳方 ☎ 03-3958-1987
- 千葉県朝鮮人強制連行真相調査団
〒280 千葉市中央1-13-20 千葉県教育会館内
- 徳島県朝鮮人強制連行真相調査団
〒770 徳島県徳島市万代町5-1-7 在日朝鮮人総聯合会徳島県本部内、
青丘文化ホール
〒543 大阪市天王寺区寺田町2-8-28 ☎ 06-779-5751

聖和社会館

〒544 大阪市生野区桃谷5-10-29

☎ 06-741-0650

戦後補償問題研究会

〒162 東京都新宿区四谷3-3 エスパコンセル701 刈法律事務所内

☎ 03-3359-8831

戦争の記録を残す西宮市民の会

兵庫県西宮市津門呉羽町9-30 宮林彦吉方

☎ 0798-34-2341

高槻「タチソ戦跡」保存の会

〒569 大阪府高槻市市殿町10-4 宇津木文化研究所内

☎ 0726-82-0668

高槻むくげの会

大阪府高槻市城内町1-35 青少年課分室内

☎ 0726-71-2021

宝塚市教職員組合

兵庫県宝塚市御殿山2-1-2 勤労福祉会館内

中国人強制連行を考える会

東京都港区西新橋1-8-7 藤野ビル2F 新橋法律事務所内

☎ 03-3508-8588

長生炭鉱の“水非常”を歴史に刻む会

〒755 山口県宇部市鍋倉2-2 澄田方

☎ 0836-21-8238

豊橋日中友好協会

〒440-91 愛知県豊橋市 豊橋郵便局私書箱69号

☎ 0532-48-4629

中津川朝鮮人虐殺など調査実行委員会・上越

〒949-31 新潟県中頸城郡大潟町四川屋浜501 佐藤忠治方

☎ 0255-34-3759

奈良県での朝鮮人強制連行等に関わる資料を発掘する会

〒631 奈良市二名町1925-1-4-105 川瀬方

☎ 0742-45-0862

西宮在日韓国朝鮮人教育を考える会

〒662 兵庫県西宮市高座町1-45 太田方

☎ 0798-73-4627

西宮市教職員組合

〒663 兵庫県西宮市津門呉羽町9-30 教育会館内

☎ 0798-34-2341

西宮地方労働組合協議会

〒662 兵庫県西宮市松原町2-37 西宮市立労働会館内

☎ 0798-22-4225

日本基督教団兵庫教区社会部

〒658 神戸市東灘区御影中町2-3-23 クリフン・センター内

☎ 078-856-4127

日本社会党中央本部

〒100 東京都千代田区永田町1-8-1

日本の戦争責任を肩代わりさせられた朝鮮人BC級戦犯を支える会

〒101 東京都千代田区神田神保町1-42 日東ビル2F 梨の木舎気付

☎ 03-3291-8229

<ノーマン南京>名古屋の会

〒467 名古屋市瑞穂区高田町3-28 愛知県立大学 田中宏研究室内

☎ 052-851-2191

八王子の地下壕問題を考える会

〒192 東京都八王子市小門町3-4-101 (株)のんぶる舎内

☎ 0426-23-8197

花岡“蜂起”問題にこだわる会(大阪)

大阪市西成区津守1-13-28 ボッポ気付

☎ 06-561-9372

半田空襲と戦争を記録する会

〒475 愛知県半田市花園町3-12-12 佐藤方

☎ 0569-22-6848

ビッタムの会

名古屋市千種区池上町2-7-1 本橋正男方

☎ 052-781-4690

- ビデオプレス
〒164 東京都中野区中野5-24-16-201 ☎03-3385-6901
- 姫路朝鮮問題研究会
〒670 兵庫県姫路市飾磨区恵美酒600 姫路市教育会館内 ☎0792-35-2020
- 兵庫在日朝鮮人教育を考える会
〒661 兵庫県尼崎市御園2丁目3-10 山崎気付 ☎06-493-3320
- 兵庫朝鮮関係研究会
〒661 兵庫県尼崎市次屋1-16-5 徐根植方 ☎06-499-3449
- 兵庫県・在日朝鮮人の人権を守る会
神戸市中央区中町通3-1-15 神戸コ・ボ・ス2階 神戸合同法律事務所内
- 兵庫在日外国人保護者の会
〒662 兵庫県西宮市結善町4-30 李鐘順方 ☎0798-72-9778
- 日吉台地下壕保存の会
〒223 横浜市港北区下田町3-15-27 寺田方 ☎045-562-1282
- 広島キリスト教社会館
〒733 広島市小河内町1-13-3 ☎082-232-4274
- 広島の強制連行を調査する会
〒731-11 広島市安佐北区安佐町飯室1445-1 山田方 ☎082-835-0221
- 松代大本営の保存をすすめる会
〒380 長野市中御所1-13-3 ☎0262-28-8415
- 松代大本営を考える会
〒162 東京都新宿区市谷台町17-4 山根昌子方 ☎03-3359-6926
- マンガン記念館
〒601-05 京都府北桑田郡京北町字下弓削 ☎07715-4-0307
- マンガン鉱山史を記録する会
〒601-05 京都府北桑田郡京北町字下弓削 丹波マンガン記念館気付 ☎07715-4-0307
- 三重県木本で虐殺された朝鮮人労働者（李基允・裴相度）の追悼碑を建立する会
〒518-04 三重県名張市百合が丘西2-103 斉藤方 ☎05956-3-7919
- 三重在日朝鮮人史研究会
〒514 三重県津市上浜町1-18 上浜荘一号 岡坂方 ☎0592-28-7054
- 南兵庫郵便局部落解放研究会連絡会議
神戸市長田区細田町7-1-40 長田郵便局集配気付 ☎078-642-0503
- ミラノ書店
〒424 静岡県清水市江尻台町13-20 ☎0543-64-0141
- 民族差別と闘う兵庫連絡協議会
〒661 兵庫県尼崎市小中島1丁目17-19 ☎06-492-3272
- むくげの会
〒657 神戸市灘区山田町3-1-1 神戸学生青年センター内 ☎078-851-2760
- 模索舎
東京都新宿区新宿2-4-9 ☎03-3352-3557
- RAIK（在日韓国人問題研究所）
〒169 東京都新宿区西早稲田2-3-18 日本キリスト教会館52号 ☎03-3203-7575
- 6・30花岡の会
広島市西区小川内1-13-3 広島連帯労組内

都道府県別参加者数（有料入場者）

北海道	1	東京都	47	大阪府	111	福岡県	8
青森県	0	新潟県	1	兵庫県	120	佐賀県	3
岩手県	0	富山県	4	奈良県	10	長崎県	1
宮城県	0	石川県	5	和歌山県	6	熊本県	1
秋田県	1	福井県	1	鳥取県	1	大分県	0
山形県	2	山梨県	1	島根県	2	宮崎県	0
福島県	0	長野県	4	岡山県	5	鹿児島県	0
茨城県	0	岐阜県	3	広島県	8	沖縄県	0
栃木県	0	静岡県	4	山口県	4	不 明	23
群馬県	0	愛知県	16	徳島県	0	<計>	458
埼玉県	7	三重県	9	香川県	4		
千葉県	6	滋賀県	3	愛媛県	0		
神奈川県	2	京都府	34	高知県	0		

編集後記

1991年7月27～28日、兵庫県西宮市で開かれた第2回交流集会の報告集ができあがりました。発行が諸般の事情で遅くなってしまいました。

3分間スピーチ、記念講演、入門分科会の講演の文責は編集部にあります。とくに恒例の3分間スピーチは、各地で活動しているグループ、個人のイメージがよく伝わってきます。テープ起こしをして下さった西成子さん、薬師寺小夜子さんに感謝します。分科会の記録は、それぞれ司会者が担当しました。写真は藤田武さんが撮って下さったものです。

この報告集が今後の強制連行・強制労働の調査活動、そして戦後補償を求める活動の一助になることを願っています。

<編集担当> 金英達 飛田雄一

第2回朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える
全国交流集会《報告集》

1992年6月30日発行（1000部）

<編集・発行> 第2回朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える
全国交流集会実行委員会

〒657 神戸市灘区山田町3-1-1（財）神戸学生青年センター内
TEL 078-851-2760 FAX 821-5878

<定価> 1000円

第3回交流集会実行委員会の連絡先

〒731-11 広島市安佐北区安佐飯室1445-1 広島の強制連行を考える会内
TEL 082-835-0221 FAX 082-814-5961